

2015年度 龍谷大学大学院 社会学研究科  
博士課程によらない者の博士（社会学）学位論文

体験の社会学  
—近代スポーツの病理を超えて—

2015年 12月

小丸 超

# 目次

序論 研究の目的	1
第1節 「体験」の擁護	1
第2節 「体験の社会学」を確立するために	3
<序論 注釈>	6
第1章 問題・方法・構成	8
第1節 スポーツの危機	8
1. 1. 近代社会とスポーツ	8
1. 2. 正常と異常	9
1. 3. スポーツと身体	11
第2節 方法	12
2. 1. 「体験」の概念	12
2. 2. 社会化と超社会化という視点	14
第3節 構成	17
<第1章 注釈>	19
第2章 アスリートバーンアウトの概念	21
はじめに	21
第1節 心理学系パラダイム	22
1. 1. ストレスモデル	22
1. 2. 症状による定義と要因の特定作業	24
1. 3. コミットメントモデル	26
第2節 社会学系パラダイム	28
2. 1. 社会的権力モデル	28
2. 1. 役割葛藤モデル	30
第3節 体験論系パラダイム	32
3. 1. 「体験」という視点	33

3. 2. 「エネルギーの空転」という視点	34
おわりに	36
<第2章 注釈>	37
第3章 アスリートにおける「キャリアトランジション問題」	39
はじめに	39
第1節 作業枠組みの構築	40
1. 1. 先行研究の検討	40
1. 2. 超社会化と生命感	42
1. 3. 人間学モデルの提示	44
1. 4. 脱・超社会化と引退過程	46
第2節 事例の分析	47
2. 1. 事例の概要と調査手続き	47
2. 2. 超社会化を導く「体験」の例	47
2. 3. 順路型	48
2. 4. ショートカット型	51
おわりに	53
<第3章 注釈>	55
第4章 方法としての「潜入」	56
はじめに	56
第1節 ガルウェイのコーチング論	57
1. 1. 基本概念	57
1. 2. 集中力の科学	58
1. 3. コーチングの2類型	59
第2節 結城匡啓のコーチング論	61
2. 1. 感覚のイメージ化	61
2. 2. 「潜り込み」という方法	62
第3節 「潜り込み」に関する理論的考察	63
3. 1. ポランニーの暗黙知理論	63

3. 2. ベルクソンの直観論	66
おわりに	68
<第4章 注釈>	69
第5章 「コツをつかむ」とはどういうことか	71
はじめに	71
第1節 「コツ」と「カン」の語義	71
第2節 黒田亮の立体心理学	73
2. 1. 「識」と「覚」	73
2. 2. 那一点の概念	73
2. 3. スポーツ技能への適用可能性	74
2. 4. 直指の概念	75
2. 5. 小括	76
第3節 ベルクソンの「動的図式」論	77
3. 1. 記憶論	77
3. 2. 「動的図式」の概念	78
3. 3. 阿波研造の指導法	80
おわりに	82
<第5章 注釈>	83
結論	85
第1節 議論のまとめ	85
第2節 「体験の社会学」の意義	87
第3節 今後の課題	89
参考文献	92
初出一覧	100

## 序論 研究の目的

### 第1節 「体験」の擁護

「なぜできないのか」。この言葉は、教育の文脈において、特に身体教育の場でしばしば耳にする言葉である。問いかけの声なのか、叱責の声なのか、あるいは諦めの声なのか、それはともかくも、多くの人は大して気にも留めないことだろう。しかし、筆者は——おそらく少数派であろうが——この言葉を聞くたびに常に違和感を覚えてきた。違和感は概して一種の反発をともなっている。すなわち、この言葉を聞くたびに「そんなこと言われても、できないものはできないのだ」と反論したくなるのである。単なる屁理屈だと言われるかもしれない。そして、今度は「努力が足りないのだ」と再反論されることだろう。確かにそうかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、こうした反論は、本当に単なる屁理屈として片づけて良いものなのだろうか。「できないものはできない」という論理は経験的に誰しも了解していることではないだろうか。とするならば、この屁理屈は、実は、正しいのではないだろうか。

「なぜできないのか」という言葉の前には、概して2つの言葉が隠されているように思われる。その1つは「わかっているのに」という言葉である。すなわち「わかっているのになぜできないのか」というわけだ。この言明は「わかる＝できる」という等式を前提としている。「わかる＝できる」と考えるから、「なぜできないのか」という疑問が湧いてくるのだ。ここで、平尾（2014：15-18）の用語法に従って「わかる」という言葉を「言葉で理解すること」、「できる」という言葉を「感覚で掴むこと」と定義してみよう。この定義でいけば、「わかる＝できる」という等式は明らかに誤っている。たとえば、自転車に乗るために必要な諸動作は、言葉で丁寧に説明されれば理解することができよう（＝「わかる」）。しかし、「わかる」から「できる」わけではない。そうではなく、反復練習や試行錯誤の努力を重ねる中で、どこかの時点でふっと「乗れる」ようになるのである（＝「できる」）。

このように、「わかる」と「できる」は、経験上、別次元の事象である。にもかかわらず、両者が混同されるのは、「わかる」→「反復練習」→「できる」という過程を連続的なものとして捉えてしまうためであろう。「わかる」→「反復練習」の過程は連続的である。「反復練習」とは（「わかる」の段階で把握された）諸動作の外的表象を、身体に埋め込んでゆく

作業である、と考えられるからだ。しかし、こうした作業の必然的結果として「できる」ようになるわけではない。というのは、「できないことができるようになる」という体験はふっと偶然的に到来するものであり、そのとき諸動作は固有の内的調和をもって創造されるからである。もちろん、「反復練習」なくして「できる」はありえない。しかし、「反復練習」はいわば必要条件であり、「できないことができるようになる」という体験（＝十分条件）によって初めて「できる」ようになるのだ。この意味で、「反復練習」→「できる」は非連続的なのである。要するに、「わかっているのになぜできないのか」という言明は、「わかる」と「できる」を混同しており、特に「できる」の「偶然性」や「創造性」を捨象するという点で誤っているのだ。

さて、もう1つの隠された言葉は「みんなはできるのに」という言葉である。つまり「みんなはできるのになぜ（おまえは）できないのか」というわけだ。この言明は「みんな＝個人」という等式によって成り立っている。「みんな＝個人」と考えるから、「なぜ（おまえは）できないのか」という問いが出てくるのである。一見してわかるように、この等式は、「個人の特異性」を捨象するという点で誤っている。身体能力、知的能力、周囲の影響の受け取り方など、たとえ似ているように見えたとしても、人間は一人ひとり異なる存在者と言うほかはない。しかし、この当然の事実を皮肉にも当然のごとく無視してしまうのである。なぜか。それは、「みんな」という言葉が、ある集合体を前提とするとともに、ある価値基準を含んでいるからであろう。つまり、「みんな」とはある一定の時期に、ある一定の水準まで達しなければならない（と想定されている）一般的基準の別名なのである。「個人」は「みんな」と同じように「できる」ようにならないといけない。この（基準の有する）強制力によって、「みんな＝個人」という錯覚が生じるのである。要するに、「みんなはできるのになぜ（おまえは）できないのか」という言明は、「みんな」と「個人」を混同しており、特に「個人の特異性」を捨象するという点で誤っているのだ。

筆者は別に難しいことを言っているわけではない。「できないことができるようになる」という「体験」は、あるときふっと到来するものであり、一人ひとり違っているものである、と言っているだけである。しかし、「なぜできないのか」という誤った言葉が幅を利かせているのだ。「偶然性」は必然性に還元され、「個人の特異性」は社会の一般性に還元される。こうした還元主義を排し、「できる」の次元——以下「体験」の次元と呼ぶ——を擁護することはできないか、これこそ筆者の根本的な問題意識にほかならない。

## 第2節 「体験の社会学」を確立するために

この問題意識は、社会学の文脈に移すと、社会学の中に「体験」の次元を導入するという課題、つまり「体験の社会学」を確立するという課題となる。しかしこの課題は壮大だ。というのは、社会学はそもそも「体験」を捉えにくい仕様になっているからである。たとえば、周知のように、デュルケームは、社会学の対象と方法について「社会的事実を物のように考察する」と規定した。社会的事実とは、個人に外在し、個人を拘束するものであり、また個人の表現するものではなく、ある社会で共有されている行為様式のことである（Durkheim1895=1978：69、71-96、261-269）。しかし、「体験」は個人を拘束するのではなく、個人の新しい可能性を拓く創造であり、また社会で共有されているものではなく、体験者にしか——あるいは体験者でさえ——理解できないものである。他方、「体験」は「物のように考察する」こともできない。というのは、「体験」とは何より生きられるものであり、一回的なものだからである。つまり、「体験」は、自然科学のように、客観的に観察したり、一般的な因果法則を適用したりすることはできないのだ（注①）。

とはいえ、「体験の社会学」という発想そのものは、かねてより示唆されてきたものである。特にスポーツや身体を対象とする社会学では、対象の性質上、「体験」の次元を抜きに語ることは難しく、その重要性がたびたび示唆されてきた。たとえば、井上は、日本スポーツ社会学会の設立講演で、スポーツ社会学の方法を制度論的アプローチと体験論的アプローチに分け、後者の方にスポーツ社会学の可能性があると指摘している。制度論的アプローチとは、スポーツを社会制度の1つとして捉え、スポーツと他の諸制度（たとえば政治、経済、教育）との関連、あるいは社会構造におけるスポーツの機能について考察する立場である。これに対して、体験論的アプローチとはスポーツの体験を内側から、つまりその体験にできるだけ即して捉え、その体験の意味を汲み取ろうとする立場である（井上 1993=2000）。たとえば、守備職人と言われる野球選手は、打者がボールを打った瞬間、その落下点を見極め、そこへ一直線に走ってゆき、ボールをキャッチすることができる。もちろん、こうしたプレーが可能なのは、選手がボールの角度や速度を客観的に測定しているからではない。そうではなく、「体験」に即せば、このとき、選手はボールの軌道の中に入り込み、その軌道を潜在的に「なぞっている」、と考えられる。ボールの軌道と自分の動きが連動していなければ、素早く正確に動くことなど不可能なのである。この解釈が正しいとすれば、たとえば「主体—客体」の関係は、分離した実体同士の関係としてだけではなく、動きの連

動性の相のもとにおいても考察できるようになるだろう。それゆえ、「スポーツ体験の分析が社会学に跳ね返って社会学の理論を豊かにしていく」（井上 1993=2000 : 35）、と主張されるのである。

次に、「身体社会学」と呼ばれる領域を見てみよう。一般に、社会学において身体が注目されはじめたのは1980年代であると言われる（注②）。ターナーによれば、現時点において、身体を捉える社会的立場は4つある。1つ目は身体を「社会的構築物」として捉える立場である。この代表はフェミニズム理論であり、1970年代に、生物学的性差（セックス）と社会的性差（ジェンダー）の区別をもとに、ジェンダー役割やセクシュアル・アイデンティティの問題に取り組んだことで注目を浴びたものである。そして近年は、女性に対する社会的抑圧と病の関連（たとえば拒食症）や、女性の身体の商品化（たとえばテレビに出るための豊胸手術）についての研究などが行われている。2つ目は、身体を「社会的権力関係の文化的表象」として捉える立場である。そこでは、どのように身体が文化的メタファーとして機能しているか（たとえば入れ墨をしている人とそうでない人）や、どのように権力が身体の上に行使されるのか（たとえばフーコーの系譜学）などについて研究されている。3つ目は身体を「生きられたもの（はたらき）」として捉える立場である。この立場は、メルロ＝ポンティの現象学的身体論に多くを負うもので、「身体＝主体」を常に社会的現実位置づけられるものとして捉える。そこでは、身体の損傷がいかにかアイデンティティや世界を変容させるかなどについて考察されている。4つ目は身体を「パフォーマンスの総体」として捉える立場である。そこでは、いかに人々が自分の身体を社会的規範に従って訓練していくのか（たとえばモースの身体技法論）や、いかに社会階級によって異なる身体やハビトゥスが形成されるか（たとえばブルデューの文化的再生産論）などが考察されている（ターナー2005 : 97-101）。

ターナーは以上の4つの立場を挙げた上で、前2者を表象論、後2者を実践論として区別する。そして、前者を「身体なるもの（the body）」として文化の水準に位置づけ、後者を「身体化（embodiment）」として日常生活の水準に位置づけることで、両者の溝を解決できると主張する（ターナー2005 : 101-102）。こうした解決策の妥当性について判断することは、現時点では難しい。実際、ターナー自身、解決できると言いつつ、両者の緊張関係を肯定し、単一的な理論的統合に対しては消極的なのである（ターナー2005 : 119）。しかし、ターナーが示す今後の「身体社会学」の方向性は妥当であるように思われる。1つは、テクノロジーの発達にともなう身体上の問題である。たとえば、クローン技術、臓器移植、新



生殖医療、再生医療補助医療などは、人間や社会に種々の面で、生命や身体とどう向き合うべきかという問題を突きつけてきている。もう1つはパフォーマンス研究である。彼はダンスの例を出しながら次のように言う。「ダンスには直接性があり、それは言説分析では捉えられないものである。ここで、身体を文化的なテキストへと還元してしまわないために、人間の身体化についての現象学の寄与に再注目することが重要になる」（ターナー2005：118-119）。

ターナーの指摘を踏まえれば、本稿は、表象論とは真逆の立場である。確かに「体験」において独特の表象（たとえば「できた」ときのイメージ）は存在するだろうが、そうした表象は個人を拘束する集合表象（デュルケーム）ではなく、一種の飛躍＝創造を呼び込むような表象である。他方、実践論は本稿の立場と親和的である。筆者はモースの身体技法論は表象論に入れるべきと考えるが、それはともかく、（文化的テキストに還元できない）「パフォーマンスの直接性」の重視は本稿の立場と一致する。というのも、「パフォーマンスの直接性」は、後で述べるように、まさに「体験」の特徴の1つだからである。しかし、それをいかにして捉えるかという点で、われわれはターナーと異なる。すなわち、ターナーの重視する現象学ではなく、生の哲学に依拠したいのである。現象学の中心概念は志向性である。この点は、フッサールの現象学を身体論の次元で展開したメルロ＝ポンティにおいても変わらない。そこでは、身体＝意識の志向性に注目することで、自己と世界の在り方が記述されることだろう。確かに、現象学は、現象を内側から捉えようとする。しかし、そこで重視されているのは何よりも志向性であり、パフォーマンスそのものの運動性ではないという点を忘れてはならない。ところで、生の哲学はまさにこの運動性を捉えようとする立場なのだ。要するに、われわれの研究は、「パフォーマンスの直接性」に注目するという点で「身体社会学」の方向性と一致するのだが、その「直接性」を捉えるための方法が異なるのである（注③）。

さて、以上のように、スポーツ社会学においても、「身体社会学」においても、方向性としては「体験」の次元を重視すべきだ、とされている。では、実態はどうなのであろうか。たとえば、先の井上の講演は1993年であったが、その後、日本のスポーツ社会学はどのような道を歩んだのであろうか。亀山（2013）によれば、日本スポーツ社会学会誌の論文を調べると、制度論の論文の数は常に一定しているのに対し、体験論の論文の数は減少傾向にある。スポーツ社会学は社会学の一分野であり、制度論が多くなるのは当然である。ただ、その中で、つまりそもそも少ない体験論の中で、その数がさらに少なくなっている、というの

である。なぜだろうか。亀山（2013）は、その理由について、「このような傾向をもって期待外れというべきなのか、あるいはスポーツ社会学それ自体の保守化と解すべきなのか、この点についての判断は読者にお任せしたい」と述べている。しかし筆者はそのどちらでもないように思われる。体験論が社会学にとって意味がないと判断されたわけでもないし、スポーツ社会学者が保守的になったわけでもない。そうではなく、体験論の意義が結局のところ曖昧であったからではないか、と考える。逆に言えば、「体験の社会学」の意義を明確にすることこそ、今、求められていることなのではないだろうか。

本稿では、具体的領域として、スポーツを取り上げよう。スポーツは身体活動であり、身体活動は「体験」の次元が現れやすい領域だ、と考えられるからである。ところで、スポーツ界では、スポーツの生み出す様々な病理現象の存在が指摘されている。つまり、なぜ病理現象が生ずるのか、そしてそれはどのようにして乗り越えることができるのか、こうした問題に答えることが喫緊の課題となっているのだ。本稿ではこの2つの問題に答えていこう。そして、その中で、「体験の社会学」の意義を明らかにしていこう。要するに、本稿の目的は、スポーツにおける諸問題の考察を通して、「体験の社会学」の意義を明らかにすることなのである。

## <序論 注釈>

---

- ① 社会学は「体験」の次元を全く捨象しているというわけではない。たとえば、デュルケム自身、『自殺論』（Durkheim1897=1985）において、自殺を社会現象（社会的事実）として捉えるだけでなく、一種の内観法を用いて自殺者の心理を克明に辿っている。しかし、彼は、自殺者が自殺を決心する最後の一撃のようなもの（＝「体験」の次元）については論じていないだろう。あるいは、ウェーバーの社会学では、「体験」の次元に入る（と思われる）行為類型として感情的行為が設定されている。しかし、彼の理解社会学の中心は「体験」ではなく、行為者が行為に付与する「意味」（＝「解釈の枠」）である。それゆえ、彼は、感情的行為について、その独立性を認めつつ、価値合理的行為に還元されるものとして取り扱うのである（Weber1922）。しかし、いずれにしても、社会学の方法論についての研究はそれだけで大きな1つの課題であり、その詳細な検討は本稿とは別に論じられるべきであろう。
- ② 社会学は、伝統的に、身体を消極的な仕方でも取り扱ってきた。たとえば、デュルケム

は、身体を素朴に有機体（感覚と生理的欲求の基体）として捉え、個人的なものの根拠として位置づけている。そして1つの閉域として身体＝個人を表象し、その利己的性質を超えるものとして社会（集合表象）の概念を導入するのである。社会の具象物としての概念や道徳は超個人的である。それゆえ、概念・道徳＝社会は、身体＝個人を制御するという。彼は生涯にわたって人間の二元性、すなわち、有機体と社会の間に引き裂かれた「矛盾の怪物」という視点を崩さなかった。しかし、身体＝個人が概念・道徳＝社会に制御される対象として捉える視点も一貫している（Durkheim 1914=1983）。

他方、伝統的に、理論社会学の課題は、功利主義を脱し、（個を超越する）価値による社会統合を実現することであった。しかし、大衆社会化の進展によって、一貫した価値による社会統合という神話は崩れてゆく。そして、同時に、その担い手であった近代的主体の観念、すなわち自分の理性に従って合理的に行動する人間像も失効してくる。こうした社会の変化に対する応答として、理性による合理主義ではなく、感性による非合理主義——そしてその拠点としての身体——を見直そうという動きが出てくるのだ。身体は具体的であり、自分という存在を実感できる唯一の場所ではないか、というわけである。「スポーツは、純粋な身体性〔身体システム〕の独自の複雑性によって、われわれの生活世界の仮想化・非物質化を埋め合わせる。もっとはっきり言えば、スポーツにおいて身体は意味が示される場となる。それは、われわれの経済や技術において身体がもはやどんな役割も演じないからだ」（Bolz 1997=1998 : 127）。

- ③ ターナーが期待を寄せるのは、ブルデューの「実践感覚論」や「ハビトゥス論」である。しかし、ブルデューの議論は錯綜しており、容易に援用できるものとは言えない。たとえば、ハビトゥスとは、通常、「ある社会階級のもとで生まれ育つことによって身体に染みこむ習性」（菅原 2013 : 16）として理解される。しかし、その定義は、実に両義的であり、たとえば「構造化された構造であると同時に、構造化する構造である」（倉島 2007 : 22）のごとくである。一般にブルデューの理論体系は、現象学（主観主義）と構造主義（客観主義）の対立を止揚すると言われているが、ハビトゥス概念はまさに「自由と決定論」、「条件づけと創造性」「個人と社会」といった二律背反を乗り越えるためのキー概念とされる（菅原 2013 : 17）。しかし、この概念を使用するためには厳密な検討が必要となるだろう。

# 第1章 問題・方法・構成

## 第1節 スポーツの危機

### 1. 1. 近代社会とスポーツ

現在、スポーツは広く人口に膾炙している。しかしその繁栄は見かけ上のものであり、スポーツ——以下競技スポーツを指す——は危機的状況にあるのではないだろうか。スポーツを政治的に利用することの弊害、商業的に利用することによる弊害、あるいは過度の競争による弊害など、こうしたスポーツをとりまく諸問題の存在は、今や、スポーツ界だけでなく、一般の人々も知るところであろう。では、問題は解決されたのであろうか。否。問題は未だに全く解決されていないのである。問題は指摘できるが、有効な解決策は見つからない。こうした状態が長く続いているのである。なぜだろうか。それは、スポーツを貫く論理が近代社会を貫く論理と同一であるからだ、と考えられる。スポーツを乗り越えることは近代社会を乗り越えることである。未だ近代社会の射程を生きるわれわれにとって、「スポーツ＝近代社会」を乗り越えることは非常に困難なことなのだ。

スポーツは一般に「社会を映す鏡」と言われる。この言明を社会学的に翻訳すれば、スポーツは「近代社会の文化装置」ということになるだろう。文化装置とは、社会の反映物であり、主体に社会の本質（社会がどのような価値に従って動いているか）を実感させる装置のことである（注①）。社会の水準は相対的に状況主義的であるのに対し、文化の水準は相対的に価値の一貫性が担保されている。それゆえ、文化の水準において、人は社会の本質をより深く感じ取るのである。本稿の文脈で言い換えれば、われわれは、スポーツに触れることで、「する」のであれ「見る」のであれ、（われわれの生きる）近代社会の本質をより深く感じ取るのである。

近代社会を導く価値は、パーソンズふうには、普遍主義と業績本位である。普遍主義とは、特定の間人関係や集団ではなく（＝個別主義）、一般的な基準を重視する立場であり、業績本位とは、人柄や生まれではなく（＝属性本位）、能力や成果を重視する立場である（Persons and Shils 1963=1970 : 130-133）。この組み合わせは、社会の水準ではいわゆる仕事の領域で広く通用している。たとえば、会社という利益集団では、数字という一般的な基準によって示される業績に即して人事評価がなされるのである。もちろん、独特の個性に

よって職場の雰囲気や和ませる存在はやはり重要であろう（＝個別主義＋属性本位）。しかし、会社はいざとなれば、定義上、利益をもたらしてくれる人間を選ぶはずである（注②）。

スポーツに目を転じてみれば、そこでは、普遍主義と業績主義がより一貫性をもって展開されていることが分かる。スポーツにおける普遍主義で言えば、公平性の原則と数値主義を挙げることができよう。主要なスポーツのルールは万国共通であり、競技の条件の面でも一方に不利が無いよう配慮されている。そして、選手のプレーは様々な角度から測定され、記録として保存されるのである。他方、業績本位で言えば、実力主義、競争主義、勝利至上主義、優勝劣敗主義といったおなじみの諸価値が挙げられるだろう。つまり、スポーツ選手は、公平性が担保された平等な条件の下で、自分の力によって競争に勝つことを求められるのである。

人は、近代社会に生きるかぎり、普遍主義と業績主義に拘束される。しかし、スポーツ選手は、こうした価値を受動的に受け入れるのではなく、むしろ能動的に追求しているように見える。何かにとりつかれたかのように、対戦相手との、あるいは自分自身と戦いに勝利し、より高い水準を求めてピラミッドの頂点を目指そうとしている。もちろん、頂点に近づけば近づくほど富や名声は大きくなる。しかし、彼らの特徴づけるのはこうした具体的な対象への執着ではなく、無限の上昇運動——グートマンの用語では「進歩」の観念（Guttman 1978 = 1981 : 89-93）——への忠誠のようなものであろう。実際、近代的価値に実体的な到達点は存在しない。ある業績は到達した瞬間に通過点となる。たとえば、世界記録なるものは乗り越えるために存在するのではなかったか。たとえ、数センチであっても、コンマ1秒であっても、アスリートはより上を目指そうとするのである。ところで、周知のように、社会学の知識によれば、アイデンティティは社会によって与えられる。とするならば、アスリートは、この「進歩」の観念に忠実であればあるほど、自分という存在をより実感できるということになるだろう。われわれはと言えば、スポーツを見るとき、自分の生とアスリートの生を重ね合わせることで、彼らから生の実感を少しだけ分けてもらっているのだ。

## 1. 2. 正常と異常

スポーツは近代社会の文化装置であり、アスリートは近代社会を導く価値の体現者である。しかし、近代的価値に忠実であればあるほど、アスリートは、身体を壊し、不断の欲求不満——デュルケームの言うアノミー状態——に悩まされることだろう。こうした状態は、常識によれば、異常である。とはいえ、彼らは「進歩せよ」という命令に忠実なだけだ。業

績を追い求めるのは、業績が「進歩」の証になるからだ。とするならば、われわれの考える異常は、アスリートにとっては（そして近代の論理では）正常と言うべきである。

スポーツにおける病理現象の 1 つであるドーピング問題を考えてみよう。ドーピングとは競技力を向上させるために薬物を摂取することである。それゆえ、当然のごとく禁止されているのだが、無くなるどころか、その存在はいわば常識となっている。

ドーピングを禁止するための論拠の 1 つは「不公平」である。つまり、ドーピングをした選手としていない選手では、競技力に差が出てしまうので、平等な条件のもとでの競争という原則に抵触する、というわけである。しかし、不平等という点で言えば、生まれつきの不平等、あるいはトレーニング環境における不平等はどうなるのだろうか。背の低い人は必然的にバレーボールのアタッカーになれないが、そうした選手が（生まれつきの不平等をなくすために）ジャンプ力をアップさせる薬物を使うのはなぜいけないことなのだろうか。あるいは、先進国と発展途上国ではトレーニング環境に不平等が生じているが、この不平等をなくすために薬物を使用するのはなぜいけないのだろうか。つまり、ドーピングは、逆に、不平等をなくすための道具となるのではないか、とも言えるのだ。もしこの意見に選手全員が賛成すれば、「不公平」という論拠は崩れてしまうだろう（Bette und Schimank1995=2001 : 116-119）。

このように「不公平」という論拠は失効する。そこで「不自然性」（人為性）という論拠が持ち出されてくる。つまり、ドーピングは「自然」な身体を破壊する点で異常である、というわけだ。しかし、スポーツにおけるトレーニングとはそもそも「自然」な身体を「不自然」な身体に作り変えることであり、ケガや「職業病」はいわば必然的現象である。それゆえ、なぜドーピングだけが否定されなければならないのか、と反論されることだろう。そこで、今度は、健康という点で有害だと主張されるかもしれない。しかし、薬物とはそもそも副作用をともなっているものであり、ドーピングで使用する薬物よりも副作用を起こす薬物はいくらかでも存在する。そして、何より、健康を求めらるかどうかは、究極においては、個人の自由意志の問題ではないか、と反論されることだろう。「身を売って益を得る」ことはなぜ悪いのだろうか（Bette und Schimank1995=2001 : 119-121）。

このように、ドーピングを禁止するための論拠はことごとく論破される。そこで、スポーツ組織は、今度は、禁止薬物のリストを列挙するという作戦に打って出るのだ。しかし、この方式でいけば、逆に、リストに載っていない薬物（新しい薬物）であれば、ドーピングに引っかけられないことになる。つまり、この方法は、穿って言えば、新しい薬物を作れと触発

しているようなものなのだ。こういう次第で、ドーピングは、現在、いわゆる「イタチごっこ」状態になっている (Bette und Schimank1995=2001 : 124-131)。

ドーピングは否定することができない。というよりむしろ、不平等を解消するという点で、またスポーツのミッションとも言える「人為性」を極限まで推し進めるという点で、さらに言えば「進歩」をもたらすという点で、望ましいものですらあるだろう。つまり、ドーピングは、少なくともスポーツを導く価値にとっては、正常な現象なのである。もし、それでも何らかの異常性を感じる人がいれば、スポーツを導く価値の外に出るしかない。本稿では、後に、そうした視点から、スポーツにおける病理現象を(再)解釈することになるだろう。しかし、ともかくも、ドーピング問題の検討によって、スポーツの奥底に潜む論理が少しは明らかになってきたように思われる。それは、スポーツが「人為性」を前提にして成り立っているという点である。スポーツする身体は、「自然」な身体に何かしらの「人為」を加えることではじめて成立するのだ。そして、この思考を論理的に延長したところに、ドーピング問題は出てくるのである。ところで、近年のスポーツ批評では、スポーツの問題を解決するためには身体の問題まで遡らなければならない、と示唆されている(注③)。そこで、われわれも、身体の問題へと入ってゆくことにしよう。

### 1. 3. スポーツと身体

一般的な近代的身体観によれば、身体はモノ(物質)であり、意識的に(理性で)操作できる対象とされている。そして、この身体観の上に立って、スポーツは発展してきたと言える。というのは、スポーツはスポーツする身体を必要とするし、いざ試合となれば、競技力を最大限に発揮するため、身体はまさに「管理」され、「作られる」からである。身体は「所有」され、「管理」され、「作る」ことができる。つまり、身体は人為的操作の対象なのだ。こうした身体観はわれわれの常識であろう。しかしこの常識こそ問われねばならないではないか。

近代的身体観は身体にかかわる3つの要素を捨象する。1つ目は「身体の文化性」といったものである。たとえば、ブラジルのサッカー選手の動きはラテン系特有のリズム感を帯びている。この独特のリズム感を通して、われわれは「ブラジル人らしさ」(「身体の文化性」)を直感的に把握するのである。しかし、近代的身体観は、身体を民族などの諸集団を超越したものと想定する。つまり、身体は「タブラ・ラサ」(ジョン・ロック)のようなものであり、そこに設計図を書き込めば「理想の身体」が出来上がる、と考えるのだ。要するに、

「身体の文化性」は（人間の）「身体の同一性」という観念のもとに捨象されるのである。

他方、この観念は同じ論理で「身体の特異性」を捨象する。これが2つ目である。つまり、諸民族の差異と同じように、一人ひとりの身体的差異を捨象するのである。たとえば、野茂英雄のトルネード投法のように独特のプレースタイルを持つ選手が存在する。彼らは、一般的に理想とされる「型」とは全く異なっている。それは、そのスタイルが彼の身体にとってしっくりくるものであり、彼の身体にとって負担も少なく、結局彼の身体にとって一番理にかなったフォームなのであろう。このように、「型」は本来「身体の特異性」によって創造されるべきものなのだ。しかし、「身体の同一性」は、定義上、「身体の特異性」を認めず、場合によっては身体を「型」にはめようとするのである。

3つ目は「身体の偶然性」の捨象である。先に述べたように、スポーツでは、身体を徹底的に「管理」し、試合でベストの状態になるよう準備するのであった。準備が完璧であれば（＝原因）、試合で良いプレーができる（＝結果）。このような想定は、身体を「必然性」（因果法則）の網で捉えようとしている、ということである。しかし、準備が完璧でも、試合で急に身体が動かなくなるといったことはしばしば起きる。そうした場合、「必然性」の声は、準備が不十分であったと答えることだろう。確かにそうかもしれない。しかし、身体を完璧に「管理」することは不可能だ。素晴らしいプレーの到来する時間と場所を正確に予測することなどできるだろうか。素晴らしいプレーはいつでも偶然的に到来するはずである。

以上のように、近代的身体観はかなり限定的な身体観である。それゆえ、この身体観に依拠するスポーツもやはり限定的なものにならざるを得ない。そこで、スポーツを捉え直すために、近代的身体観を一旦カッコに入れ、「身体の文化性」「身体の特異性」「身体の偶然性」といった要素を擁護してはどうかという声が出てくるのである。本稿では、後に、この3つの要素のうち、「身体の特異性」と「身体の偶然性」を取り上げることになるだろう。しかし、その前に、これらを位置づけるために、われわれの方法論を示しておく必要がある。

## 第2節 方法

### 2. 1. 「体験」の概念

本稿では、スポーツにおける病理現象を（再）解釈するとともに、「身体の特異性」と「身体の偶然性」について論じる。そこで、こうした課題を位置づけるために、（ここまで直感的な記述にとどまっていた）「体験」の概念をより明確に規定しておくことにしよう。とこ



ろで、「体験」の概念は、思想史的に言えば、主に生の哲学に属する概念である。生の哲学とは、一般に、実在を、固定したものではなく、生成するものと捉える立場であり、それゆえ、生成を捉える方法としては、概念や判断などの合理的方法ではなく、いわば「生を生に即して理解する」という直観的な非合理的方法が用いられることになる（Bollnow1958＝1975：32－38、209－212）。しかし、こうした議論を進めていくと抽象度が高くなりすぎてしまうだろう。そこで、われわれは、先に指摘した「パフォーマンスの直接性」（ターナー）の問題を取り上げることから始めよう。

パフォーマンスが直接的であるとはどういうことか。ターナーは何も述べていないが、逆に言えば、間接的ではないということである。自転車に乗っている場面を想像しよう。そのとき、われわれはペダルをこいで前方に進んでいる。この運動において、先行する動きと次の動きは1つの途切れることのない流れとして直接的に経験されている。これはいわば「流れの直接性」である。逆に、もし先行する動きと次の動きが分節されてしまえば、非常にぎこちない運動となってしまおう。他方、自転車に乗っているとき、自分の身体と自転車は、絶妙なバランスによっていわば一体となっている。これはいわば「相互浸透の直接性」である。逆に、もし自分の身体と自転車を区別し（＝分節し）、両者を操作しようとすれば、やはりぎこちない運動となってしまおう。以上は、パフォーマンスを生る哲学の方法によって、つまり自転車に乗るという経験をその経験に即して記述したものである（注④）。繰り返せば、「パフォーマンスの直接性」には「流れの直接性」と「相互浸透の直接性」が存在する。そして、これを生の哲学者の代表者の1人であるベルクソンの言葉で言えば次のようになる——（「生の直接性」は）「区別なき契機を——それも諸要素の相互浸透、連帯、内密な有機的組織化として——思い描くことができる」（Bergson[1889]1959＝2002：116）。

次に、「体験」の概念を考えよう。ここでは、まず、ベルクソン哲学に即して「体験」と「経験」を区別した作田（1993）の規定を取り上げたい。作田は、「体験」を「意識に先立つ経験」（作田1993：28）と規定している。とすれば、逆に、「経験」とは意識によって分節されたあとの経験である、と言えよう。つまり、「体験」と「経験」の差異を、意識による分節の有無に見るのである。前段の叙述と重ねれば、「体験」とはまさに「生の直接性」の経験——作田の用語では「生成の経験」——であり、「経験」とは「生の直接性」を分節したあとの経験——作田の用語では「定着の経験」——であると言えよう。しかし、自転車に乗ることが「体験」であると言われると、人はやや不審に思うかもしれない。しかし、そう思うのは、自転車に乗ることができたときの感動を忘れていたからだ。そのとき、われわれ

はいわば生命が高揚するのを感じ、乗ることができているのはほかならぬこの私だという喜びに満たされたはずである。実際、作田によれば、「体験」——作田は主に「溶解体験」と呼んでいる——における自己と対象の融合は「自己意識の喪失を意味しない。反対に、この時、自己意識はますます鮮明となる。この時、自己は『外的なもの〔定着の世界〕から解放された』と感じ、《わたしは存在する》、わたしだけで充足できる、という確信に浸されるのである」（作田 1993 : 112）。「体験」は、「経験」と違って、「生の直接性」を特徴とする。さらに、「体験」が出現したときには、「経験」の水準を離脱し、自己は「存在の感情」（ルソー）に浸されるのである。

ここで、「体験」の出現、さらに「体験」の特異性という点について、やはり生の哲学者の1人であるデュルタイの「体験」概念を援用して根拠づけておこう。デュルタイは、他の生の哲学者と同じように、生を生成として捉えるが、単に「力」（Kraft）としてだけではなく、「意味」（Bedeutung）としても捉える。つまり、生は、単に無限に流動するだけでなく（＝「力」）、（相対的に分離可能な）内的一体性を創造する（＝意味）、というのである。そして、こうした、生の、生自身による内的一体性の形成——デュルタイの用語では「生の表出」——を「体験」（Erleben, Erlebnis）と呼ぶのである（Bollnow 1958=1975 : 54-58、71-76）（注⑤）。この「体験」の概念によって、2つのことが指摘できる。1つは、「体験」は、主体を前提にしないという点である。それは、定義上、「生の、生自身による」ものであり、主体は、定義上、「体験」がいつ到来するかを予想することができない。それゆえ、「体験」は、主体にとっては「ふっと到来するもの」と感じられるのである。これは「体験」における「偶然性」のモメントと言えよう。他方、もう1つは、「体験」は、主体にとって特異なものとして感じられるという点である。「内的一体性の形成」とは、ある新しい諸力の連関が出現するという意味で特異なのである。しかしそれだけではない。こうした連関の形成によって——つまり（相対的にではあれ）区切られることで——現下の「体験」と他の「体験」とは区別されるようになる。それゆえ、「体験」は、特異なものとして、主体の記憶に残るのである。これを「体験」における「特異性」のモメントと捉えておこう。

## 2. 2. 社会化と超社会化という視点

次に、「体験」と「経験」の区別を、社会学に接続させるために、社会化と超社会化という視点を導入しよう。

社会化（socialization）とは「いまだ社会的ではない存在を、当該の社会の構成員にふ

さわしい存在に変えることによって、社会の存続・維持をはかる機能を指している」（亀山 2000：23）。すなわち、社会化という機能によって、社会は新たな成員を確保することができるし、個人は成員としての資格を得ることができる、というわけである。社会化によって、主体は当該社会で通用している知識や価値を学習する。たとえば、スポーツ界で言えば、先に述べたように、主体は「進歩」の観念や業績本位などの価値を身につけてゆくことになる。われわれの定義でいけば、こうした社会化の作用のもとで生ずる経験が「経験」である。

しかし、社会化の概念は2つの次元をうまく説明することができない（注⑥）。1つ目は個性の次元である。先に述べたように、社会学ではアイデンティティは社会によって与えられる、と考える。それゆえ、「進歩」の観念に忠実であればあるほど、人は自分という存在を実感できるということになる。実際、競争に勝てば勝つほど、自己は多くの他者と差異化され、個性は際立ってくることだろう。しかし、自己と他者の区別による個性は個性の片面しか説明していない。というのは、個性とは「個人の特異性」の表現であるとも言えるからである。他方、2つ目は創造の次元である。創造とは、通常、新しいものが生まれることである。しかし、社会化によって創造が生じるわけではない。先に述べたように、反復練習によって（必然的に）「できる」ようになるわけではない。確かにそれは必要条件ではあるが、われわれは（偶然的に）「できる」ようになるのである。要するに、われわれの定義でいけば、社会化の概念は「体験」を「経験」に還元してしまっているのだ。

こうした社会化の概念における欠陥は、この概念が社会を前提とする概念であるという点に由来する。そこで、超社会化（trans-socialization）という概念が必要とされるのである（亀山 2000：36）。超社会化とは、社会化の作用を超えてゆく作用であり、われわれの文脈では主体が「体験」に導かれることである。しかし、「体験」に導かれる前に、そもそも「体験」は何によってもたられるのであろうか。その力として、ここではベルクソンの言う「生命の躍動力」（*élan vital*）を想定する。ベルクソンによれば、社会なるものは「生命の躍動力」（＝創造的エネルギー）が物質の障害に出会って旋回している状態である。とするならば、この旋回状態の中に主体は存在しているということになるだろう。ここで重要なのは、ベルクソンが社会（＝旋回状態）を2つに分けている——「閉じた社会」と「開いた社会」——という点である。「閉じた社会」とは、自らの外側にいつも外敵を想定し、その外敵から自らを防衛しようとする社会である。他方、「開いた社会」とは、自らの外側に外敵を想定せず、生命の創造的エネルギーが、一人の特異な人間を通して、成員の間に貫流している社会である（作田 1995）。

「閉じた社会」と「開いた社会」という類型は抽象度が高く、分かりにくいかもしれない。しかし、「閉じた社会」の要点は自分の所属する集団と他の集団を区別するということである。そうすると、スポーツで言えば、「閉じた社会」とは、敵・味方に分かれ、勝敗をめぐる競争状態のことであると言えよう。このとき、主体はスポーツを導く「価値」に従っている。つまり、彼は社会化の作用のもとにいるのである。他方、「開いた社会」の要点は敵・味方の区別がなくなるということである。スポーツにおける「開いた社会」とは、たとえば、ある創造的プレーの出現によって、選手が、あるいはファンが、敵・味方関係なく、勝敗など忘れて目を奪われてしまっている状態のことである。このときにもたらされる感動によって、「体験」が到来した選手はもちろん、周囲の人も社会化の作用から一時的に離脱させられる。つまり、彼らは超社会化の作用のもとにいるのであり、そのときの出来事は記録ではなく、記憶に刻まれるのである。そこで、次のようにまとめておこう——社会化は「価値」（社会）にどれだけ忠実であるかを原動力としている。他方、超社会化は「体験」（生命）にともなう感動を原動力としている、と。

社会化と超社会化は極限概念——ウェーバーの言う理念型——であり、両者は実際の経験において混じり合っている。それゆえ、われわれは、「社会化>超社会化」のときの経験を「経験」、また「社会化<超社会化」のときの経験を「体験」と呼ぶこともできる。この点を示しているのが図1である。図1は2つの二等辺三角形を合わせたものである。下に頂点のある三角形は社会化（「経験」）の領域を示しており、上に頂点のある三角形は超社会化（「体験」）の領域を示している。まず、直線A-Bを見てほしい。これは、「社会化>超社会化」という状態である。この状態はいわゆる反復練習（＝「経験」）の状態であり、主体は「体験」の到来を実感しないだろう。しかし、「体験」の要素が全くないのかと言えばそうではない。少しであるが、やはり「できた（かもしれない）」とを感じるだろうし、「できる」ようになる予感のようなものはあるだろう。次に、直線C-Dを見てほしい。これは、「社会化<超社会化」という状態である。この状態において、主体は「体験」の到来を実感するだろう。しかし、「経験」の要素が全くないのかと言えばそうではない。ある程度、自己と対象を区別する意識は残っているだろ

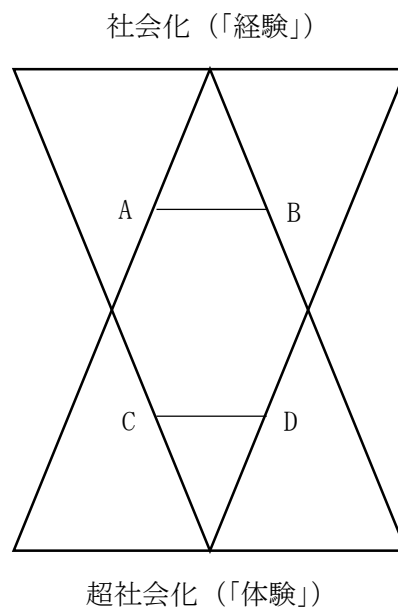


図1 経験の類別

うし、それまで練習によって蓄積された身体動作は新しい仕方で生かされている、と考えるべきである。

### 第3節 構成

図2は本稿の構成を示したものである。まず、①本稿の目的とは「体験の社会学」の意義を示すことであった。そしてこの目的は2つの問題を通して論じられる。1つは②スポーツにおける病理現象はなぜ起きるのかという問題、もう1つは③そうした病理現象はどのようにして乗り越えることができるのかという問題である。具体的に言えば、②は④アスリートバーンアウトの概念と⑤スポーツ選手の「キャリアトランジション問題」の考察を通して論じられ、③はコーチング論として⑥身体感覚（「身体の特異性」）を重視するものと⑦「飛躍体験」（「身体の偶然性」）を重視するものについて論

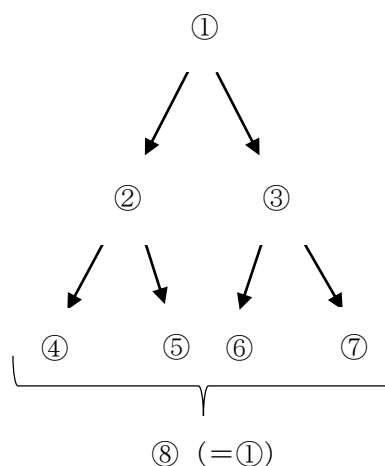


図2 本稿の構成

じてゆく。つまり、こうした諸問題に答える中で、⑧（＝①）「体験の社会学」の意義を明らかにしてゆこう、というわけである。

次に各章の概要を簡単に述べておこう。

第2章では、スポーツにおける病理現象の1つとして、アスリートバーンアウト・シンドローム（燃え尽き症候群）の概念が考察される。そこでは、先行研究として、心理学と社会学におけるバーンアウト論が詳細に検討され、両者がともに還元主義に陥っていることが示される。つまり、還元主義では、心理学的要因、社会的要因といった諸要因が考慮されるだけで、バーンアウトの本質に迫れないのである。そこで、「体

験」の視点が導入され、先行研究を統合する形で「バーンアウトとはエネルギーが空回りしている状態である」と（再）解釈される。この定義によって、バーンアウトを惹起する主因が確定される。それは、「体験」の更新の欠如によって「エネルギーの空回り」が生じやすくなるという知見である。「体験」はいつ更新されるか分からない。しかし、スポーツにおける競争主義的状況は「体験」の更新を待つてはくれないのだ。

第3章では、スポーツ選手における「キャリアトランジション問題」が取り上げられる。つまり、なぜスポーツ選手は引退時に混乱状態に陥るのかについて考察される。そこでは、

先行研究として心理学の知見が検討され、やはりその還元主義が批判される。つまり、還元主義でいけば、「生命感の喪失」という「体験」の次元の問題が、(社会化の過程に影響を与える) 諸要因の1つに還元されてしまうのだ。そこで、超社会化の概念が導入され、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応(再・社会化の失敗)ではなく、いわゆる「ケリ」(脱・超社会化を導く「体験」)の問題であると(再)解釈される。そして、この解釈の有効性が、具体的事例(日本野球独立リーガー)を通して検討される。「ケリ体験」はいつ到来するか分からない。しかし、スポーツ選手の寿命は短く、またケガや実力不足のために否応なく引退を迫られることもある。つまり、競技スポーツはアスリートに「ケリ」がつくまで待つてはくれないのだ。

第2章と第3章で明らかとなるのは、スポーツにおける病理現象は「体験」の次元を考慮しなければ十分に理解できず、また「体験」の次元から離れることで発生しやすくなるという点である。他方、これに競技スポーツの構造が追い打ちをかける。つまり、競技スポーツは、「体験」の到来を待つてはくれないという意味で、構造的に病理現象を生みやすくなっているのである。そこで、次には「体験」の次元を重視するコーチング方法が考察されることになる。

第4章では、身体感覚(「身体の特異性」)を重視するコーチングについて論じられる。自分の身体感覚に忠実であることは、外的なものに惑わされにくくなる、と考えられるからである。まずガルウェイのコーチング論を整理し、社会化のコーチング(=強制)と超社会化のコーチング(=育成)が区別される。そして、身体感覚を重視するコーチングとして、結城匡啓の方法が詳細に検討され、その方法の究極である「潜り込み」が重点的に論じられてゆく。「潜り込み」とは、コーチが選手の身体感覚を内側から把握する方法である。しかし、結城の方法は記述的であり、理論的ではない。そこで、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」は理論として一般化されることになる。

第5章では、「飛躍体験」(「身体の偶然性」)を導くコーチングについて論じられる。「体験」を更新できれば、病理現象を遠ざけやすくなる、と考えられるからである。ここでは、具体的事例として、「コツ」をつかむという体験(=「コツ体験」)の誘発について論じられる。まず、「コツ」と「カン」の語義の検討によって、「カン」によって「コツ体験」が誘発されるという点が確認される。次に、独創的な先行研究として黒田亮の立体心理学が取り上げられるが、彼の議論は記述的であり、理論的ではない。そこで、ベルクソンの「動的図式」(動くものの潜在的イメージ)の概念が導入され、「カン」(生命の直観)を誘発するものと

して「動的図式」が位置づけられる。そして、こうした「動的図式」の活性化を目論む指導法として、弓道の阿波研造の指導法が検討される。

結論では、本論の展開をまとめた上で、「体験の社会学」の意義が示され、残された課題について触れられる。

## <第1章 注釈>

---

- ① 文化装置 (cultural apparatus) とはかつてミルズによって提示された概念である。彼によれば、人間の経験は、それ自体として存在するのではなく、すでに「経験そのものがステレオタイプ化した意味によって選択され、そして既成の解釈によって形づくられる」。文化装置とはこうした「解釈の枠」を提供する装置——彼の言葉では「人類のレンズ」——のことであり、われわれに「われわれの確実性の基準、われわれの真実性の確定、われわれの感受性の型」を与えるものである (Mills 1963=1971 : 322-323)。たとえば、ギアーツは、バリ人の「闘鶏」を分析する中で、それがバリ社会の文化的反映物であり、それを通してバリ人はバリ社会を深く体験し、バリ人としてアイデンティティを確認すると論じている。つまり、「闘鶏」はバリ社会の文化装置なのである (Geertz 1973=1987)。
- ② 作田啓一は、「普遍主義—個別主義」と「業績本位—属性本位」という2つの型の変数をクロスさせて4象限を作り、業績価値 (普遍主義+業績本位)、貢献価値 (個別主義+業績本位)、和合価値 (個別主義+属性本位)、充足価値 (普遍主義+属性本位) という価値の4類型を構想している。近代社会はもちろん業績価値だけで動いているのではない。しかし、近代社会ではこの価値が一番重視される社会として位置づけられている (作田 1972 : 84-91)。
- ③ たとえば、蓮實 (2004)、稲垣・今福・西谷 (2009) を参照。なお、次節はこの2つの著書を筆者なりに咀嚼して整理したものである。
- ④ 先に述べたように、生の直接性を重視するもう1つの立場は現象学である。現象学とは、現象学的還元によって超越論的主観性 (知覚世界を私にとって可能にするような私) を設定し、世界の意味が現れる原初的な場面、つまり意識の志向性の在り方を記述する学である。そして生の哲学との差異は次のように描かれる。「現象学は、世界に対する特権的で超越論的な光源を現れの純粋性のために確保する。ところがベルクソンの哲学において、世界ははじめから純粋な光の場面であり、そこにどのように内在するのかが方法論

上の問題になる」(檜垣 2000 : 16)。

- ⑤ 「体験」と「経験」は、独語では「erleben (体験する), Erlebnis (体験)」と「Erfahrung (経験)」というふうに区別されている。ただ英語では「体験」に相当する語はなく、「experience (経験)」に含まれる。それゆえ、「体験」のニュアンスを伝えるために「lived experience (生きられた経験=体験)」と表記される場合もある。ディルタイは、一般に、「体験」の概念を精緻化したと言われているが、その概念の展開は錯綜しているようである (Bollnow 1955=1977)。しかし、「体験の社会学」を標榜する限り、われわれはいずれ厳密に検証しなければならないだろう。
- ⑥ 亀山 (2000 : 26-33) は、社会化のアポリアを詳細に検討している。ここでは、本稿で必要な要素だけを筆者なりに整理して記述している。



## 第2章 アスリートバーンアウトの概念

### はじめに

スポーツにおける病理現象の1つとして、アスリートバーンアウト・シンドローム（燃え尽き症候群）を取り上げ、特にその概念について考察してみよう。バーンアウトの概念は、実は今日まであいまいであり、「体験」の視点を入れることでより明確になるのではないかと考えるからである。

バーンアウトは、もともと1970年代以降、ヒューマン・サービス（たとえば看護師・介護士など）の需要の増加とともに広がってきた病理現象であり、意欲的に仕事をしてきた人が、急に「燃え尽きたかのように」になってしまう状態を指示する精神医学上の用語である。たとえば、バーンアウト研究の嚆矢とされるFreudenbergerの定義では、バーンアウトとは、人が自分自身に対して「実現不可能な期待」を課し、それを達成するために「がんばりすぎ」て、「体力、精神力の源泉を消耗」してしまっただ状態であるとされている。ヒューマン・サービスにおいて要求されることは質・量ともに多く（社会的特性）、またそうした職業に就く人は概して真面目で理想主義的な性格の持ち主である（個人的特性）。しかも、そこでの努力は必ずしも——たとえば金銭や尊敬という形で——報われるとは限らないのである（Freudenberger1980=1981：11-38）。

他方、1980年代後半以降、こうしたバーンアウトの概念がアスリートに適用されてくる。アスリートは、一般に、人を相手にする職業ではないという意味で、ヒューマン・サービス従事者ではない。しかし、アスリートを取り巻く状況は、ヒューマン・サービスのそれと似ている。すなわち、アスリートは、競技水準が高くなればなるほど、周囲からの過剰な期待にさらされるのであり、それゆえヒューマン・サービスと同じような病理現象が発生する、と考えられるのだ。たとえば、吉田（1989：184）の定義では、「競技者におけるバーナウト（バーナウト概念を競技者に適用した場合）とは、生活上で競技以外に楽しみを持たないような競技者が、競技上の理想を求めて献身的に頑張ったのだが、そこでの諸条件により、情緒的な消耗、無力感、他者への敵意などの症状を呈するようになった状態である」とされている。

こうした概念規定によって、バーンアウトのイメージは、ある程度、直感的につかめるこ

とだろう。実際、アスリートの世界では、バーンアウトなど日常茶飯事なのである。しかし、こうした概念規定は、バーンアウトという現象をそのまま定式化しているだけであり、その本質を突いているようには思われない。バーンアウトは「燃え尽きる」ということであるから、その現象を定式化しようとする、どうしても「燃え尽きる」前の状態と後の状態をその概念規定の中に含めなければならなくなる。それゆえ、バーンアウトの概念は常に複雑になり、長くなってしまふのである。ところで、吉田（1989：184）は、バーンアウトについて、『燃え尽き』といった言葉とは裏腹に、不完全燃焼、換言すればくすぶった状態を意味している」とも示唆している。つまり、バーンアウトとは、燃えることも燃え尽きることもできない状態である、というわけだ。筆者には、この概念規定の方が、バーンアウトの本質を突いているように思える。バーンアウトという現象には、何かしら、エネルギーが空回りしているようなイメージがつきまとっているように感じられるからだ。

バーンアウトの概念について考察するにあたり、まず既存のバーンアウト研究を検討しよう。その際、便宜上、学問的パラダイムの観点を採用し、心理学系パラダイム（第1節）、社会学系パラダイム（第2節）の順に論じてゆくことにする。そして、その上で、「体験」の視点を重視する体験論系パラダイム（第3節）を構想してみたい。ところで、バーンアウト研究の主流は心理学系パラダイムである。しかし、心理学系パラダイムは症状とそれに相關する要因を細分化しすぎるきらいがあり、近年、逆に、その統合化を求める主張も出てきている（Coakley 2010）。その意味で、本章の目論見は、バーンアウト研究の最新の動きと相即するものである。

## 第1節 心理学系パラダイム

心理学系パラダイムから始めよう。ここでは主に2つのモデル——ストレスモデルとコミットメントモデル——を検討したい。前者はバーンアウトをストレスと関連づけて捉えるのに対し、後者は（主体の）スポーツに対するコミットメントの1形態として捉える。

### 1.1. ストレスモデル

ストレスモデルの代表はSmith (1986) の認知-情動モデル (cognitive-affective model) である（注①）。これは、ストレスに関する理論枠組をアスリートバーンアウトに適用しようとする試みである。

Smith (1986) によれば、ストレスに関する理論枠組は6つの項目を含んでいる。第1項目は「状況」である。これは資源（個人にとって利用可能なもの）と要求（個人に対する外的強制力を有するもの）との兼ね合いを示す項目であり、両者が矛盾している状態がストレスと呼ばれる。次の第2項目はこうした「状況」に対する個人の「認知的評価」であり、これは要求の評価、資源の評価、要求に対処不能だった場合（＝結果）の評価、結果に対する個人的意味の評価を含んでいる。第3項目はこうした評価に付帯する「生理学的反応」で、これは、当該の「状況」において発生してくる感情の知覚をもたらし、評価－再評価の思考回路を起動せしめる（「認知的評価」項目と「生理学的反応」項目の循環運動）。そしてこうした循環運動のアウトプットとして「対処行動」（第4項目）が出てくることになる。他方、以上の4項目はそれぞれ当事者の「パーソナリティ」（第5項目）と「動機づけ」（第6項目）によって左右される、とされている（Smith 1986：39－42）。

以上の枠組をアスリートに適用すると、図1のようになる（Smith1986：40を簡略化して筆者再現）。簡単に説明しておこう。スタート地点は左端の「状況」項目である。バーンアウトへとつながる「状況」とは、通常、競争主義的状况、つまり、高いパフォーマンス水準を要求されるとともに、そのために多くの時間とエネルギーの投入を求められる状況である。また他方では、こうした要求に対する主体の対処スキルや社会的サポートが乏しい状況であるとも考えられる。要するに、バーンアウトを誘発する状況とは、諸要求が諸資源を超過しているストレスフルな状況なのだ。こうした状況に対する主体の「認知的評価」は概して負荷認知となる。すなわち、アスリートは、自分に対処できないほどの要求が課されている、と感じる。それゆえ、アスリートは、小さい達成感しか得ることができず、次第に状況

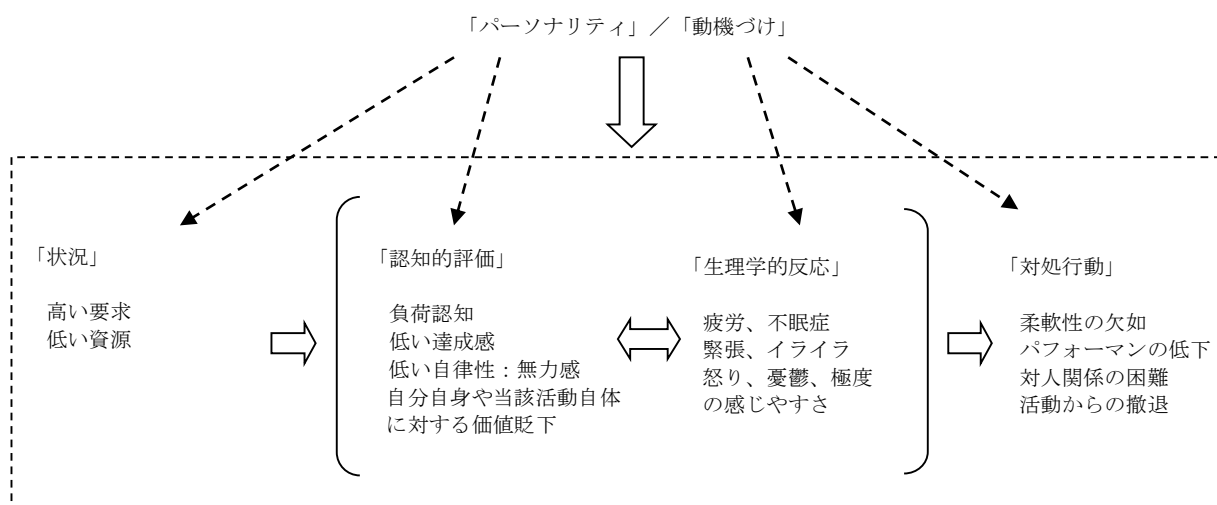


図1 ストレスモデルの適用

をコントロールする力を喪失し（＝無力感）、自分の行為の意味を失うとともに、スポーツ活動そのものの価値を疑ったり、貶下したりするようになってくるのである。他方、この場合の「生理学的反応」としては、疲労・不眠症といった身体的症状、緊張・イライラ・憂鬱といった神経の過敏さが報告されており、「評価－再評価」の悪循環を経由することで、総じて心身は不健康となり、無気力な状態へと陥ってゆく。そして、こうした心理学的状態の結果、アスリートは、ある決まりきった型へとはまりこみ（＝柔軟性の喪失）、パフォーマンスの低下、人間関係における困難、そして重度の場合にはスポーツ活動そのものから撤退するに至ることになる（「対処行動」）（Smith1986：42－43）。なお、以上の諸項目に影響を与えるのは、「パーソナリティ」項目と「動機づけ」項目である。後者への具体的記述は乏しいが、前者については、アスリート能力の低さ、フラストレーションに対する耐性の低さ、抑うつ傾向といった特性を考慮すべきだと示唆されている（Smith1986：47）（注②）。

以上に述べてきた Smith（1986）のモデルは記述的であり、バーンアウトとは何かという問いに答えるものというよりは、バーンアウトを捉えるための認識枠組である。それゆえ、何より、バーンアウトの定義について疑問を残している。彼はバーンアウトとは「長期的ストレスに対する1つの反応である」（Smith1986：39）としか述べておらず、バーンアウトの特殊性が不明のままである。他方、「状況」項目・「認知的評価」項目・「生理学的反応」項目・「対処行動」項目に影響を与える「パーソナリティ」項目と「動機づけ」項目について、彼は多くを語っていない。所与の「状況」をどのように捉えるか（意味づけるか）は、主体の性格や動機づけの質によって変わってくる。それゆえ、「パーソナリティ」項目と「動機づけ」項目は、他の項目の枠（＝バーンアウト現象）そのものを作り出す、とも考えられる。つまり、「パーソナリティ」項目と「動機づけ」項目は、論理的に言えば、他の項目に対するメタ項目なのである。

## 1. 2. 症状による定義と要因の特定作業

Smith（1986）によるバーンアウトの定義はバーンアウトの特殊性を説明できない。そこで、多くの心理学者は、症状による定義を採用することになる。というのは、一般的な心理学的思考では、ある特定の症候群はある特定の諸症状の布置によって特徴づけられる、と考えるからである。

バーンアウト研究の多くが依拠する Maslach らの定義によれば、バーンアウトとは3つの症状——「感情的消耗感」（emotional exhaustion）、「脱人格化」（depersonalization）、「個

人的達成感の低下」(reduced personal accomplishment)——によって構成される症候群である。「感情的消耗感」とは「仕事を通じて、情緒的に力を出し尽くし、消耗してしまった状態」であり、3つの症状の中でも中核を占めるものである。また「脱人格化」とは「サービスの受け手に対する無感情で、非人間的な対応」のことであり、そして「個人的達成感の低下」とは「ヒューマン・サービスの職務に関わる有能感、達成感」の低さのことである (Raedeke et al. 2009 : 10-11、久保 2004 : 26-28)。

しかし、こうした定義はヒューマン・サービスにおける「供給者-受容者」という枠を前提にしているので、アスリート用の修正定義が必要になる。Raedeke et al. (2009) によれば、「感情的消耗感」はそれに身体的消耗感を付け加えることで適用可能である。次に「個人的達成感の低下」はアスリートとしての能力やパフォーマンスと関連づけることで適用可能である。最後に「脱人格化」だが、この症状は、「ある特定の領域において重要である事柄について、その価値を引き下げたり (devaluation)、距離をとったりする (detachment) 状態を指す」というふうに解釈すれば適用可能である。それは、アスリートが自分のパフォーマンスを気かけなくなったり、スポーツに対して恨みを抱いたりする状態であると言えよう。そこで、アスリートにおけるバーンアウトとは、「身体的・感情的消耗感」、「アスリートの達成感の低下」、「スポーツ価値の貶下」という3つの症状によって特徴づけられる、ということになる (Raedeke et al. 2009 : 11-15)。

さて、バーンアウトが症状によって定義されると、今度はこうした症状をもたらす(あるいは相関する)諸要因が探求されてゆく。Goodger et al. (2007 : 145) によれば、諸要因と諸症状の因果関係を扱う研究はほとんど存在せず、両者の相関関係を考察する研究が大多数である。たとえば、諸要因の項目で言えば、「動機づけ」、「楽しさ」、「自律性」、「不安」、「ストレスの知覚」、「対処資源」、「気分の状態」、「トレーニングの量」、「リカバリー」、「重要な他者」、「アイデンティティの在り方」といった具合である。そして、こうした諸要因とバーンアウト(症状)の関係について、「楽しさ」はネガティブな相関(100%)、「自律性」はネガティブな相関(100%)、「重要な他者」はポジティブな相関(40%)とネガティブな相関(60%)、「気分の乱れ」はポジティブな相関(100%)、というふうに測定してゆくのである (Goodger et al. 2007 : 137-139)。

こうした研究によってバーンアウトの特殊性はある程度明確になってゆくのかもしれない。そして相関要因の検討は一般的傾向の把握に役立つのかもしれない。しかし、結局のところ、バーンアウトの普遍的定義は確立されておらず (Weinberg et al. 2011 : 495-496)、

関連要因の検討についても常識の数値化の域を出ないように思われる。つまり、ストレスモデルは、バーンアウトの本質をダイレクトに突くのではなく、症状による定義と要因の特定作業を通して、いわば外側からその本質に迫ってゆくのである。ただ、こうした姿勢は、科学的方法としては正当である、と言わなければならないだろう。

### 1. 3. コミットメントモデル

次に、Smith (1986) のモデルでは重きを置かれていなかった「動機づけ」項目を重視する、コミットメントモデルを検討してみよう。コミットメントの質によって、同じ条件でも（たとえばハードなトレーニング）、ストレスになったり、楽しい活動になったりする。つまり、バーンアウトの軌道に入るかどうかは（主体の）スポーツに対するコミットメントの質にかかっているのであり、その意味でコミットメントモデルはストレスモデルのメタモデルとして位置づけることができる。

コミットメントモデルの先駆者は Schmidt et al. (1991) である。そこでの議論は大きく2つに分けられる。1つはコミットメントの類型についてであり、もう1つはその類型を成立させる諸要因についてである。前者は主として Kelley (1983) による愛とコミットメントの区別に依拠しており、後者は主として Rusbult (1983) の投資モデルに依拠している。

Kelley (1983) によれば、ある親密な関係を分析的に捉えるためには、主体がその関係をポジティブなものに見なしているか否か、またその関係性に安定性（持続性）を求めているか否か、という2点を考慮する必要がある。図2 (Kelly1983 : 266 を若干変形して筆者再現) はこの2つの軸を交差させ、4つの象限を作ったものであり、愛はポジティブなもの（楕円部）、コミットメントは安定性の別名とされる（長方形部分）

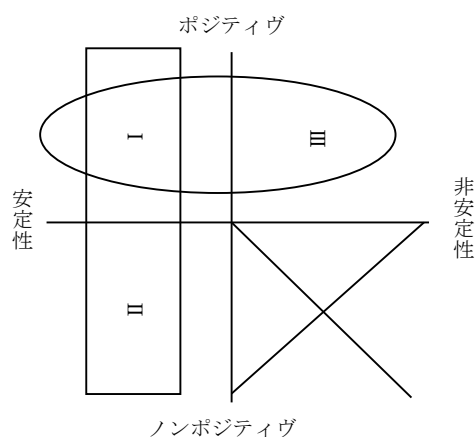


図2 愛とコミットメント

(Kelly1983 : 266-267)。具体的に言えば、Iの象限は主体がその関係に引きつけられており、しかも安定性を求めている状態である（たとえば「持続する愛」）。またIIの象限は主体がその関係に引きつけられていないけれども、安定性は求めている状態である（たとえば「子どものために離婚しない夫婦」）。そしてIIIの象限は主体がその関係に引きつけられて

いるけれども、安定性に乏しい状態である（たとえば「一時的のぼせ上がり」）。以上の類型をスポーツの文脈へ適用すると、スポーツコミットメントとはスポーツへの持続的参与を意味する用語として規定できる。そして、愛を楽しさの概念的等価物だと考えるなら、スポーツコミットメントは楽しさに基づいて参与を続ける場合（Ⅰ）と楽しさ以外の理由に基づいて参与を続ける場合（Ⅱ）に大別することができる（Schmidt et al. 1991 : 257-259）。

次に、こうしたコミットメントの2類型を成立させる要因について、Rusbult（1983）の投資モデルが援用される。投資モデルとは、その名の通り、主体の（ある関係や活動への）投資の量と質に注目するモデルのことである。Rusbult（1983 : 110-111）は、諸項目（たとえば報酬・コスト・満足・他の選択肢・投資）における（被験者の）意識の変化を調べ、3つの類型——関係維持者（stayers）、自発的撤退者（leavers）、非自発的撤退者（who were abandoned）——を提示している。そして、Schmit et al.（1991）は、この3類型をスポーツの文脈へ適用して、関係維持者を①スポーツエンジョイメント、自発的撤退者を②ドロップアウト、非自発的撤退者を③バーンアウト、というふうに類型化するのである。①スポーツエンジョイメントとは、報酬（高）＋コスト（低）＋満足（高）＋他の選択肢（低）＋投資（高）、②ドロップアウトとは報酬（減）＋コスト（増）＋満足（減）＋他の選択肢（増）＋投資（減）、③バーンアウトとは報酬（減）＋コスト（増）＋満足（減）＋他の選択肢（低）＋投資（高）という組み合わせによって特徴づけられる。これらの間にある差異について、③バーンアウトとの関連で見よう。まず、①スポーツエンジョイメントと③バーンアウトを比較すると、前者は投資と満足がともに高いスコアなのに対して、後者では投資は高いのに満足は低くなっていることが分かる。次に、②ドロップアウトと③バーンアウトを比較すると、前者は他の選択肢に対する関心が高まり、それに合わせて現在の活動への投資が減ってゆくのに対し、後者では他の選択肢に対して関心を抱かず、しかも投資は高いままである（Schmidt et al. 1991 : 257-261）。このように考えると、バーンアウトとは高い投資をしているにもかかわらず、楽しさ（＝満足）を感じられず、しかも他の選択肢に関心を示さないまま、現在の活動にはまりこんでいる状態と言えるだろう。

ところで、現在の活動にはまり込んでしまうのは、すでにその活動に多くの投資をしているからである。高い投資は、現状に満足していなくても、あるいは他の選択肢が眼前にちらついても、現在の活動を持続させるよう機能する。というのは、投資したコストは、将来、利益となって戻ってくるはずであり、あるいはもし過去に利益を得たことがあればなおさら、その期待はさらに膨らんでくるからである。しかも、その参与が長期にわたればそれだ

け蓄積される投資量はアップしてゆく。つまり、長期にわたる高い投資は、将来の利益に対する期待を高め、人はたとえ他に選択肢があったとしても現状に留まろうとするようにいわば仕向けられるのである。こうした投資と依存の相乗作用は「エスカレートコミットメント」(escalating commitment)とも呼ばれている(Schmidt et al.1991:261)。そして、Raedeke(1997)はこうしたはまりこみの要素を加味して次のような定式化を導くことになる——アスリートのスポーツコミットメントは「したい」(want to be involved)か「しなければならない」(have to be involved or entrapment)かであり、そのうち後者の型、すなわちスポーツに本当はかかわりたくないのに、様々な理由で(たとえば投資)かかわらなければならないと思わされてしまう事態こそ、バーンアウトをもたらすコミットメントの型にほかならない(Raedeke1997:396-397)。

以上で心理学系パラダイムの検討を終わる。心理学系パラダイムとして、バーンアウトの包括的定義を暫定的に提示すれば次のようになるだろう——「バーンアウトとは、アスリートのスポーツコミットメントの型が『したい』ではなく『しなければならない』に基づいており、それゆえ所与の状況をストレスとして、あるいは諸要求をストレッサーとして認知してしまい、しかも『認知的評価』と『生理学的反応』の悪循環に巻き込まれることで、最終的に3つの心理学的症状——身体的感情的消耗感、個人的達成感の低下、スポーツ価値の引き下げ——呈する病理現象である」、と。

## 第2節 社会学系パラダイム

社会学系パラダイムに移ろう。ここでは、2つの主要モデル——社会的権力モデルと役割葛藤モデル——を検討する。前者はバーンアウトを社会組織(社会的権力)の生産物として捉え、後者は新しい役割への不適応状態として捉える。そして、両者に共通するのは、バーンアウトを心理学的現象ではなく、社会現象として捉える点である。

### 2.1. 社会的権力モデル

社会的権力モデルはCoakley(1992)によって提出されたモデルである。彼によれば、「バーンアウトとは一連の社会関係に基礎付けられた一つの社会現象である。そしてその社会関係とは、アスリート自身が次の点を認識してしまうまで、すなわちスポーツ参与が自分自身の発達を阻害しており、もはや自分自身の人生を有意義にコントロールすることができ



ないということを認識してしまうまで、彼らを無力化してしまうような社会関係である」(Coakley1992 : 272-273)。以下、この定義の要点を2つに絞って述べてゆこう。

1つ目は一次元的アイデンティティ (unidimensional identity) の概念をめぐるものである。一般に、アイデンティティは種々の社会的役割を経験することで多面的になり、様々な状況に適切に対処できるようになる、と言われている。しかし、こうした複合的アイデンティティ (multiple identities) と異なり、アスリートはほとんどアスリート役割 (たとえばパフォーマンスの向上や勝利至上主義) だけから成るアイデンティティ (=一次元的アイデンティティ) を有する傾向がある。というのは、アスリートはその競技水準が高まれば高まるほど、スポーツへのコミットメントを要求され、社会経験といってもスポーツに関連したものに限定されてしまいがちだからである。一次元的アイデンティティを有する主体は、次第に、「スポーツにおける卓越性は有能な人間であることを証明することにはならない」ということに気づく。換言すれば「彼らは、身体的スキルを発達させる機会を持てたこと、あるいは同級生の誰もが有さない経験ができたことを幸運であったと感じつつも、同級生の誰もが有しているはずの経験はできなかった」ということに気づくのである。こうしたアンビバレントな状況に対する不安感を持ちつつ、要求されるパフォーマンス水準に達することができなかった場合、1つの症状としてバーンアウトを発症してしまうのである (Coakley1992 : 275-278)。

2つ目はこうした一次元的アイデンティティを生み出す社会力学についてである。まず、アスリートの親やコーチがアスリートの有する時間やエネルギーをコントロールする事態が考えられよう。つまり、周囲の人間がアスリートにアスリート役割を求めれば求めるほど、当然、一次元的アイデンティティに陥る可能性は高まるのである。しかし、アスリートは周囲からの期待にさらされつつも、やはり自分の道は自分で選択している (と感じている)。しかし、アスリートがアスリートとして生きるということを選択した瞬間、周囲の人間は、たとえば目標を設定するという仕方、アスリートへの支配力を暗黙的に行使し始めるのである。もちろん、周囲の人間は概して悪意など有しておらず、アスリートもたとえば「親のためにアスリートとして生きてきた」とは思っていない。しかし、「ほとんどの人は、自分の成功がどれだけ親を幸せにするかを知っていたので、失敗してがっかりさせたくなかった」(Coakley1992 : 278-280)、と語るのである。ここにも、やはり、アンビバレントな構造が存在する。すなわち、「(被調査者) 15人のうち7、8人は両親やコーチに対する怒りやルサンチマンを示したが、同時に全てが悪かったというわけではないと語る」のである

(Coakley1992 : 275)。

Coakley (1992) によれば、アスリートもその周囲の人間も、いわば「権力の罟」に巻き込まれている。つまり、彼らは知らず知らずのうちに様々な可能性を限定するよう導かれてしまう、というのである。こうした導きの首謀者は不可視的である。それゆえ、一次元的アイデンティティを有するアスリートのアンビバレントな態度が生じてくる。つまり、アスリート役割以外の役割を習得する機会を逃したのは、スポーツのせいでも、周囲の人間のせいでも、そして自分のせいでもない、とアスリートは考えるのである。では、一体、誰が彼らを導いているのだろうか。Coakley (1992 : 272) によれば、その首謀者は「ハイパフォーマンススポーツ組織」である。パフォーマンスの向上を求める、まさにそのとき、この社会組織はその権力を行使しはじめる、というのである。そしてその権力作用は不可視的であり、戦うべき相手が分からないまま、アスリートの力は無力化されてゆくのである。

## 2. 2. 役割葛藤モデル

社会的権力モデルでは、バーンアウトは社会組織（社会的権力）の不可視的で暗黙的な強制力によって、アスリートが無力化される地点で発症する。このモデルは、単純化すれば、「個人と社会」という枠において、個人を社会が駆逐してゆくという構図に依拠するものである。これに対して、役割葛藤モデル（吉田 1989、1992、1994）では、「主体と状況」という枠における、（主体の）自我の変容過程に焦点が当てられる。

吉田 (1994 : 70) によれば、バーンアウトにいたる過程は「競技への熱中→競技成績の停滞・低下→競技への固執→消耗」と定式化できる。まず、「競技への熱中」の段階において、アスリートは「ヒーローアイデンティティ」を形成する。つまり、アスリートは、重要な他者（たとえば親やコーチ）からの役割期待に応える中で、社会的な成功体験を繰り返し、「高い自尊感情を有するヒーロー的競技者としてのアイデンティティ」を「真の自我」として自我の核心に置くようになるのである。しかし、遅かれ早かれ、「競技成績の停滞・低下」の段階がやってくる。この新しい状況では、これまでの「ヒーローアイデンティティ」は満たされない。つまり、これまでの「ヒーローアイデンティティ」と新しい役割期待との間に葛藤が生じてくるのだ。吉田によれば、この葛藤状態にどのように対処するかで、バーンアウトを発症するかどうかは決まってくる。選択肢は2つしかない。1つは「ヒーローアイデンティティ」に固執する道であり（バーンアウトの発症）、もう1つは新しい役割期待を受け入れる道である（バーンアウトの回避）（吉田 1994 : 71）。

「ヒーローアイデンティティ」に固執する道は、アスリートの態度によってさらに2つに分けられる。1つは（スポーツヒーロー以外の）新しい役割期待を拒否するものであり、もう1つはそうした新しい役割期待から距離をとるものである。前者を選択すると、「ヒーローアイデンティティ」と新しい役割期待は鋭い緊張状態に置かれることになり、重度のバーンアウトの発症へとつながってゆく。他方、後者は、新しい役割期待をある程度認めるが「ヒーローアイデンティティ」は保護する、といういわばどっちつかずの道であって、いわゆる「くすぶっている」状態である（軽度のバーンアウト）（吉田 1994 : 71）。

バーンアウトを回避するためには新しい役割期待を受け入れ、古い「ヒーローアイデンティティ」とは異なる新しい自我を形成する必要がある。そのとき重要になってくるのが、積極的な主体性と（重要な他者の）情緒的な支えである。積極的な主体性とは、主体の内省活動が活発化している状態のことである。つまり、アスリートは自分で自分自身を見つめるとともに、自分が今置かれている状況について反省するのだ。こうした主体性は自力で発揮されることもあるが、多くは（重要な他者の）情緒的支えのもとで活性化してくる。たとえば、恩師のちょっとした一言によって、自分の置かれている状況にふっと気づかされることがあるだろう。つまり、情緒的支えに導かれて、積極的な主体性を発揮することで、バーンアウトは回避されるのである。というのは、自分自身、そして自分の置かれている状況を客観的に把握できるということは、「ヒーローアイデンティティ」への固執を脱して、自我の社会性が拡張されたことを意味するからである。

そこで、吉田（1992 : 642）はバーンアウトを次のように定義する——バーンアウトとは「真の自我にとって敵対的な役割期待を内面化した『Me（客我）』（問題状況的Me）に対して創発的内省性（問題状況的Meを修正、変更、再構成する働き）の源泉であり、真の自我から派生する『I（主我）』が、創発的内省性を発揮出来ずに反作用を起こして（抵抗して）いる状態」である（吉田 1992 : 642）。

この定義を単純化すれば、バーンアウトとは真の自我（「I」）と新しい役割期待（「Me」）の葛藤状態である、というものであろう。しかし、若干の問題は存在する。それは、創発的内省性の源泉が「真の自我から派生する『I』」とされている点である。つまり、「真の自我」と「I」は異なるものであり、その上で「真の自我」から「I」が派生する、と考えられている。つまり、「真の自我」は「I」よりも広い概念とされているのだ。しかし、この設定はむしろ逆ではないだろうか。つまり、「I」の一部として「真の自我」を置いた方が良いのではないだろうか（注③）。先述したように、新しい役割期待と敵対する「真の自我」と

は「ヒーローアイデンティティ」のことである。とするならば、「ヒーローアイデンティティ」を乗り越える力（＝創発的内省性）は、「ヒーローアイデンティティ」の外から、あるいはそのさらなる内（＝深部とも言えるし源泉とも言える）から来ると考えるべきであろう。そして、こうした力の場所こそ「I」なのではないだろうか。

吉田（1989）は、別のところで、アスリートの動機づけについて、競技開始期には内発的動機づけ（たとえば競技活動そのものの楽しさ）が優位であるが、不断の競争にさらされるなかで、次第に外発的動機づけ（たとえば自尊心の満足）が優位になると指摘している。つまり、自我は、内発的動機づけに基づく部分と外発的動機づけに基づく部分によって構成されているのである。両者は動機づけの源泉を異にするという点で次元を異にしている。それゆえ、別の用語によって指し示すべきである。そこで、ここでは、内発的動機づけに基づく部分を「真の自己」（＝「I」）、外発的動機づけに基づく部分を「真の自我」（＝「ヒーローアイデンティティ」）と呼んで区別しておこう。

このように考えることで、創発的内省性の源泉は「真の自己」（＝I）であり、その発動を妨げているのは「真の自我」（＝「ヒーローアイデンティティ」）であると整理することができる。そこで、吉田による先の定義は次のように修正できるだろう——「バーンアウトとは「真の自我」（＝「ヒーローアイデンティティ」）と新しい役割期待（＝「Me」）の葛藤状態であり、その葛藤状態を乗り越えるために必要とされる創発的内省性（＝「真の自己」＝「I」）の起動が「真の自我」（＝「ヒーローアイデンティティ」）によって妨げられている状態である」。

以上で社会学系パラダイムの検討を終わる。社会学系パラダイムとして、バーンアウトの包括的定義を暫定的に提示すれば次のようになるだろう——「バーンアウトとは、アスリートがハイパフォーマンススポーツ組織の『権力の罫』のせいで無力化された状態であり、その権力作用の形成物である一次元的アイデンティティ（＝「ヒーローアイデンティティ」）が、新しい役割期待に対して、あるいは『真の自己』に対してさえ、敵対してしまっている状態である」、と。

### 第3節 体験論系パラダイム

ここまで、心理学系パラダイムと社会学系パラダイムにおける主要モデルを検討し、両者におけるバーンアウトの包括的定義を示した。バーンアウトは、心理学系パラダイムでは主

に心身に現れる症状の観点から定義されており、社会学系パラダイムではバーンアウトそのものではなく、バーンアウトを誘発する社会的条件の観点から定義されていた。つまり、両者とも、バーンアウトを、学問的ディシプリンの観点から、還元主義的に把握しようとするのである。それゆえ、バーンアウトとは何なのかという問いにダイレクトに答えるものとは言えない。比喩的に言えば、どちらも、バーンアウトの本質をいわば外側から捉えようとしているのである。そこで、われわれは、体験論系パラダイムの視点からバーンアウトを考察してみよう。体験論系パラダイムとは、社会化(=「経験」と超社会化(=「体験」)を峻別するパラダイムのことである。

### 3. 1. 「体験」という視点

先に述べたように、「体験」とは、「偶然的」に到来し、「個人の特異性」の源泉となる経験のことであった。心理学系パラダイムも社会学系パラダイムも、こうした「体験」を完全に無視しているというわけではない。たとえば、心理学系パラダイムのコミットメントモデルにおける「したい」の次元、あるいは吉田(1989)における内発的動機づけの次元は、「体験」の次元に含まれる要素と考えられる。というのは、アスリートがスポーツを「したい」と感じたり、「楽しい」と感じたりするのは、「体験」にともなう感動に根ざしているからである。いつまでたっても上達しない活動に「楽しさ」を感じるだろうか。少なくとも、主体にとって少しでも上達しているという実感があればこそ、スポーツ活動を「したい」と感じるのである。それゆえ、「体験」に導かれていれば、つまり超社会化の軌道に乗ってれば、アスリートはバーンアウトすることはないだろう。逆に、「体験」の軌道を離れることで、つまり社会化の軌道に乗ることで、アスリートはバーンアウトするのである。しかし、この点を追求する前にCoakley(2009)の研究に触れておこう。先に述べたように、Coakleyはもともと社会的権力モデルの提起者であったが、近年、「体験」の次元を重視しはじめている。

Coakley(2009)が重視するのは、個人の才能の展開という観点である。才能を展開させるためにはもちろん外的条件(アドバンテージ・好機・運)が必要である。しかし、彼によれば、こうした外的条件は必要条件であり、十分条件ではない。才能の展開に必要な十分条件とは、アスリートを導く情熱(passion)とそれに基礎づけられたハードワークである、とされる。アスリートを導く情熱は周囲の叱咤激励や組織的なコントロールによっては育まれない。そうではなく、アスリートを導く情熱は、幼少期における、自由で創意工夫に溢

れた「遊び体験」とそこで湧いてくる「喜びの感情」に由来する、というのである。アスリートは、10代半ば以降、スポーツへのコミットメントを限定しようとする。つまり、アスリートを導く情熱は、プライドや専門的な身体的スキルの習得へと注がれ、優れたコーチによる計画的練習によってスキルが身につくとともに (internalization)、アスリートの内面には「インナーコーチ」(inner coach) が形成されてゆく。しかし、もちろん、この過程は外的に強制されたものではない。そうではなく、この過程は、アスリート自身によって、つまりアスリートが自分自身の経験を持続的に変化・拡張させようと求めたものなのである (Coakley 2009 : 38)。

Coakley (2009) によれば、こうした個人の「自律性」と「創造性」を阻害する力が働くとき、バーンアウトを発症する蓋然性は高まる。逆に言えば、「彼ら自身の考え方でスポーツを捉えたり、彼ら自身のペースでスキルを発達させたり、挑戦したりすることが許された条件下において、また非公式に多くのスポーツを楽しんだ体験を有しているとき」、バーンアウトを発症する危険性は小さくなるのである (Coakley 2009 : 39-40)。

### 3. 2. 「エネルギーの空転」という視点

「体験」の次元を重視すると、そして Coakley (2009) の指摘を踏まえると、バーンアウトを捉える際には、アスリートの動機づけ (=アスリートを導く情熱) に注目することの重要性が浮かび上がってくる。一般化して言えば、アスリートを導くエネルギーがどの軌道に乗っているか、この点が重要なのだ。

先に述べたように、アスリートを導くエネルギーが超社会化の軌道に乗っているとき、バーンアウトは生じにくくなる。というのは、超社会化の軌道とは、「体験」を更新してゆく軌道であり、アスリートを導くエネルギーは「喜びの感情」に基礎づけられて常に「体験」の更新へと注がれている、と考えられるからだ。逆に、社会化の軌道に乗っているとき、バーンアウトは生じやすくなる。というのは、社会化の軌道とは、定義上、「体験」の更新が生じにくい軌道であり、それゆえアスリートを導くエネルギーは超社会化の軌道を離れてゆく、あるいは逸れてゆく、と考えられるからである。

では、アスリートを導くエネルギーはどこに逸れてゆくのであろうか。心理学系パラダイムと社会学系パラダイムの知見を援用して考えてみよう。まず、ストレスモデルで言えば「評価-再評価の循環運動」が考慮に値する。ストレスフルな状況に対して直接的に反応すれば、エネルギーは多少とも放出されるはずであろう。しかし、バーンアウトにおいては、

エネルギーは個人の思考回路に備給され、「評価—再評価の循環運動」においていわばくるくると旋回するのである。また、コミットメントモデルで言えば、「しなければならない」という型が考慮に値する。主体はそこで「させられている」と感じることだろう。しかし、論理上、やはり「何か」に「させられている」はずだ。この「何か」は少なくとも外的な基点であり、この「何か」へとエネルギーは備給されている、と考えられよう。では、この「何か」（外的な基点）の中身とは何なのだろうか。たとえば、投資モデルにおける「投資と依存の悪循環」で言えば、「何か」とは投資に見合った見返りへの期待であろう。また社会的権力モデルにおける「権力の罨」で言えば、「何か」とは社会組織の権力作用であろうし、「アンビバレント」で言えば、「何か」とは叶わなかった経験のことであろう。そして役割葛藤モデルにおける「葛藤状態」で言えば、「何か」とは過去の栄光のことであろう。つまり、バーンアウトにおいては、アスリートを導くエネルギーが「何か」（外的基点）へと逸らされているのである。ところで、この軌道のもとでは、つまり社会化の軌道においては、「体験」は更新されにくいのであった。それゆえ、アスリートを導くエネルギーは逸らされるだけでなく、「体験」が更新されないという意味で、「何か」（外的基点）をめぐるくると旋回している、と考えられよう。そこで、われわれは、バーンアウトを次のように再定義することができる——「バーンアウトとは、アスリートを導くエネルギーが、何らかの外的基点をめぐるくると旋回している状態であり、端的に言えば『エネルギーの空転』である」、と。

バーンアウトとは「エネルギーの空転」である。しかし、アスリートがどのような「何か」（外的基点）に依拠するかによって、バーンアウトの質は変化してくるようと思われる。繰り返しになるが、アスリートの視点から再説しておこう。1つは、過去の理想的状態をめぐる場合である。アスリートは、程度の差はあれ、超社会化を導く「体験」によって動かされている。過去にそうした「体験」がないのに、スポーツ参与を継続するとは考えられないからだ。しかし、「体験」が更新されないと、アスリートはしばしば過去の理想的状態を実体化し、その状態を追い求めようとする。換言すれば、「何か」（外的基点）を設定し、その場所に過去の理想的状態を置いてしまうのである。もう1つは、功利主義的関心をめぐる場合、たとえば「こんなに練習したのに誰も認めてくれない」といった場合である。アスリートは、競技水準が高度になればなるほど、時間とエネルギーをスポーツへと注ぎ込まなければならない。先に見たように、こうしたコミットメントが超社会化の軌道に乗ったものであれば、つまりスポーツ活動が「楽しく」、もっとうまくなりたという情熱を原動力としてい

るのであれば、エネルギーは空転しない。しかし、何らかの理由で——やはりこの場合でも「体験」の更新の欠如が主な理由だろう——超社会化の軌道を逸れると、今度は、それまで投資してきた時間とエネルギーに見合ったもの——たとえば金銭や他者の承認——を求めようになるのである。換言すれば、アスリートは「何か」（外的基点）を設定し、そこに功利主義的なものを置いてしまうのだ。

最後に、バーンアウトと似た症状を呈するものとして、（心身における）緊張のあとの弛緩状態について述べておこう。たとえばプロ野球選手の生活はオンシーズンとオフシーズンに分かれている。彼らは、オンシーズンには多大なエネルギーを投入するけれども（＝緊張状態）、オフシーズンには緊張を緩めて英気を養っている（＝弛緩状態）。この心身の弛緩状態は見かけ上、バーンアウトと似ており、実際、時には身体的・精神的な消耗感に襲われることがあるかもしれない。しかし、この弛緩状態は、生命の有する緊張と弛緩のリズムの一側面であり、超社会化の軌道に乗っている、と考えられる。それゆえ、たとえバーンアウトしているように見えたとしても、ここでの心身の弛緩状態はバーンアウトとは言えない。バーンアウトの核心は、こうした生命のリズム（＝超社会化の軌道）から離脱し、「何か」（外的基点）をめぐって「エネルギーが空転する」ところにあるのだ（＝社会化の軌道）。

## おわりに

本章では、スポーツにおける病理現象の1つとして、バーンアウトを取り上げ、特にその概念について検討してきた。まず、先行研究として、心理学系パラダイムと社会学系パラダイムを取り上げた。しかし、両者はともに還元主義的であり、バーンアウトの本質をダイレクトに突くものではなかった。バーンアウトとは何か。こう問うた場合、心理学系パラダイムは、心理状態であれ、認知的評価であれ、態度であれ、やはり個人の次元へと還元する。他方、社会学系パラダイムは、権力であれ、役割であれ、相互作用であれ、自我であれ、やはり社会の次元へと還元するのだ。そこで、こうした還元主義を乗り越えるため、体験論系パラダイムを構想するにいたったのである。

われわれは、まず「体験」という視点を導入した。そして、その上で、アスリートが「体験」に導かれる場合（＝超社会化）と、「体験」から離脱し、「何か」（外的基点）に従属する場合（＝社会化）とを区別したのである。超社会化の軌道上では、バーンアウトは生じにくくなる。というのは、そこでの主体は「体験」をともなう感動を原動力としており、アス



リートを導くエネルギーは絶えず「体験」の更新に向けて注がれているからである。他方、社会化の軌道上では、バーンアウトは生じやすくなる。というのは、そこではアスリートを導くエネルギーが「何か」（外的基点）をめぐって旋回してしまい、「体験」が更新されにくくなるからである。こうした考察によって、われわれは、バーンアウトを「エネルギーが空転している状態」と規定するにいたったのだ。バーンアウトの核心は、主体が「体験」の次元から離脱し、「何か」（外的基点）に従属するところに存する。そして、この規定を前提に、アスリートを導くエネルギーの運動という観点で捉えるとき、バーンアウトの概念が得られるのである（＝「エネルギーの空転」）。

では、バーンアウトを乗り越えるためにはどうすれば良いのだろうか。本章の知見をもとに答えれば、端的に「体験」を更新しつづけてゆくことである、と言えよう。ところで、「体験」は「偶然性」と「個人の特異性」といった要素を有しているのであった。そうすると、「体験」を更新してゆくためには、(いつ到来するか分からない)「体験」の到来を待たなければならず、また個人の特異性を生かすような指導が求められることになる。しかし、スポーツにおける競争主義的状况は、「体験」の到来を待つなどくれないだろう。アスリートは常に成果を求められている。つまり、「何か」（外的基点）——この場合は成果——に従属するよう求める力に、アスリートは常にさらされているのだ。われわれは、それでもなお、のちに、「体験」の更新を重視するコーチング方法を検討するだろう。というのは、バーンアウトを回避する道はそれしかないからだ。しかし、その検討に入る前に、スポーツにおける病理現象をもう1つ取り上げておくことにしよう。

## <第2章 注釈>

---

- ① 本稿では取り上げないが、身体的ストレス（トレーニングストレス）とバーンアウトとの関連を扱った研究もある。そこではへばり（staleness）・オーバートレーニング・バーンアウトの概念的相違について考察されている（Silva 1990）。しかし、ここでは、ストレスモデルの発端に位置し、また多くの研究が依拠しているという点で、smith（1986）の議論を選んで検討することにする。
- ② パーソナリティ特性に関してはメランコリー親和型性格特徴・執着性格とほぼ合致するという見解もある（岸ら 1989：236-237）。
- ③ ミードの提起した「I」の概念は難解であると言われている。ここでは、筆者は作田

(1993 : 50-52) の解釈を念頭に置いている。作田によれば、定着のパースペクティブでいけば、「I」は2つの解釈しか成り立たない。1つは「I」を生物的・生理的レベルに位置づけるものであり、もう1つは自我全体から「Me」を除く残余と見なし、個人的差異をもたらす一種の「屈折装置」として位置づけるものである。しかし、作田によれば、ミードの主張したかったのは、「I」を生成のパースペクティブで捉えること、すなわち人間の自発性や創造性の表現として位置づけることである。比喩的に言えば、「I」とは川の流れのようなものである。川にはいろいろなものが入ってくるけれども(=「Me」)、「I」はいつも流れつづけている。「I」には、喜びや悲しみなどの感情がともなっている。しかし、そうした感情はどれほどカテゴリー化されようとも、やはり「私」の喜びであり、「私」の悲しみなのだ。このように、「I」とは、われわれの言葉で言えば、「個人の特異性」の拠点であり、またその表現なのである。

## 第3章 アスリートにおける「キャリアトラン ジション問題」

### はじめに

前章では、スポーツにおける病理現象の1つとしてバーンアウトを取り上げた。バーンアウトは、どちらかと言えば、アスリートがパフォーマンスの向上を求めて前進しているときに生じやすい病理現象と言える。それに対して、本章では、アスリートが後退するとき、つまり現役生活を引退しようとするときに生じやすい病理現象を取り上げてみよう。この病理現象は特に名づけられてはいないが、アスリートが現役引退に際して心身の混乱状態に陥ることは広く知られており、一般には「キャリアトランジション（キャリア移行）問題」と呼ばれている。

「キャリアトランジション問題」に対処するため、各スポーツ団体はキャリア教育という仕方で予防措置を講じている（注①）。すなわち、現役選手は競技に没頭するあまり、引退後のことにまで気が回らず、アイデンティティの在り方も偏ってしまうので、あらかじめ競技以外の職業能力や社会的・心理的適応能力を涵養しておくべきだ、と考えるのである。それは、一言で言えば、他の役割に向けての予期的社会化である。

キャリア教育は生涯発達論・生涯社会化論に依拠している。それによれば、人生とはキャリアを積み重ねてゆく過程であり、同時に人間性も発達する過程である。スポーツキャリアもやはりキャリアの1つであり、それゆえこの観点がスポーツ選手の引退にも適用されているのである。この考え方には一理ある。ただ一般に社会化論は社会の個人に対する作用（＝役割期待）を強調するので、その逆、すなわち役割に対する個人の意味づけの側面が捉えづらくなる。たとえば何らかの役割に没頭してしまうのは、個人が役割期待に過剰に応えようとするといった側面だけでなく、個人がその役割に重要な意味——生きがい——を見出しているからでもあり、そこでの経験が「私は生きている」という感覚——生命感——を与えてくれるからであろう。つまり、人は当該活動が「楽しい」（生命感）からこそ、その役割に意味を見出す（生きがい）のだ。とするならば、「キャリアトランジション問題」は、新しい役割への不適応という側面とともに、生命感（生きがい）の喪失という側面を含んで

いるのである。

本章では、こうした生命感（生きがい）の喪失という側面を重視することで、従来の「キャリアトランジション」研究とは異なる視点を提示してみたい。そこで、まず先行研究を検討し、特に現在主流となっている移行モデルの問題点を明らかにしよう。次に、この問題点を解決するために、超社会化の概念を導入し、「キャリアトランジション」を捉えるための新しいモデル——人間学モデルと呼ぶ——を構築しよう。そして、その上で、このモデルを使って、1つの事例——日本野球独立リーガーの場合——を分析してみよう。

## 第1節 作業枠組みの構築

### 1. 1. 先行研究の検討

スポーツ選手の引退を捉えるモデルの構築は1980年代初頭における老年学とタナトロジーの援用に始まる。しかしその後それらのモデルでは当該事象の全体像を把握できないという批判が生じ、その代替案として移行モデルが提示されるに至っている（ex. 中込 2000、Levin2005）。

老年学とタナトロジーの援用可能性（Rosenberg1981, 1984、Lerch1981, 1984）に対する主要な批判は両モデルの前提そのもの、すなわち引退を「終焉」（termination）として捉える視点そのものに向けられている。具体的に言えば老年学モデルは加齢による職業的世界からの完全撤退（＝終焉）を前提する。しかしスポーツ選手の場合、むしろ引退後にこそ労働生活の大部分が存在するわけであるし、またスポーツ領域から完全撤退するのではなく別の仕方でスポーツに関わり続ける者が多数派である。他方、タナトロジーモデルでは「社会的死」（social death）、すなわち役割の非自発的剥奪（＝終焉）という仕方で引退を捉え、この事態に対する処理機制として、たとえばキューブラー＝ロスの「死を受容する五段階説」の援用可能性を指摘する。しかしこの観点は引退を過度に否定視しており、スポーツ選手全体——たとえば適応困難を経験しない者も存在する——に該当するわけではない。つまり、「引退＝終焉」という前提では引退を限定的にしか捉えられないのであり、それゆえもっと包括的なモデルが必要だと見なされたのである（ex. Blinde and Greendorfer1985、Curtis and Ennis1988）。

ここで移行モデルという代替案が出てくる。それは、引退を「終焉」ではなく、当事者の生涯発達（生涯社会化）の「プロセス」の一環として捉えようとするもので、とりわけカウ

ンセリング心理学に発する Schlossberg のモデルの有用性が強調されている (Swain1991、Crook and Robertson1991)。

Schlossberg (1981) によれば、移行 (transition) とはある出来事が当事者の諸想定 (自分自身や世界に関する) に一定の変化をもたらし、その新しい状況への適応が要求される事象である。そして適応とは当事者がその新しい状況を自己あるいは生活の中に統合することを指す。彼女はこの「移行に対する適応」という観点を前提にした上で、この過程に影響を与える諸要因を、移行特性、環境特性、個人特性の3つに分類している。たとえば移行特性群には役割変化 (獲得的/喪失的)・原因 (内的/外的) が、環境特性群にはインターパーソナルなサポート (家族や友達)・機関からのサポートが、個人特性群には心理社会的能力 (ex. 自負心や自己像の一貫性、将来に対する態度)・性役割・健康状態・社会経済的地位が入る、という具合である。こうした諸変数はスポーツ選手用に容易に修正可能である。たとえば、Crook and Robertson (1991) はより相関性の高い要因として、自発的か否か (移行特性)、コーチの役割 (環境特性)、スポーツへの依存度と予期的社会化 (個人特性) を挙げている。

このように「移行に対する適応」には多くの変数が介在する。しかし重要なことはこれらを主体にとっての資源 (resources) と見なし、この資源と負債 (deficits) とのバランスこそ適応の明暗を分けるポイントだ、と考える点にある (Schlossberg1981)。たとえばケガによる引退を考えてみよう。ケガという非自発的な出来事は移行自体を暗くさせ (移行特性)、主体の自己統制感の減退を招くとともに、予期的社会化も不十分であることだろう (個人特性)。しかし、もし家族や友人のサポート (環境特性) が緊密であれば適応は成功するかもしれない、というわけである。つまり、適応の核心は全ての諸資源を高スコアに保つことなのであり、それゆえサポートマニュアルの構築もこの観点から行われているのである (Petipas, A. et al. 1997=2005)。

移行モデルの構成要素は移行、適応、諸要因の3者である。しかし生命感の次元はこの3者のどこにもフィットしない。まず「移行に対する適応」は「生命感の喪失と回復」と同じではない。すなわち、移行がそのまま生きがいの喪失を指すわけではないし、適応がそのまま生きがいの回復を意味するわけでもない。それゆえもし移行と適応の概念の中に生命感の次元を入れようとする、とすると、不当な概念拡張を招くことになる。そこで今度はこの「移行に対する適応」の枠はそのままにしておいて、諸要因の中に生命感を含めてみよう。この場合、生きがいの無い場合は負債、有る場合は資源と見なされるはずである。とするならば、生き

がいが無くても諸資源が豊富であれば適応的であるという場合が出てくる。この考え方は不可能ではないけれども、かなり違和感を覚える。なぜなら、本当の意味での「適応」とはやはり自分の役割に生きがいを見出している状態である、と考えられるからである。ただそうすると、今度は、適応の概念を拡張しないといけなくなるのである。

## 1. 2. 超社会化と生命感

こうした移行モデルの不具合は社会化論そのものに由来している。この点を確認し、生命感の概念を明確にしておこう。

先に述べたように、社会化とは、社会の機能の 1 つであり、当該社会で要求される役割（価値観や知識）を新成員に習得させる作用であった。スポーツ界で言えば、社会化によって、スポーツ界は新しい選手を確保しその存続を図ることができるし、選手の方もスポーツ界で求められる役割を習得することでアイデンティティを形成してゆく、というわけである。しかし、社会化の概念は、個性や創造性を捉えることはできないのであった。というのは、個人が社会によって形成されるとすれば、論理上、個人は社会を超えてはいけないことになるからだ。もっとも、個人は当該集団とは別の集団の観点に立って意志決定する、と考えることもできる。これが移行モデルの考え方であろう。しかしこの場合でも個人は何らかの集団に依存していることになるので、個人には「選択の自由」はなくなってしまうのである。それゆえ、社会化の範域（＝「閉じた社会」）の外（＝「開いた社会」）へ向かう志向として、超社会化の概念が必要とされたのである。

超社会化とは「体験」に導かれることである。そして「体験」とは、主体に飛躍をもたらすとともに（＝「偶然性」）、主体にしか分からないものでもあった（＝「特異性」）。こうした「体験」の中身について、ここでは、チクセントミハイ（1975）が楽しさ（enjoyment）の源泉として位置づけたフロー（flow）の概念を取り上げてみよう。フローとは、文字通り「流れること」であり、「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」（Csikszentmihalyi1975=2000：66）のことである。チクセントミハイによれば、フローを経験しているとき、主体の注意はある領域に限定されており、行為と意識は別々のものとしてではなく 1 つのものとなって作動する。すなわち、主体は行為を意識しはするがその意識そのものを意識することはないのである。そこでは、意識は研ぎ澄まされているので、時には通常は知覚できない微細な環境の変化や身体の動きが手に取るように分かってくる。そしてこの驚異的な知覚能力によって、流れるような連続的行為が可能になるのだ

(Csikszentmihalyi1975=2000 : 68-84)。

こうしたフロー経験は、いつでも到来するわけではなく (=「偶然性」)、また誰にでも到来するものではないだろう (=「特異性」)。しかし、チクセントミハイの理論で重要なのは、人間はそもそもフローを求めているという点である。ある熟練したロック・クライマーの言葉を引用しよう。

ロック・クライミングの神秘で崇高な雰囲気は、登るということの中にあります。頂上について終わったと喜ぶ。しかし本当は永遠に登り続けることを望んでいるのです。…〈中略〉…フローの目的は流れ続けるということ、頂上やユートピアを望むということではなく、流れの状態を保ち続けるということです。登るということではなく、絶え間のない流れなのです。この流れを保つために登っているにすぎません (Csikszentmihalyi1975=2000 : 83)。

ロック・クライミングの目的は、頂上を目指すということではなく、「登る」ということでもない。そうではなく、「流れ続けるということ」なのだ。ところで、チクセントミハイによれば、フローには程度がある。深いフロー (deep flow) はスポーツ領域において生じやすい。しかし通常の仕事の場面でもフローは見られる。外科医のメスさばき、あるいはスーパーのレジ打ちでさえ、一連の行為がスムーズに流れる時には楽しさを感じるのである。さらに言えば日常生活においても微小なフロー (micro flow) は存在する。たとえば喫煙や喫茶などの行為中にはフローが生じやすい、とされる。要するに、繰り返せば、人間はフローを求める存在者なのである。フローは個人の主体性のささやかな基盤であり、もしフローの追求が制限されれば、人は世界との調和的狀態を失い、非常にストレスフルな状態に陥ってしまうだろう (Csikszentmihalyi1975=2000)。

フロー経験は人間の生の根幹に通じている。なぜなら、楽しくない活動は生きている感じ (=生命感) がしないからである。そこでフロー経験にともなう楽しさの感覚を総称して生命感と呼ぶことにしよう。そして、こうした生命感に基づいた、主体の活動への意味づけを「生きがい」と呼びたい (注②)。

フロー経験は生命感をもたらす。それゆえ人は以後そうした「体験」を重要な基準点と見なし、「体験」を更新しようとする。こうした(「体験」に基礎づけられて)主体を導いてゆく運動こそ、超社会化なのだ。しかしフロー経験は諸刃の剣でもある。というのはそれがあ

まりに楽しいゆえ、フローとの別離を困難にしたり、フローに依存してしまったりすることがあるからだ (Csikszentmihalyi 1975=2000 : 207-209)。そしてこの危険性はスポーツ、仕事、日常生活、全ての活動領域において潜んでいる、と考えられる。

### 1. 3. 人間学モデルの提示

「キャリアトランジション問題」を「生命感の喪失」という観点で捉えるためには、社会化の視点だけではなく、超社会化の視点を含めたモデルが必要とされる。そこで、われわれは、人間学モデルを構築してみよう (図 1、亀山 2012:146 を本章の文脈に即して援用する)。人間学モデルとは、社会化の次元と超社会化の次元を峻別するものであり、前者は円内の直線、後者は円の接線で示されている。

まず仮に中心  $O \rightarrow N$  (接線  $N$ ) を野球経験の軸とし、 $L$ 、 $M$ 、 $N$  の水準をそれぞれ高校野球、社会人野球、NPB (プロ野球) を表すものとしよう。そうすると、社会化は  $O \rightarrow L$ 、 $L \rightarrow M$ 、 $M \rightarrow N$  というように、各カテゴリーで要求される役割 (技術や価値観) を習得してゆく過程として示される。この過程は段階的であり、たとえば高校野球レベル ( $L$ ) の技術が未習得なのに NPB ( $N$ ) にゆくことはできない。他方、各水準にはそれに

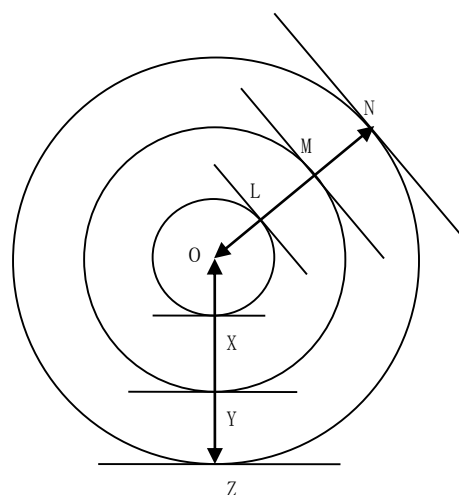


図 1 人間学モデル

これが接線  $L$ 、接線  $M$ 、接線  $N$  で示されるもので、社会化水準の上昇とともにフローも強烈になり、超社会化の影響力も強まってゆくことになる。このように社会化と超社会化はセットである。たとえば、退屈な反復練習でもいかほどのフローは存在しているし、逆に言えばそこにフローが生じているからこそ退屈な反復練習に取り組めるのである。

しかし、事実上、競技人生は短命である。そこで今度は競技を離脱する、あるいはその水準を下げる必要が出てくる。これが脱・社会化 (de-socialization) で、 $N \rightarrow M$ 、 $M \rightarrow L$ 、 $L \rightarrow O$  と下降する過程である。たとえば社会人野球で鳴らした選手が引退して草野球をする場合、 $M \rightarrow O$  付近へまで競技水準を下げたわけだ。他方、この脱・社会化はフローの喪失あるいはその減少をもたらさずにはいない。この種の後退過程を脱・超社会化 (de-trans-



socialization) と呼んでおく。すなわち接線N→接線M、接線M→接線L、接線L→0への下降である。脱・社会化と脱・超社会化はやはりセットである。たとえば技術や身体能力の低下によってフローは減少するし、逆に言えばフローの減少あるいは喪失を承認できなければ——少なくとも理論上は——実際にレベルを下げることはできないのである。

さて、超社会化は生命感を求め、脱・超社会化は生命感との別離に向かう。そして前者は社会化の動機づけの根拠であり、後者は脱・社会化の動機づけの根拠である。このように超社会化（と社会化）と脱・超社会化（と脱・社会化）とはベクトルの向きが逆である。しかし両者は「接点」においては重なっている。たとえば接点MはN（接線N）に向かう点であると同時にL（接線L）に向かう点でもある。とするならば主体はこの「接点」において非常に逆説的な状態に置かれることになる。ただ、こうした状態はアスリート（あるいは人間）の常態と考えられる。というのは、アスリートの生（あるいは人生）とは自分の実力の限界に曝されつつ、その限界を乗り越えてゆこうとする運動であるからだ。その意味で、この逆説性は現役のアスリートにとってはむしろ望ましいものとさえ言えよう。

しかし、この点における逆説性は、同時に、引退の困難性の源泉でもある。なぜなら、脱・超社会化しようとしても、「接点」で重なる超社会化の影響力を脱することは容易ではないからだ。脱・超社会化を導く「体験」は広い意味での「挫折体験」であると言えよう。それはたとえば「引き際を悟った」「腑に落ちた」などと表現される「体験」であり、超社会化を導く「体験」の場合と同じように、いつ到来するかは分からず（＝「偶然性」）、またそのアスリートが納得できなければならない（＝「個人の特異性」）。つまり、引退しようと思って引退するのではなく、ストーンと一挙に「腑に落ちる」、そういうものなのである。しかし、繰り返しになるが、逆に、この脱・超社会化を導く「体験」が到来しなければ、超社会化の影響力から脱しえないということになる。

さて、現役を引退すれば、何にしても新たな役割を習得してゆかなければならない。これが再・社会化（re-socialization）であり、0→X、X→Y、Y→Zへの段階的上昇である。他方、再・社会化の各水準にもそれに応じたフロー経験が対応する（接線X、接線Y、接線Z）。この（別の役割における）フロー追求を再・超社会化（re-trans-socialization）と呼んでおく。そしてやはり両者はセットである。なお付言すれば、再・超社会化（と再・社会化）の概念は別の役割における超社会化（と社会化）であり、それ以上の意味はない（注③）。

## 1. 4. 脱・超社会化と引退過程

引退過程の理念型を再説しておこう。まずフロー経験によって超社会化（と社会化）への志向が生じる。次にその超社会化（と社会化）の影響力と別離する「体験」（＝「挫折体験」）によって脱・超社会化（と脱・社会化）の志向が強まり、最終的には引退の決断に至る。そしてこれまでとは別の役割に従事する時期が続く（再・社会化と再・超社会化）。つまりN（接線N）→O地点→Z（接線Z）である。

この理念型に照らすと実際の引退過程は大きく2つに分けられる。1つは理念型通りに事が運ぶ場合——順路型と呼ぶ——であり、もう1つは理念型通りに事が運ばない場合——ショートカット型と呼ぶ——である。後者の一例としてはケガによる引退が考えられる。すなわちケガは非自発的に生起するため、脱・超社会化を導く「体験」のない不本意な引退になる可能性が高くなる。そこで、この型はN（接線N）→Z（接線Z）というふうにはO地点を迂回する、あるいは不十分に通過する型として設定することができる（この場合でもいつかは脱・超社会化を導く「体験」が訪れるだろう）。

ここで、正確を期すため、両者を分かつ基準について明確にしておきたい。その基準は、端的に、脱・超社会化を導く「体験」の有無あるいは強度であると言えよう。しかしこの基準そのものを客観的に測定することは不可能である。もっとも、行論からして、脱・超社会化を導く「体験」の強度は、超社会化の影響力（つまりフロー経験の強度）と正比例すると考えられる。たとえば超社会化の影響力が強ければ強いほど、脱・超社会化を導く「体験」もそれと同程度の強度を必要とするはずだ。とするならば、超社会化と脱・超社会化の強度の比較できれば有効な手段となるだろう。しかし、当の強度自体を評価することは困難である。

そこで、現状においては、結果の観点から、つまりアスリート自身が「腑に落ちた」上で引退したと感じているかどうかを操作的な基準としたい。たとえば同じように見える脱・超社会化を導く「体験」があったとして、その「体験」がAにとっては脱・超社会化を導く「体験」であり、Bにとってはそうではない「体験」であった場合、Aは順路型、Bはショートカット型に入ることになる。要するに、上の2類型を導くための操作的基準とは、脱・超社会化を導く「体験」に対するアスリート自身の主観的評価である。

以下、適宜、移行モデルによる解釈と人間学モデルによる解釈を併記し、両者を比較しながら事例を分析してゆくことにしよう。

## 第2節 事例の分析

### 2. 1. 事例の概要と調査手続き

事例として、日本野球独立リーグでプレーし、またすでに引退しているアスリートを取り上げる（注④）。彼らは経歴、境遇、競技水準において一様ではない。しかし、一般社会の基準から外れ、そして野球人生の節目でNPBからもリジェクトされ、さらにそれにもかかわらずNPBという夢を追いかけた、という点では共通する。彼らは通常の若者とは異なる基準で身を振り、しかも一流まで到達できなかった。その意味で独特のカテゴリーを形成している。おそらく彼らには彼ら特有の、そして一流選手には一流選手特有の引退パターンがあるのだろう。しかし、人間学モデルは一般モデルであるから、カテゴリーの種類を問わず適用することができる。

筆者は2009年夏から2010年春までの間、四国九州アイランドリーグの強豪、香川オリ

ーブガイナース球団（以下ガイナース）に所属したことのある選手8名に、対面及び電話にてインタビューを行った。調査対象者の抽出にあたっては自力探索と雪だるま式サンプリング法を併用した。インタビューではライフストーリーと特に引退に際しての諸事情を聴き取った。表1は彼らの野球歴を示したものである。

氏名	野球歴
A	高校→大学→ガイナース
B	高校→大学→ガイナース
C	高校→高校→大学（中退）→C→社会人→ガイナース
D	高校→社会人→ガイナース→専門
E	高校→大学（休学・中退）→ガイナース→専門
F	高校（中退）→ガイナース
G	高校→大学→ガイナース→1A（アメリカ・マイナー）
H	高校→大学（休学）→ガイナース→大学→IL' →C→IL"

（Cはクラブチーム、専門はスポーツ専門学校と野球の盛んな専門学校、IL'・IL"は独立リーグの他球団を意味する）

表1 調査対象者の野球歴

### 2. 2. 超社会化を導く「体験」の例

引退の困難性は超社会化の影響力を前提とする。そこで超社会化を導いた（と解釈される）

「体験」を例示しておこう。

Dは少年時代にNPB選手と直に接した「体験」を基点に、一貫してNPB選手を目指すようになり、「自分で考えて練習をするようになった」と言う。高校から社会人へと進む時にも自分の実力とNPBとを比較して「プラス $\alpha$ を求めて」道を決めたという。つまり、通常は漠然とした憧れに留まるであろう出会いのは、DにとってはNPB選手という基準を設定せしめた「体験」として捉えられたのである。

またEは中学時代に必死で練習し、高校の特待生待遇を獲得できたことが一番大きな出来事だったと言う。技術的にも「ぼんぼんぼんぼん上達してそれがおもしろかった」し、「ベストのプレー」も当時に到来している。それは同点を阻止した補殺であり「イメージは残っている」。

そしてCは高校時代の先頭打者ホームランが決定的な「体験」だったと語る。「未だに頭に感触みたいなんは残ってますし、何より自信になりました」。それはレギュラー獲得につながったホームランであり、練習も熱心に取り組むようになり、「NPBにも絶対行ける」と思ったという。

ガイナーズでの「体験」で言えば、Aは某NPBの2軍選手と試合をして「守備だったらNPBに十分通用する」と自信をつけている。それは三塁に向かう一塁ランナーを外野からダイレクト送球で刺した「体験」で、やはり「映像は鮮明に残っている」。こういったファインプレーはランナーとの「微妙な駆け引き」の中で生まれる。しかし「一番良いのは送球しないでも相手をくぎづけにすること」であり、Aはこのさらに上の境地に向けて基礎技術の重要性を再認識し、「もっともっと頑張ろう」とモチベーションを高めたという。

以上の例はフロー（流れ）の表現という点では不十分な記述にとどまっている。しかし全ての例はある特異な（と体験者に捉えられた）「体験」が体験者自身の基準となり（＝超社会化）、動機づけの源泉として以後の選択を導いている（＝社会化）。

### 2. 3. 順路型

順路型は脱・超社会化（と脱・社会化）を経た上で、再・超社会化（と再・社会化）に移行する型であった。

まずAのケースを典型例として詳しく紹介しよう。彼はガイナーズのキャプテンであり、自他ともに認める「守備はNPBに十分通用する」選手であった。そして4年目のシーズン——くしくも引退年となる——は「ダメだったらやめよう」と不転の決意で臨んだシーズ

ンだったという。

シーズン序盤は好調だった。しかし中盤に「一番つらかった時期」が到来する。「練習しても打てなかった。遠征でもホテルに着いたら一人でバットを振っていた。振ったら自信を持って打席には立てる。しかしそれでも打てない。考えすぎて打席でバットが振れなかった。自分で自分を追い込んでいた」。もっとも監督は一貫して試合に出してくれた。打の不調を凌駕するだけの守備力があったからだ。しかしAは「好きなことやってお金もらうのは幸せなのはあるけど、結果が出なかったらどんだけつらいか」と痛感することになる。

シーズン後、結局、戦力外通告を受ける。この時、独立リーグの他チームからオファーもあった。しかし「別のチームに行って5年目は考えられなかった」。不転の決意で臨んだシーズンで結果が出ず「戦力外通告をもらって納得した側面もあった」からだ——「最後の最後まで諦めずにやったし、もしかしたらミラクルが起こるかもと思ってやって、それでダメだったから、もういいかあ、と」。

引退決意後しばらくは「言葉にならない心境で、何も手につかない」状態に陥る。しかも「現役時は『将来はNPB』、それしか考えていなかったのも、NPBがダメだったあとのことは一切考えていなかった」。ただ教員免許は取得しており、今思えばガイナズでの「子ども野球教室で子どもが好きになったかなあ」と振り返る。また感情的サポートをしてくれる人もいた。こういった状況の中でAは教員を目指そうと決めることになる。

現在は中学校（講師）で野球部（軟式）を指導。生徒はメキメキ上達しており、対戦相手のコーチから「Aくんが入ったら強くなったなあと言われるとうれしく思う」。今後は高校野球の監督になって甲子園を目指したいと考えている。

以上の過程を移行モデル的に解釈してみよう。まず移行は「納得した」とか「もういいかあ」と思った時に認知されている。ただ移行自体はかなりストレスが高く、それはスポーツ依存や他の職業に向けての予期的社会化の欠如と相関的である。つまりこれらは負債のつながりである。とはいえAには可能的あるいは現実的な諸資源もあった。すなわち、教員免許、実際に教えるという経験、感情的サポート、あるいは彼の「がむしやんな性格」である。とするならば、こういった諸資源間の連携が次第に負債群を凌駕することで、選手から教員への役割移行が達成されたと説明されよう。付言すればコーチ能力に対する他者の評価は適応を強化している。

しかしこの説明は、選手生活の重要度が低くなり、教員の重要度が増した、と言っているだけである。つまり、「移行に対する適応」は、結局、個人の認知枠組みにおける重要性（関

心)の変化に還元されてしまうのである。これは移行モデルが前進過程(役割獲得)を強調するモデルだからであろう。

他方、人間学モデルはもともと後退過程を射程に収めており、特に脱・超社会化を導く「体験」による0地点への回帰を重視する。そこで、人間学モデルの注意はAの「挫折体験」へ向けられることになる。つまり、シーズン中の不調体験や、戦力外通告を受けて「納得する体験」などが徐々に超社会化の影響力を低下させ、脱・超社会化を導いていったと解釈されるのである。

ところで、Aの場合、脱・超社会化は引退後に貫徹することになる。その「体験」の典型例は、彼が生徒に「夢持って頑張ろうなあ」と言ったところ、「先生、夢叶ってないやん」と言い返された「体験」である。しかしNPBに行ったら夢が叶ったと言えるのか、二軍だったただ行っただけではないか。この文脈でAは言う——「結局、夢は無敵大だなあ、と」。この無限のイメージは0地点から以前の夢を見つめなおした時の感慨ではなかろうか。そしてこの「体験」を契機として、Aの意識は「ガイナーズで夢を追ってやっていた野球、それが今度は、子どもたちに夢を追い続けるプロセスを伝えたいというふうに変った」のである。

順路型の特徴は2つある。1つ目は全員挫折体験を経ている、あるいは自分は挫折したということを受け入れている点である。たとえばDは各地を転戦した末に某NPBチームに打たれた時「もうピッチャーとしては通用しない」と悟っているし、またEはNPBと社会人野球を目指し続けた末に「理想と現実が逆転したことが自分の中で『見えた』」と語る。もともと、超社会化の影響力がもともと弱い場合はそれほどの紆余曲折を辿らない。たとえば、Bは教員というもう1つの夢があったことで比較的スムーズに移行しているし、Fのように「もともとNPBにそこまで執着していなかった」という者もいる。しかしBは「ガイナーズで打ちのめされた」と認め、Fもガイナーズ退団後、NPBトライアウトに落選して「NPBの道はもうないな」と受け入れている。

2つ目の特徴は新しい役割(再・社会化)にやりがい(生きがい)を見出しているという点である(再・超社会化)。たとえばB(教員)は「野球部の指導はすごく楽しく充実しています。(生徒の上達について)空っぽの中に教えたことが詰まってゆく感じです」と語り、C(社長業)は「今の自分の生活と社員さんの生活を守ることは、最低限自分がやらないといけないことだと思っている」と言う。

## 2. 4. ショートカット型

ショートカット型に移ろう。それは脱・超社会化を迂回あるいはそれが不十分なまま再・超社会化（再・社会化）の軸へと向かう型であり、選手としての限界について「腑に落ちていない」型である。たとえばGにとってはNPBドラフトからのリジェクトの理由が「不明」のままであり、Hは監督の評価が「謎」のままである。2人を詳しく見てみよう。

Gはガイナーズで3年、アメリカのマイナーで1年プレーし、毎年NPB入りを囑望される選手であった。彼は各カテゴリーで「通用してきたし、実際通用していた」。それゆえたとえ「グダグダ」であれ続けたのである。ただ精神的な「しんどさ」は年々増し、特にアメリカ時代には生活環境の変化やタイトな試合日程のため限界に達したという。それでも「ドラフトまでは」と気持ちを立て直したものの、結局、名前は呼ばれずじまい。「ああもうやめようと、ふてくされた感じでした」。一気に引退へと流れるのはここである——「もっと若かったら、21歳とか22歳とかやったらまたアメリカで絶対やってるとは思うんです。ただそういう自分の弱いところもあるんですけど、まあ自分が逃げたという感じです」。

移行自体はリジェクトの理由が不明であり、「しんどさ」が目立つ。引退は年齢の問題が大きいと言うが、逆にそれを理由にして「逃げた」という意識もある。また他の職業に向けての予期的社会化は皆無である。もっとも球団からの紹介や知り合いのコネクションはあり、実際それで野球と全く関係のない職業に就き、調査時点では約半年が経過している。そして「普通に就職して仕事をするよりも、ガイナーズやアメリカでプレーする方が何十倍もしんどかったので、人生の糧にはなっている」と振り返る。

しかし、現在の生活への評価は極めて相反的である。すなわち、これまでできなかったことができる（ex. 食生活・遊び）反面、生活は「単純な日常という感じ」で、仕事も「まあつまらないですよ」、という具合なのである。教員免許を取得しているが指導者になる気は全くなく、野球もほとんどしない。要するに、新しい生活環境に適応しているが、生きがいは見出せないという事態である。

このギャップの原因は何だろうか。Gは「今は選手としてしか興味がないから、指導者の方へは気持ちが向かない」し、悔いも残っていると言う。移行モデルであればあるいはスポーツ依存の残存がその原因である、と考えるかもしれない。しかし人間学モデルは別の捉え方をする。まずこの事態は社会化次元と超社会化次元のズレを指示している。すなわち、Bは確かに状況に適応（再・社会化）しているし、実際野球もしていない（脱・社会化）。しかし未だ選手時代のフローを志向しており（超社会化）、それゆえ新しい生活や仕事に生き

がい(再・超社会化)を見出せないのである。そしてその原因は脱・超社会化を導く「体験」のないままに役割を移行しようとした点にある。結果も残し、身体も良い、つまりいつNPBに呼ばれてもおかしくない実力だと思っていたにもかかわらず「逃げた」。要するに、Gは「逃げる」ことで脱・超社会化を導く「体験」を先送りしたのである。

次にHに移ろう。Hは「自分は高校の監督を除いて、いつも監督には好かれなかった」と語る。「いつも」と言うように彼は多くのチームを転々としている。

引退年となるシーズンはAと同じように不退転の決意で臨んだシーズンだった。しかし開幕4戦目にはスタメン落ち。何より監督と考えが合わなかった。ただ「調子はずっと良かったし、出れば結果は出せると思っていた」。にもかかわらず、しっかりチャンスを与えられないままに戦力外通告を受けることになる。戦力外通告後は翌年も野球をしようと思い、某クラブチームに所属、トライアウトに備えた。しかし、周囲との対話や、選手としての限界を認識する中で、徐々に引退へと心が向かっていったという。引退表明は戦力外通告から1ヶ月半後であった。

Hは監督からチャンスを与えられないまま戦力外通告を受けたと考えているので、移行自体のストレス度は非常に高い。「抜け殻みたいな感じで毎日を過ごして(おり)、身体的には楽だが、気持ち的には後悔しかない」。こういった心理状態において自己否定的態度も顕著になる。たとえば監督の低評価は自分の実力不足やメンタル面での弱さのせいであり、「結局、監督がNPBに行けないと判断しているので、試合に出してもらえなかったのだろう」と考える。しかし他の役割に向けての予期的社会化はある。たとえば指導者の心得として、野球の基本動作の意味や「できて当然」という空気の大切さを後輩に伝えたいと考える。環境面では引退をめぐる「二転三転する」Hに対して粘り強く相談に乗ってくれる人たちがいたし、具体的な選択肢として家業や指導者のオファーもあった。引退表明へと至った一因はこの指導者の道に魅力を感じたからだ——「現役を続けながらとかじゃなくて、本当にその仕事に一生懸命になりたい、それだけ燃えるものであってほしい」。

選手から指導者へ、しかし事はそう簡単には運ばない。なぜならHは「野球をしたいという気持ちを抑えて抑えて、次の人生に行こうと決めた」と言いつつ、「誘いがあったらまだやりたい」と言うからである。移行モデル的に言えば選手と指導者とが重要性の点で拮抗している事態、あるいは資源と負債が拮抗している状態と言える。

この事態を人間学モデル的に見てみよう。まずHはGと異なり、脱・超社会化を導く「体験」がないわけではない。たとえば戦力外通告と引退表明との間、年下の選手と練習してい



で次のように感じたという——「なんか違うなあ、なんで俺こんなとこでやってんのかなあ、と。好きだからやるというのは分かるけど、もし自分が高校生やったら26歳の僕見て、確かに年を重ねてるから高校生よりは上手かもしれないけど、この人は何を目的に生きているんだろうとか考えると何かよく分からなくなってきた」。

これは脱・超社会化を導く「体験」であり、それゆえ引退表明への推進力となりえたようである。しかしHはチャンスを与えられた上で挫折していないこともあり、選手としての限界について腑に落ちていない。これが彼の混乱状態の主因である。にもかかわらず、彼は指導者の道に活路を見出そうとしているのだ。要するに、Hの場合、脱・超社会化を導く「体験」は十分な意識変容を導くほどの強度を持ち得なかったのであり、それゆえショートカット型にならざるを得なかった、と解釈されるのである（注⑤）。

## おわりに

本章では、アスリートの後退過程における病理現象として「キャリアトランジション問題」を取り上げた。つまり、アスリートはなぜ引退時に心身の混乱状態に陥るのかについて考察したのである。

われわれは、まず先行研究の検討を通して（特に移行モデル）、「生命感の喪失」という「体験」の次元の問題が（社会化の過程に影響を与える）諸要因の1つに還元されているという点を指摘した。そこで、この欠陥を克服するために、超社会化という視点を導入し、生命感の概念を明確にしたのである。「生命感の喪失」を捉えるためには新しいモデルが必要である。そこで、われわれは新しいモデル（人間学モデル）を構築し、その中で新しい知見——引退（後退）するためには超社会化の影響力を脱するための「体験」（脱・超社会化を導く「体験」）が必要であるという知見——を発見するにいたったのである。換言すれば、「キャリアトランジション問題」は、単なる社会的不適応（再・社会化の失敗）ではなく、いわゆる「ケリ」（脱・超社会化を導く「体験」による）の問題として（再）解釈されたのだ。そして、この解釈の正当性について、具体的事例（日本野球独立リーガーの場合）の分析を通して検証したのである。

一言で言えば、「キャリアトランジション問題」は「ケリ」の問題である。そしてこの「ケリ」は「体験」の次元に属している。というのは、「ケリ」へとつながる「体験」（脱・超社会化を導く「体験」）は、超社会化を導く「体験」の場合と同じように、いつ到来するか分

からず (=「偶然性」)、またそのアスリートが納得できなければ何の意味もないからである (=「個人の特異性」)。つまり、前進する場合でも、後退する場合でも、「体験」の次元は考慮されなければならないのである。

では、「キャリアトランジション問題」を解決するためにはどうすれば良いのだろうか。本章の知見をもとに答えれば、端的に「ケリ」の「体験」を待つことである、と言えよう。しかし、スポーツ選手の寿命は短く、またケガや実力不足のために否応なく現役引退を迫られることなど日常茶飯事である。つまり、競技スポーツは「ケリ」がつくのを待つはくれないのである。現実的に考えれば、「ケリ」がつくのを待つことは、アスリート自身にとっても、周囲のものにとっても、難しいことであろう。その意味で、各団体の行っているキャリア教育は意味のあるものと言わねばならない。しかし、より積極的な方法がないわけではない。それは、いわば「ケリ」をつけさせるコーチングといったものである。俗に「引導を渡す」という言葉があるように、優れた指導者は独特の方法によって、選手を引退させてゆくのではないだろうか。本稿では、こうした「引導を渡すコーチング」について論じることができないが、非常に大きな課題であることは間違いないであろう。

以上、スポーツにおける病理現象として、バーンアウトと「キャリアトランジション問題」を取り上げ、なぜこうした病理現象が起きるのかについて考察してきた。その答えを定式化すれば次のようになるだろう——バーンアウトの主因は（超社会化を導く）「体験」の更新の欠如であり、「キャリアトランジション問題」の主因は（脱・超社会化を導く）「体験」の欠如である、と。両者は「体験」の欠如という点で共通している。そして、競技スポーツは、「体験」の到来を待つはくれないという意味で、構造的にこうした病理現象を生みやすくなっているのである。しかし、競技スポーツの構造を批判するだけでは問題は解決しない。

「体験」の欠如が問題なのであれば、そして競技スポーツの構造を変えることが難しいとすれば、「体験」の次元を重視するコーチング方法を考えれば良いのではないだろうか。

ここまでの議論によれば「体験」は2つある。1つは超社会化を導く「体験」であり、もう1つは脱・超社会化を導く「体験」である。前者はいわばポジティブな「体験」であり、後者はいわばネガティブな「体験」である。筆者は、これまで、「体験」のポジティブな面を強調してきたので、ネガティブな面の指摘によって、ある種の混乱を与えるかもしれない。しかし、ここまでの論述で重要なのは「体験」の次元の重要性を示すことであり、この点に関してはある程度明確になったのではないかとと思われる。ところで、「体験」にポジティブな面とネガティブな面があるとすれば、どちらを強調するかで、コーチングも2つあると

ということになる。つまり、超社会化を導く「体験」を誘発するコーチング（以下、超社会化のコーチングと呼ぶ）と脱・超社会化を導く「体験」を誘発するコーチング（以下、脱・超社会化のコーチングと呼ぶ）である。先に述べたように、脱・超社会化のコーチングは「引導を渡すコーチング」としてイメージできる。しかし、このコーチングについては未知な部分が多く、本稿で取り扱うのは困難である。そこで、以下、われわれは、超社会化のコーチングに限定し、社会化のコーチングと関連づけながら、特に身体論の視点から論じてゆくことにしよう。

### <第3章 注釈>

---

- ① 日本ではJリーグ、JOC、NPBなどが特に一流以外の選手に対してキャリア教育を行っている。海外の取り組みに関しては（Levin2005）。
- ② 以下、生命感、生きがい、フローという類似の用語を次の基準で用いる。生命感＝一般的な文脈、生きがい＝意味づけを強調する文脈、フロー＝行為を強調する文脈。
- ③ 亀山（2010）は「接点」と引退の困難性との関連を明示していない。また脱・超社会化と再・超社会化という用語も使用していない。この他にも表現等若干の異同はあるが、しかし筆者の概念化は彼の議論に基づいており、根本的な発想は同じである。
- ④ 日本野球独立リーグはアマとプロの中間に位置するいわばNPB選手養成所である。それは社会人野球の縮小に象徴される日本野球界の衰退傾向に対して、地域密着、若手選手の育成、指導者の育成でもって、野球界と地域社会を同時に活性化しようとするプロジェクトである（石毛2009）。
- ⑤ 筆者がHにインタビューしたのは引退表明の数日後であった。彼はその後、指導者の道がプロアマ協定によって閉ざされ、「コーチ補佐兼任選手」という形で現役に復帰し、現在もプレーしている。

## 第4章 方法としての「潜入」

### はじめに

本章では、「身体の特異性」——特に身体感覚——を重視するコーチングについて考察してゆこう。第1章で述べたように、近代的身体観は「身体の同一性」を想定し、身体は「たとえ違っていても同じだ」と考えるのであった。しかし、事実上、身体は一人ひとり異なっており、身体動作や身体感覚にしても、全く同じであるということはありません。つまり、身体は「たとえ同じように見えても違う」のであり、この固有性の側面こそ「身体の特異性」なのである。自分の身体感覚に忠実であることによって、そして身体感覚を重視するコーチングによって、主体は外的なものに惑わされにくくなるはずである。

一般に、コーチング——ここでは特に技術指導を念頭に置いている——は大きく2つに分けることができる。1つは社会化のコーチングで、アスリートの身体に対する(外的)「強制」をその本質とするものである。具体的に言えば、ここでの指導は(先在する)ある型に選手の身体を合わせようとする指導であり、指導者のスタンスとしては「教える」(teaching)となるだろう。もう1つは超社会化のコーチングで、アスリートの身体に合った(内的)「育成」をその本質とするものである。具体的に言えば、ここでの指導は(潜在する)アスリートの能力を引き出そうとする指導であり、指導者のスタンスとしては「導く」(coaching)となるだろう(注①)。両者はもちろん理念型であるから、実際の指導では両者は入り混じっている。しかし、本章では超社会化のコーチング——厳密に言えば「社会化のコーチング<超社会化のコーチング」——を重点的に考察することになる。

まず先行研究としてガルウェイのコーチング論(以下ガルウェイ理論と呼ぶ)を整理し、社会化のコーチングと超社会化のコーチングを区別しよう。その上で、身体感覚を重視するコーチングとして、結城匡啓のコーチング方法を取り上げ、その究極である「潜り込み」という方法を検討しよう。「潜り込み」とは、コーチが選手の動きとシンクロすることで、選手の身体感覚を直接的に把握し、両者の感覚をすり合わせてゆくという独特の方法である。しかし彼の議論は記述的であり、ともすれば彼にしかできない方法——ある意味でそうなのだが——と解されるかもしれない。そこで、われわれは、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」という方法を解釈し、1つの理論として一般化して

おくことにしよう。

## 第1節 ガルウェイのコーチング論

### 1. 1. 基本概念

ガルウェイ理論を検討することから始めよう（注②）。ガルウェイ理論の基本概念は「セルフ1」と「セルフ2」である。「セルフ1」とは「自分自身に話しかけ、叱責し、支配している声の主」（＝自分）であり、「セルフ2」とは「セルフ1」の「命令によってボールを打つ存在」（＝自身）である。つまり、「セルフ1」は命令のシステム、「セルフ2」は実行のシステムであって、両者は1人の人間の中に共存している（Gallway1997=2000: 18, 46-48）。

「セルフ1」と「セルフ2」は、ガルウェイ自身の経験に基づく独特の概念なので、伝統的な枠組に安易に当てはめることはできない。たとえば、心身二元論を安易に適用して、「セルフ1」＝精神、「セルフ2」＝身体というふうに捉えることはできない。そこで、もう少し詳細に規定しておこう。今、論文を読んでいる、としよう。これは非常に単純な行為のように思える。しかし、「読む」という行為は、実は、諸要素の驚異的な共同作業（シンクロ）を前提とする。「目はことさらに努力するわけではないのに自然に活字を追いかけて、過去の記憶のデータバンクを一瞬に検索しては、視覚から入ってくる活字と照合し、その文字列から『意味』を絞り込んでいる。この複雑な作業を、まばたきする間に、完璧なタイミングでやってのけている」。身体の生理学的側面だけを見ても、論文を手に取り、ページをめくり、目を使用しつづけるという行為は、「数え切れないほど複雑な筋肉運動」の無意識的作動を前提とするのだ（Gallway 1997=2000: 93-94）。

われわれはページをめくるとき、右手を左に20センチ移動させて、右上方45度に上げて……というふうに思考しないし、またそうするよう命ずることもない。われわれが集中していればいるほど、「読む」という行為は自然に進行してゆく。こうした行為の主体の名前が「セルフ2」なのである。そして「セルフ1」とは「セルフ2」による自然な連続的行為を切断し、その外から「セルフ2」に命令を下そうとする主体の名前である。

スポーツにおいては、当たり前だが、さらに複雑な作業を必要とする。たとえばテニスのリターンを考えてみよう。「レシーバーは相手のラケットからボールが打ち放たれた瞬間に、それがどこに着地し、ラケットで迎え撃つべきかを、計算し終えねばならない。この計算のためには、ボールの初速度、徐々に落ちてくる途中の速度、風やスピンの影響、複雑な軌道

などを、要素として加味する必要がある」。バウンド直後にもこうした諸要素は再計算され、その上で動作のスイッチは入る。そして「ボールを打つ瞬間には、クロスを狙うのか、ダウン・ザ・ラインなのか、微妙で正確な調整が必要となるが、これは相手の動きやバランスを読み取ってからの、最後の最後の指令となる」。「セルフ 2」はこうした膨大な作業を自然に行っている。もし「セルフ 1」の指令に従っていたならば、すなわち一つひとつの行程について思考し、判断を下し、その上で行動するという作業を行うとすれば、自然な一連の流れは破壊されてしまうだろう。「1 本のリターンは驚くべき偉業」なのだ (Gallway 1997=2000: 94-95)。

## 1. 2. 集中力の科学

「セルフ 2」は「素晴らしい賢さと、潜在能力の集積体」である。「セルフ 2」を「内側の知性」と呼ぶとすれば (Gallway 1997=2000: 96)、「セルフ 1」は外側の知性である。ガルウェイによれば、「セルフ 2」に全てを委任することこそ上達の秘訣であり、それゆえ選手の「セルフ 2」を活性化することがコーチングの肝となる。しかし、「セルフ 2」はアスリート自身の「体験」を通して初めて実行力を持つようになる。つまり、アスリートは——たとえ正解とされる定型の技術が存在するとしても——、自分の身体に合った動作を自分で発見しなければならないのだ。それゆえ、コーチングの目標は、「セルフ 2」を妨害する「セルフ 1」の影響力を鎮めることに絞られてくる。

「セルフ 1」の特徴の 1 つは価値判断をすることである。すなわち、1 つひとつのプレーに対して、「今のショットはダメだ。もう少しラケットを低く構えなければならない」といった評価を下すのだ。そこで、ガルウェイは選手に対して 3 つのこと——「見る」、「感じ取る」、「イメージする」——を求める。「見る」というのは、たとえばガラスに映る自分のスイングを自分の目で「見る」ということ、客観的に観察することである。選手の多くは自分の欠点を知っていながら、自分のプレーを実際に「見た」ことがないのである。また「感じ取る」というのは、たとえばラケットの位置がどこにあるのかを感覚的に把握するということである。選手に「感じ取る」ことを根気よく求めると、ショットの出来ではなく、感覚に対する意識のレベルが上昇し、自分に合ったショットが自然に展開し始めるという。そして「イメージする」というのは、たとえば相手のコートに深くに入るボールの弾道を具体的に思い浮かべ、言葉ではなく画像として心の中に保持することである。このイメージのままに何も考えずに打てば、これまた自然に、そのショットに必要なスイングや足の運びが

出現してくる、というのだ。つまり、この3つの要素を往来することによって、「セルフ1」は鎮まり、「セルフ2」の自然習得能力は高まってゆくのである（Gallway1997=2000：71-81、108-111、176-177）。

ガルウェイはこの3つの要素を並列的に記述している。しかし、分析的に言えば、「見る」「イメージする」項目と「感じ取る」項目は異なる視点に立っている。ショットを考えてみよう。それは、1つの全体として捉えることもできるし、諸部分の複合体としても捉えることができる。こうした部分と全体という視点を導入すると、「見る」「イメージする」項目はいわば全体を一挙に把握することで諸部分のスムーズさを生みだそうとしているのに対し（全体→部分）、「感じ取る」項目はいわば部分に注意を集中することで全体のスムーズさを生みだそうとしている（部分→全体）、と考えることができよう。

ガルウェイ理論は何より「集中力の科学」である。それゆえ、どちらかと言えば、後者の方法（部分→全体）を強調する。たとえば、彼はボールの縫い目を見ることを求める。あえて見えにくいものを見ようとすることで、心は縫い目のパターンに気を取られて「力む」ことを忘れてゆく。また注意は「今・ここ」（Now and Here）に限定されるので、過去や未来のことに心を奪われることもなくなる。そして、こうした集中力の高まりによって、注意は他の要素にも拡張されてゆく。ボールの縫い目に注目しようとするれば、スピンや軌道に対する感覚が高まるし、相手の（あるいは自分の）ラケットに当たる前からボールを捉えようとするだろう。つまり、ボールの縫い目という部分に注目することで、自然な1つのショットが可能となるのだ。あるいは、より長く集中力を維持する方法として「バウンス・ヒット」という練習法もある。それは「ボールがコートにバウンドする瞬間に“バウンス”と大声で言い、ラケットに——両方のラケットだ——当たる瞬間に“ヒット”と大声で言う」というものである。バウンドする瞬間とラケットに当たる瞬間に注意を集中することで、必然的に他の諸要素にも注意が及び、一連の動作は流れるように進行することになる。このように、どの要素に注意を集中するかは任意であり、要は何かに注意を集中することこそ肝要なのである（Gallway 1997=2000：187-192）。

### 1. 3. コーチングの2類型

ガルウェイ理論は、「セルフ1」を鎮めることで「セルフ2」を活性化させるという点で一貫している。では、コーチングの現場において、コーチの存在とは一体何なのだろうか。この点について、ガルウェイは多くを語らない。選手の「セルフ1」を抑制するよう根気強く

選手に寄り添い、見守り、エンパワーメントするといった程度である。ガルウェイは選手の潜在能力を信じており、それゆえコーチの役割はできるだけ小さくあるべきだと考えているのだろう。筆者もこのスタンスに同意する。しかし、コーチングにおいて、——ガルウェイも賛同してくれるだろうが——コーチはただ選手を外側から観察しているだけではないだろう。コーチは、選手の心身の状態を的確に把握することで、適切なタイミングを見極め、適切なアドバイスを与えることができるのである。ガルウェイにとって、あるいは多くのコーチにとって、選手の心身の状態を的確に把握することはいわばコーチングの前提であろう。しかし、この把握の程度こそコーチングの成否を分けるのではないだろうか。この点は当然のこととして片づけてしまうわけにはゆかない。コーチはいかにして選手の心身の状態を把握しているのか、この点こそ問われるべきではないだろうか。

しかし、ここでは、ガルウェイの「セルフ 1」と「セルフ 2」の類型を（選手ではなく）コーチに適用し、コーチングの 2 類型を示すにとどめよう。「セルフ 1」としてのコーチは「強制」を基調とするコーチで、典型は徹底管理型のコーチである。彼は選手の動作を判定し、修正点を次々と命令する。あるいは「教えすぎ」（ティーチングエラー）のコーチもここに含めることができよう。それは、たとえ励ましの言葉であっても、その本質が「強制」であるかのようなコーチである。「セルフ 1」としてのコーチと相性の良いのは「セルフ 1」としての選手である。選手はコーチの命令を従順に受け入れるだろうし、両者は協力して「セルフ 2」としての選手をバカにすることだろう。「セルフ 2」としての選手がうまくプレーできないのは、「セルフ 1」としてのコーチと選手が口をはさむからなのに、である。

他方、「セルフ 2」としてのコーチは「育成」を基調とするコーチである。このコーチの在り方としては、ガルウェイふうのいわば「見守るコーチング」を思い浮かべることができよう。彼は選手に感覚を鋭敏にすることを求め、選手の潜在能力を引き出し、その選手に合った身体動作を自然に展開させようとするのである。「見守るコーチング」は、「セルフ 2」としての選手の把握を前提とする。では、「セルフ 2」としてのコーチは、「セルフ 2」としての選手をどのようにして把握しているのだろうか。この時のコーチングについて、筆者は「ともに生きるコーチング」をイメージしている。すなわち、「セルフ 2」としてのコーチは「セルフ 2」としての選手の中に入り込んで、選手の身体感覚を直接的に把握するのである。そして、「セルフ 2」としてのコーチと選手は協力して、「セルフ 1」としての選手の影響力を弱めようとするはずだ。



## 第2節 結城匡啓のコーチング論

### 2. 1. 感覚のイメージ化

ガルウェイ理論によれば、超社会化のコーチングとして「見守るコーチング」と「ともに生きるコーチング」が想定される。そこで、次に、結城匡啓のコーチング論（以下結城理論と呼ぶ）を取り上げよう（注③）。結城理論にはその両方が含まれている、と考えられるからである。

結城理論では、選手のパフォーマンスにおける、物理的事実（＝客観的事実）と感覚的事実（＝主観的事実）が峻別されている。物理的事実とは、数値化されるデータのことであり、客観的な指標であるという意味で中立的である。それゆえ、パフォーマンスの理想値と現在値との偏差を把握し、その偏差を埋めるために使用することもできるし（＝社会化の指標）、自分の身体感覚を感じ取るためのヒントとして使用することもできる（＝超社会化の指標）。結城はバイオメカニクスの専門家でもあるので、前者もかなりの程度重視する。しかし、第1義的に重視するのは一貫して後者である。形式知としての理想形を置くとしても、その理想形における「運動の質というか、力のリズム感やアクセントの感じ」の把握が最重要課題となる（結城 1999 : 39-40、結城 2011 : 327-329）。

結城理論では、物理的事実でさえ、身体感覚を把握するための方法の1つとされる。そこで、次に、より感覚的事実を重視するコーチング方法——「技術カルテ」——を紹介しておこう。「技術カルテ」とは選手が自分の感覚的事実を言語化したノートのことであり、結城理論では選手に（練習後、毎回）「技術カルテ」をつけることを求めるのである。もっとも、言語化すると言っても、感覚は論弁的に表現することができないので、比喩的に表現される。たとえば、結城自身はスケート（の刃）を氷に接着させる感覚について「ほうきで掃く」と表現する。『ほうきで掃く』というのは、ある時間をかけて地面に接するというような意味合いが私の中にもあります。スケートが接して、体重がゼロから一〇〇になるまでに少し時間を要しながらスーッと。＜中略＞そう感じた後は、ほうきで掃いてつなげていただけなのです。つなげていだけで、もうずっと氷から力をもらい続けるような感じです」（結城 2011 : 320）。

「技術カルテ」をつけるのは感覚の再現性を高めるためである。選手は、一般に、一度でできるようになった動作について、そのときの身体感覚を意識せずに滑れるようになるまで反復練習する。しかし、こうした身体動作の自動化は（その動作が）「狂ったときに自分が

どうやっていたのか分からない」といった事態を招く。「技術カルテ」が役立つのはこうしたときである。すなわち、「ほうきで掃く」というような「わざ言語」を発明しておけば、選手にとっては感覚の再現が容易になるし、コーチにとっても選手の修正点を把握しやすくなる、というわけである。「言語能力というのはたぶん、言葉の意味を知っているかということではなく、身体の知識としての自分の感覚を、自分の中で再現性のあるものとして書けるかどうかと私は解釈しています」（結城 2011 : 313、320-321）。

## 2-2. 「潜り込み」という方法

さて、物理的事実を身体感覚の把握のヒントとして利用したり、「技術カルテ」をつけることを求めたりするのは、われわれの類型では「見守るコーチング」に入るコーチング方法と言えよう。というのは、そこでのコーチの役割は相対的に小さく、どちらかと言えば（選手が自分の）身体感覚を的確に把握できるようになることに比重が置かれているからである。

そこで、次に、「ともに生きるコーチング」に入る（と思われる）方法を見てみよう。結城によれば、コーチングの現場では3つの自己観察が交錯する。1つ目は選手が自分の身体感覚を感じ取る「選手の自己観察」、2つ目はコーチが自分の身体感覚を感じ取る「コーチの自己観察」、3つ目は選手の身体感覚をイメージする「(コーチによる) 想像の自己観察」である（結城 2011 : 332）。

一番分かりにくいであろう「想像の自己観察」とは、コーチが「コーチの自己観察」と「選手の自己観察」をイメージにおいてすり合わせることである。しかしこのすり合わせそのものは——結城はこうした表現を用いないが——一種の実存的行為において可能となる。その行為こそ「潜り込み」という方法にほかならない。結城によれば「潜り込み」とは「私と選手の間敷居を取り去り、自分でない選手を自分が動かそうとしながら見る」（結城 2011 : 321）ことである。この規定はかなり難解なので説明を要する。まず「私と選手の間敷居を取り去り」とあるが、これはどういうことなのであろうか。当たり前のことだが、コーチの身体と選手の身体は物理的に別々の場所に存在している。そしてまた両者の身体感覚もそれぞれ固有のものである。しかし、両者の間敷居は取り去ることができる、というのだ。つまり、コーチと選手という特異な存在者同士が（イメージを通して）相互浸透するのである。それゆえ、「一緒に滑っている感じがあります」（結城 2011 : 322）と言われるのだ。こうした相互浸透を認めるとすれば、「自分でない選手を自分が動かそうとしながら見る」と

いう記述も了解できる。「一緒に滑っている」のだから、コーチは選手の動きのぎこちない部分を感じ取ることができるだろうし、(イメージの中で)「動かそうとする」こともできるだろう。

コーチは「潜り込み」という方法によって、選手の身体感覚を(イメージを通して)把握し、そこで感じ取った違和感を修正内容として選手に伝えることができる。また、「潜り込み」を通して感じ取った感覚は、コーチにおける「セルフ2」の中に保存されることになるだろう。とするならば、選手がスランプに陥ったとき、コーチは(その選手の)良い時の身体感覚を(自分の)「セルフ2」から引き出し、スランプ中の選手の身体感覚とすり合わせることもできる、ということになる(結城2011:321-322)。そこで、このようなコーチング方法を、われわれは「調律としてのコーチング」と名づけておこう。

結城理論における「潜り込み」という方法は「ともに生きるコーチング」(=「一緒に滑る」)の典型である。そして、この「ともに生きるコーチング」によって、「調律師としてのコーチング」は可能になるのだ。しかも、「ともに生きるコーチング」は「見守るコーチング」の前提でもある。選手の心身の状態を的確に把握せずして、どうして適切なタイミングで、適切なアドバイスなどできるだろうか。たとえば、結城は「潜り込み」能力が高く、しばしば選手よりも先に修正点を把握することができる。しかし彼は選手に自分の把握した感覚を押し付けることはしない。選手の「気づき」が一番大きくなるタイミングを見計らって、適切なアドバイスを行うのだ。なぜなら、スポーツ選手は概して自分で納得する、すなわち「気づき」がないと上達しないし、コーチを信用しようもしないからである。「こちらで完全に見抜き、選手が完全に気づいていない場合でも気づかせるという伝え方をしないと、実際のパフォーマンスにつながらないことが多いです。命令的な言い方をしようものなら、こちらをまず認めようとはしないでしょ」(結城2005:58)。

## 第3節 「潜り込み」に関する理論的考察

### 3.1. ポランニーの暗黙知理論

「潜り込み」という方法はあらゆるコーチングの基礎と言える。しかし彼の議論は記述的であり、ともすれば彼にしかできない方法——ある意味でそうなのだが——と解されるかもしれない。そこで、われわれは、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」という方法を解釈し、1つの理論として一般化しておくことにしよう。

「潜り込み」の概念は、ポランニーの「潜入」（棲み込み、dwell in=indwelling）という概念を想起させる。「潜入」は彼の暗黙知理論に含まれるから、まず暗黙知の基本構造を確認しよう。

暗黙知とは言葉で語ることでできない知のことである。たとえばわれわれは自転車に乗ることができるが、どのようにしてバランスをとっているかを言葉で説明することはできない。バランスをとるためには種々の筋肉が協働しているはずであるが、われわれはこうした協働を意識することもない。つまり、「乗ることができる」という端的な事実の裏では、暗黙知が作動しているのである。

有名な探り杖の例を取り上げよう。探り杖を使おうとする時、われわれは、杖の質感を手のひらに感じる。しかし杖を使うことに慣れると、感覚は手のひらから杖の先へと移動する（A→B）。ここでは、客観的には杖の先と壁が当たっているのだが、主観的には手で壁を触っているように感じられる。この事象を注意の観点で言えば、われわれ

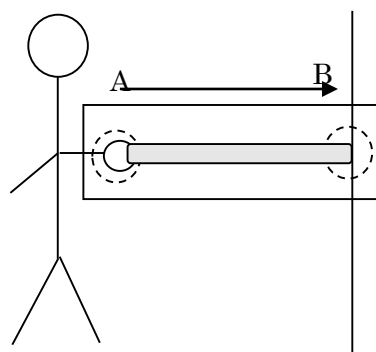


図1 探り棒

は手のひらに注意を向けておらず、その感覚は従属的に意識されるだけである。対して、注意は杖の先に向けられており、杖の先と壁との接触到意識は焦点化する。そこで、ポランニーは前者を従属的意識（近接項、A）、後者を焦点的意識（遠隔項、B）と名付けるのだ。もちろん両者は実践の中で「溶け合っている」が、注意の在り方が異なるわけである（Polanyi 1962=1985 : 52、1966=1980 : 24）。

この事象について、ポランニーは4つの側面から捉える。1つ目は現象的側面で、従属的意識が焦点的意識の中に現れる（含まれる）という側面である。これは、手のひらの感覚が杖の先まで延長されるということの言い換えである。2つ目は機能的側面で、従属的意識が焦点的意識を助けるような仕方で機能するという側面である。これは、手のひらの感覚が杖の先に移動しても、手のひらの感覚は暗黙的に作動しているという側面である。3つ目は意味論的側面で、焦点的意識は従属的意識の意味であるという側面である。これは、手のひらの感覚は壁に杖が当たる作用によって意味づけられるという側面である。4つ目は存在論的側面で、従属的意識と焦点的意識とが1つの関係として存立するという側面である。換言すれば、両者の関係の存立はある包括的全体(comprehensive entity)の生成でもある（Polanyi

1966=1980 : 22-28) (注④)。

では、「潜入」はどこに位置づくのか。ポランニーは言う。「ある事物を暗黙知の近接項〔筆者注：従属的意識〕として機能させるときには、われわれはそれを身体の内部に統合し、あるいはそれを包含しうるように身体を拡大し、結局我々は、その事物の中に潜入する (dwell in) ようになる、ということができる」(Polanyi 1966=1980 : 33) (注⑤)。杖の例で言えば、手のひらと杖の接触する感覚が従属的意識となったとき、杖は身体の一部となり、身体は杖の一部となるということである。つまり手と杖は 1 つになるのである。換言すれば、「潜入」とは従属的意識において身体と対象が相互浸透することなのだ。

さて、ポランニーの暗黙知の理論は基本的に意識（あるいは注意）の理論である。それゆえ、どちらかと言えば、ガルウェイの方法と親和性がある。「潜り込み」の考察に入る前にガルウェイの方法を理論的に裏づけておこう。

ガルウェイの方法の特徴は何かに注意を集中してみるという点にあった。ポランニーによれば、何かに注意を集中すれば（＝焦点的意識）、その他の意識は暗黙知化する（＝従属的意識における「潜入」）。たとえばボールの縫い目に注意を集中すると、手のひらとラケットの接触する感覚は暗黙知化するし、ステップを行う足の運びや足の裏と地面の接触する感覚も暗黙知化する。暗黙知化するとは身体と対象が相互浸透するということであり、それゆえ、ガルウェイの求める自然で流れる動作が可能となるのである。つまり、ガルウェイの方法は従属的意識と焦点的意識の関係を巧みに組み合わせたものとして解釈できるのである。

続いて「潜り込み」の分析に移ろう。「潜り込み」には選手の身体だけでなく、コーチの身体が加わる。ポランニーの理論は意識の理論であるため、他者を扱いづらいという難点がある。しかし、私見によれば、彼の理論の適用範囲を広げるだけで、他者論にも応用可能である。杖の例をコーチと選手に置き換えて考えてみよう。コーチは選手の滑っている様子を見ているとする。視覚は感覚の 1 つであるから、いわば目で選手の身体を触っていると言える。これは手のひらと杖が接触する感覚に気を取られている状態である。しかし、棒の先であちら側に何かあるかを探索していると、注意は杖の先へと移動し、手のひらと杖が接触する感覚は暗黙知化＝相互浸透するのであった。そこで、コーチは選手の身体を見ているうちに、その注意は選手の滑る先へと移動すると考えてみよう。すなわち、コーチの注意は選手の滑りによって切り裂かれるべき空間に焦点化してゆくのである。この注意の移行＝焦点化によって、コーチの目とその目で触られていた選手の身体は暗黙知化＝相互浸透するこ

とになる。一般化すれば、ここにおいてコーチの身体と選手の身体は相互浸透するのである。表現が煩わしいので、この相互浸透している身体を「潜入身体」と名づけよう。コーチは選手と一緒に滑っていると感じる。これは「潜入身体」が暗黙的に作動しているからであり（＝機能的側面）、また「潜入身体」の感覚が切り裂かれるべき前方の空間へと延長されるからである（＝現象的側面）。ところで「潜入身体」の延長とは、逆から見れば、その延長されるべき場所から引き寄せられることでもある（＝意味論的側面）。要するに、そこでは、「潜入身体」という1つの全体が生成しているのである（＝存在論的側面）。

### 3. 2. ベルクソンの直観論

ポランニーの「潜入」概念は注意の在り方（＝従属的意識／焦点的意識）という独特の観点から導き出されている。それに対して、ベルクソンは持続という独特の観点から「直観」の概念を導き出している。以下、主に前田英樹の解釈を本章の文脈に沿うよう改変して記述してみよう。

ベルクソンによれば、生き物の身体は生命的傾向と物質的傾向という2つの傾向を受けている。「人間同士が一定の拡がりのなかで互いに明確に区分されるのは、身体が物質的であることによる」（前田 2013 : 107）。他方、生命的傾向の本質は持続するという点にある。持続とは川の流れのように分節できない流れであり、たとえ目に見えないとしても、その生命のエネルギーは身体に浸透している。たとえば、先に述べたように、運動は持続の1例である。今、手を右から左へと動かしてみよう。その運動は分割不可能であり、空気を切り裂いてゆく質感を感じるだろう。しかし、運動は身体という目に見える物質の運動であり、それゆえに分節して捉えられやすい。たとえば、空気を切り裂く質感を感じるだけなのに、ある地点（右）から別の地点（左）へ移動した、と思考してしまうのである。換言すれば、運動という分割不可能な実在（とその質感）を、空間上の位置の移動へと還元してしまうのだ。

ベルクソンによれば、「直観」とは「持続のなかに身を置き直し、実在をその本質である運動性のなかで捉え直すことである」（前田 2013 : 94）。「身を置き直し」「捉え直す」という言葉に注意しよう。ベルクソンは、われわれはもともと持続する存在であるはずなのに、持続から離れてしまっている、と考えているのだ。実際、右から左へという思考すら（不変の）空間という観念を前提としている。しかし真実を言えば、われわれは生きている限り常に変化しており、それゆえ全く同じ運動など実在しないのである。たとえば、スピードスケートにおける「氷のコンディション」を想起しよう。われわれは「氷は氷である」として氷

を同一性の相において捉えがちである。しかし、一流選手は、氷のコンディションの微妙な変化を直観的に把握し、身体の動きを調整するであろう。他者との関係においても事情は変わらない。他者はもちろん生きており、そうである限り、常に変化しているからだ。要は、相互浸透における深さの程度の問題なのだ。氷にしても、他者にしても、自己と対象の相互浸透の程度が深くなればなるほど、両者は明確に分離された実体ではなくなり、「いつも揺れ動く質の差異のようなものとして生み出され続ける」（前田 2013 : 103）のである。つまり、ベルクソンにとって、自己と対象はそもそも相互浸透しているのであり、自己と対象の分離は抽象を経てはじめて成立するのである。その意味で、「直観」とは「もともと観えているものを、もっとはっきり観ようとする」（前田 2013 : 97）ことなのだ。

ベルクソンの「直観」の概念、またポランニーの「潜入」の概念、そして結城の「潜り込み」の概念はほとんど同じことを指示している、と考えていだろう。しかし、その理論設定において、若干の異同は存在する。「潜入」と「潜り込み」は、その表現からして、「主体—客体」という枠を前提としている。つまり、「潜入する」（＝「潜り込む」）と言うとき、暗黙的に「主体が客体の中に」という言明を含んでしまうのだ。換言すれば、「潜入」概念は、（われわれの常識である）相互に分離した主客関係というイメージをどうしても喚起してくるのである。他方、ベルクソンは「直観」を「持続のなかに身を置き直すこと」と規定したのであった。つまり、そこでは、「主体—客体」という枠ではなく、「持続する世界—持続しない世界」という枠——作田の用語では「生成の世界—定着の世界」（作田 1992、1993 : 30—33）——が採用されている。先に述べたように、ベルクソンにとって、「主体—客体」の区別は、抽象によってはじめて成立する。つまり、両者はともに「持続しない世界」に属するのであり、それゆえ、問題は「持続しない世界」から「持続する世界」へと直観によって移行することなのである。

先に述べたように、「潜り込み」とは「私と選手の間で敷居を取り去り、自分でない選手を自分が動かそうとしながら見る」（結城 2011 : 321）という方法であった。「私と選手の間で敷居を取り去る」とは、ベルクソンの言え、もともと相互浸透している「持続の世界」へと参入することなのだ（注⑥）。では、いかにしてコーチは「身を置き直す」ことができるのだろうか。この問いに対して、ベルクソンであれば、おそらく「運動を通して」と答えるだろう。つまり、コーチは、選手の動きを通して「潜り込ん」でゆくのである。あるいはまたベルクソンであれば「身体感覚を通して」と答えるかもしれない。というのは、身体感覚は言葉で表現できないほど微妙なニュアンスや変化に満ちており、その意味で持続の 1

例である、と考えられるからだ。つまり、運動や感覚は、いわば持続への入り口なのである。

次に、「自分でない選手を自分が動かそうとしながら見る」という言明はどのように解釈できるだろうか。ここでのポイントは「動かそうとしながら」という箇所であろう。そこには、明らかに、コーチの意志が含まれている。しかし、ベルクソンの言え、持続の水準では主体性は失効し、そこには「揺れ動く差異」があるだけだ。この点をどう考えればよいのだろうか。答えは1つしかない。それは、「揺れ動く差異」の中に身を置きつつ、主体性を保持する、という在り方である。われわれとしては、こうした主体性こそ、コーチに固有の主体性である、と考えておきたい。

最後に、「直観」の正確さについて指摘しておこう。「直観」は「実在するものの波動に従っていく…<中略>…（それゆえ）事物の各々に、まさにひたすら、ただそれだけに当てはまるような説明を与えようとする。その哲学は、世界の体系的統一を定義したり、叙述したりすることから始めはしない。…<中略>…そこに現れるのは、豊かで充実した統一、連続性から来る統一」（前田 2013 : 99）である。コーチは、（先行する）ある型から出発してはいけない。まず選手の身体の動きの中に身を置き、その相互浸透の度を深くしてゆくべきである。そして、そこで見出されるのは、選手の、まさにその選手だけに当てはまる動きや身体感覚、つまり選手の「身体の特異性」なのだ。コーチの「直観能力」あるいは「潜入能力」によって、選手との相互浸透の度は決まってくる。そして、その度が深くなればなるほど、「一緒に滑っている」というより「一緒に生きている」という方が正確な表現になるだろう。それゆえ、「ともに生きるコーチング」はコーチングの原型である、と言わねばならない。

## おわりに

本章では、「身体の特異性」——特に身体感覚——を重視するコーチングについて考察してきた。まずガルウェイ理論の検討を通して、社会化のコーチングと超社会化のコーチングを区別し、さらに超社会化のコーチングを「見守るコーチング」と「ともに生きるコーチング」に分けたのであった。そして、その上で、（両者を含んでいる）結城理論を取り上げ、「ともに生きるコーチング」の1つとして「潜り込み」という方法を位置づけるとともに、「調律としてのコーチング」の基礎と考えたのである。しかし、結城理論は記述的であり、「ともに生きるコーチング」をあらゆるコーチングの基礎に置くためには1つの理論とし



て一般化する必要があった。そこで、われわれは、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」という方法を理論的に解釈しようとしたのである。

選手に「体験」を到来させるためには、適切なタイミングで、適切なアドバイスを与える必要がある。そして、そのためには、刻一刻と変化する選手の心身状態を的確に把握しなければならない。しかし、コーチと選手は別々の人間であり、両者の身体感覚も異なっている。この事実を前にして、いかにして選手の「身体の特異性」を把握するのか、この点が問題だったのである。本章では、この疑問に対して、一応の回答は出せたように思われる。特に、ベルクソンの直観論を踏まえれば、そもそもコーチと選手は相互浸透しているのであり、この相互浸透の度を深くすることこそ、コーチングの核心である、と考えることができよう。相互浸透の度が深くなればなるほど、選手の「身体の特異性」は際立ってくる。つまり、コーチは選手の身体の動きや感覚を「ただそれだけに当てはまる」ような仕方では把握するのだ。それゆえ、「身体の特異性」を重視するコーチングは何より正確なのであった。ところで、コーチは「揺れ動く差異」の中で選手とただ単に戯れているのではなかった。そうではなく、コーチはその中でもある種の主体性は保持しているのだ。そして、こうしたコーチに固有の主体性によって、コーチは選手を「導いてゆく」のである。

## <第4章 注釈>

---

- ① 「強制」と「育成」という2つの視点は、作田（1993：53-57）による「監視する他者」と「育成する他者」の区別を、本章の文脈に引き寄せて応用したものである。
- ② ガルウェイ理論は、スポーツにおけるコーチングの発端とされるだけでなく、ビジネスにおけるコーチングの発端の1つとしても位置づけられている。つまり、コーチングを語るためにはガルウェイ理論を経由しなければ始まらないのだ（O' Connor et al. 2007=2012：28-32）。
- ③ 結城はスピードスケートのコーチで、ガルウェイと同じく、選手の身体感覚を重視するコーチである。彼は清水宏保や小平奈緒といったメダリストの指導者としても知られる一流の指導者であり、現在は信州大学教授である。また2014年のソチオリンピックにもコーチとして派遣されている。なお、結城理論の検討において、社会化、超社会化、「セルフ1」、「セルフ2」といった用語を自由に使用しているが、結城自身は使用していないことをお断りしておく。

- ④ ポランニーは注意の理論（従属的意識／焦点的意識）を、部分（＝下位レベル）と全体（＝上位レベル）の観点から捉え直し、壮大な「層の理論」を展開している（Polanyi1962：58－59、76－82）。しかし、本章の文脈から離れてしまうので、ここで詳細を述べることはできない。
- ⑤ 「潜入」の概念はポランニーの定義そのものが曖昧であり、この概念を使用する者もその曖昧さを引きずる傾向がある。たとえば生田は、伝統芸能における内弟子制度の教育的意義を論じる箇所で、「当の『わざ』の世界に身をおく、潜入させるという要素が極めて重要な要素になっている」と述べる。そして「潜入」によって「『わざ』の世界全体を流れる空気を自らの肌で感じ、師匠の生活リズム（呼吸のリズム）を、そしてさらには当の『わざ』に固有の『間』を自分の呼吸のリズムとしていくことができる」と言う（生田1987：72－76）。生田は「潜入」の概念を「世界に身を置く」と言い換えるだけで、理論的考察を行っていない。
- ⑥ 相互浸透という用語は、ある意味、誤解を招きやすい表現ではある。「相互」という言葉によって、ここでもやはり「主体－客体」という枠が喚起されてしまうからである。しかし、相互浸透はいわゆる「主体と客体のやりとり」（相互作用）という意味ではもちろんない。たとえば、コーチが選手に語りかけ、選手がその言葉を理解すれば相互浸透が成立する、というわけではないのだ。コーチが「持続する世界」へ身を置くことで、選手の運動を「ともに生きる」（一緒に滑る）ということはすでに相互浸透ではないだろうか。しかし、それでもなお、「選手の側からの働きかけがないではないか」という批判はありえるだろう。では、選手の運動（力と言っても良いだろう）を「なぞる」ときのコーチの感覚は何と名づければ良いのだろうか。あるいは「持続の重なり」と言うこともできるのかもしれない。しかし、こうした表現上の困難を意識しつつ、差し当たり、本稿では、相互浸透という用語を使用することにしたい。

## 第5章 「コツをつかむ」とはどういうことか

### はじめに

前章では、「身体の特異性」を重視するコーチングについて論じた。そこで、本章では「体験」のもう1つの要素である「身体の偶然性」を重視するコーチング——「飛躍」を導くコーチング——について考察してゆくことにしよう。もっとも、前章で論じたコーチングも、大きく言えば「飛躍」を導くコーチングに入るだろう。しかし、ここでは、「飛躍」よりも「個人の特異性」に比重が置かれており、「飛躍」の誘発そのものに比重が置かれていたわけではない。

「飛躍」の誘発という点で言えば、「飛躍」は何もないところに生ずるわけではないという点が重要となってくる。自転車の例で述べたように、「乗れた」(=「飛躍」)という「体験」が到来するためには、ある程度の反復練習が必要であり、またある種の予感のようなものが存在しているのである。反復練習とは身体の動きを(先在する)型にはめようとすることなので、「必然性」の水準に属している。それに対して、予感とは「できるかもしれない」という漠とした直感であるので、「偶然性」の水準に属している——少なくとも「必然性」の水準ではない——と考えられる。

そこで、われわれは、いわゆる「コツ」と「カン」に注目し、いかにして「コツをつかむ」という「体験」(以下「コツ体験」と呼ぶ)が到来するののかについて考察してゆくことにしよう。一般に、「コツ」は身をもって体得される技能、また「カン」は一種の予感のようなもの、そして「コツ体験」は偶然的に到来するもの、とされているからである。

本章では、まず「コツ」と「カン」の語義を確認し、「コツ」と「カン」と「コツ体験」がどのような関係にあるのかについて見通しをつけることにしよう。次に、黒田亮の独創的な先行研究を検討し、その問題点を指摘することにしよう。そして、ベルクソンの動的図式論を援用して「コツ体験」の理論を構築し、最後に弓道の阿波研造による独特の指導法を検討することにした。

### 第1節 「コツ」と「カン」の語義

「コツ」と「カン」の語義について確認しよう（注①）。

「コツ」は漢字で表記すれば「骨」である。「骨」は身体を支える堅い組織であり、「骨格」と言えば身体全体を支える中心軸である。こうした生理学的概念が転用されて、次のような意味を担うようになったと推測される。すなわち「コツ」とは「学問・技術・芸道などの奥義。中軸となる大切なところ。また、それを会得する才能。」「物事を行なう勘どころ。要領。急所。呼吸。骨合。」である（日本国語大辞典第二版編集委員会 2001b : 856-857）。

この辞書的定義は3つの項目に分節することができる。すなわち、①主体の素質（才能）、②対象の本質（奥義）、③主体の独特な技能（物事を行う勘どころ）、である。筆者の語感では、③が最も「コツ」のニュアンスに近く、一般的にも「コツ」の中心的意味を担っているように思われる。

この③中心説は、「コツ」が「コツ体験」と不可分であるという事情によって根拠づけられよう。すなわち、「コツ体験」によって身についた技能こそ「コツ」(③)なのである。とするならば、もともと主体に「コツ」(①)があったとか、あらかじめ「コツ」(②)が存在していたという思考は、「コツ体験」（とその内容としての「コツ」(③)）のあとに事後的に設定されたものと考えられる。つまり、③は①と②よりも根源的なのだ。それゆえ、以下では「コツ」を③の意味に限定して用いよう。

「コツ」に論理的に先行するのは「コツ体験」である。しかし、「コツ体験」はしばしば「カン」と呼ばれる直感によって誘われるように見える。先に述べたように、自転車の練習をしている時、「乗れた」時の感じをうっすらと意識しているはずである。「カン」は漢字で表記すれば「勘」、そしてその意味は「直感で物事を判断すること。また、その能力。第六感。」（日本国語大辞典第二版編集委員会 2001a : 1208）とされており、一般的な語感とも一致する。では、これら3者——「コツ体験」・「コツ」・「カン」——はどのような関係にあるのだろうか。

黒田の考証（1923=1980 : 22）によれば、「カン」とは「認識および判断などに現われる靈妙な一種の直覚力」であり、この「カン」が「意志動作の習熟に伴うある特殊の体験的事実に対して」使用される場合に「コツ」を意味するという。つまり、「カン」は直観（精神性）を、「コツ」は技能（身体性）を、それぞれ強調する言葉なのである。もっとも、黒田の定義では、「カン」の中に「コツ」が含まれている。しかし本稿では、「カン」と「コツ」を区別したいと考える。つまり、「コツ体験」の2つのアスペクトとして、「コツ」と「カン」を捉えたいのである。というのも、3者はしばしば次のように現象するからだ。すなわち、

『カン』によって『コツ体験』が到来し、『コツ体験』によって『コツ』が体得される」というように、である。

## 第2節 黒田亮の立体心理学

### 2. 1. 「識」と「覚」

「コツ」と「カン」にかかわる稀有な先行研究として黒田亮の立体心理学を取り上げよう(注②)。

黒田によれば、自我に直接に与えられる精神的事実には、「識」(consciousness)と「覚」(comprehension)がある。前者は外部から与えられた水平的な意識であり、後者はこの水平的意識の次元にある種の意志的工夫を施すことで深さを有するに至った垂直的な意識である。たとえば、同一の木であっても、素人にはただの木として意識に映ずるだろうが(=「識」、大工は木の内的特質を直観しているだろう(=「覚」)。こうした「覚」の体験を記述する学こそ、彼の言う立体心理学であり、「カン」と「コツ」はそこに一括される(黒田 1923=1980 : 110-111、303-304)。

銀行の偽札鑑定員の例を取り上げてみよう。彼は大量の札を数えつつ、その中から偽札を探し出さなければならない。「長い経験がそうするのでしょうか、指の先でサッサッサッと算えているうち、もし偽紙幣があると、そこで算えている手が自然ピタリと止まります。それが手ざわりからか、感というものからくるのかわかりませんが、とにかくピタリと止まって次の札へと手が行かなくなるのです。そしてその札を引き出してみますと、やはり偽札ですね」(黒田 1923=1980 : 102)。

素人にとって大量の札は同じに見える(=「識」)。しかしこの鑑定員は本物と偽物を見分けることができる(=「覚」)。そして、「ピタリと手が止まった」瞬間には、明らかに「カン」が作動している。しかしこの「カン」は、長年の経験によって身についた技能を根拠としており、その意味で「コツ」の作動も認めなければならない。こういう次第で、黒田は両者を「覚」の体験として一括するわけである。

### 2. 2. 那一点の概念

次に、「覚」の特徴を抽出してみよう。その際、那一点と直指という2つの概念を検討することが有効だと思われる。

那一点から始めよう。那一点とは対象の急所を指す概念である。ペン使用という単純な事例を取り上げて、彼は次のように言う。「この中心は、物理的にどことさすことは困難ではあるが、とにかく一本のペン軸を代表するに足るひとつの中心が、考えられる。強いておおよその見当をいえば、まず三本の指によって書記の場合に支えられる部分に、この中心が局在しているかの感じがする」（黒田 1928=1981：44）。われわれは字を書こうとしてペンを手に取る。その時、手に取るべき場所は直観的に把握されるが、その場所こそ那一点なのである。

しかし那一点は対象の急所というにとどまらない。那一点は機能的中心でもある。すなわち、那一点は「これによって全体を支持し、全体を動かす支点にもなっている」（黒田 1928=1981：45）、というのだ。この機能的中心としての那一点は空間的側面と時間的側面を有している。前者はある種の図式性の存在を含意する。すなわち点であるとはいえ、那一点はペンを持って字を書くという一連の連続的行為（=図式）を含んだ点なのである。そしてこの図式性という特徴によって、1つ1つの行為は、その終局を先取りするような仕方で、あるいは終局に導かれるかのように進行することになる。たとえば、ペンを手に取った瞬間、字を書くという動作が、あるいは書くべき文字でさえ、先取りされてしまうのである。これが後者の側面であり、「覚」の動的な性質と呼ばれる（黒田 1923=1980：94-95、305-309）。つまり、那一点とは、一連の連続的行為（=図式）を含むとともに、来るべき終局へと導きさえする点なのである。ここから、「覚」の特徴として、図式性と動的な性質を導出することができる。

### 2. 3. スポーツ技能への適用可能性

直指の検討に入る前に、那一点の概念がスポーツ領域にも容易に適用可能だという点を確認しておこう。ここでは1例として落合博満のバッティング理論を取り上げる。彼によれば、「スイングとは、いくつもの動きがひとつにつながってゆく精密な動作」（落合 2003：43）である。それゆえ、下半身の動かし方、上半身の動かし方、あるいは両者の連動性等々に関して、無数の留意点が存在する。ここでは上下半身の連動性を中心に紹介してみよう。

まずトップの位置（振り出しの位置）に入れる動きについてである。この時、「下半身はできるだけ捕手よりにひねって回転のパワーを蓄え」、上半身は「顔や肩の位置を動かさず、しかしバットを握った両腕をトップの位置に入れる〔筆者注：捕手側に引き絞ってパワーを溜める〕形を作らなければならない」と言われる。顔と肩の位置を固定しておくのは投手の

ボールがブレないようにするためだ。それゆえ、上半身（の顔と肩）と下半身は反対の動きになる（落合 2003 : 112）。

次に、トップの位置からインパクトにかけての留意点はこうだ。「下半身は、捕手よりにひねって蓄えたパワーを活用して、絞った手ぬぐいをほどくように、今度は投手よりに回転させてゆく。しかし、上半身はボールを（目で）捕捉しながら、下半身につられて回転しないように我慢する」。そして、「グリップをボールにぶつける」感覚で、トップの位置からミートポイントに一直線に振り出す。ここでも、上半身と下半身には別の動きになる（落合 2003 : 109、112-113）。

最後はフォロースルーの留意点である。この段階では「回転運動で生まれたパワーをできるだけ自然に逃がしてやるために、バットを握った腕はセンター方向へ抜き、体は上下半身ともに回転してゆくことを許容する」（落合 2003 : 113）。

以上がスイングにおける上下半身の留意点である。これらの留意点は全て那一点として機能する可能性を持っている。たとえばトップに入れる動きは次に続く動きと連動しているし（＝図式性）、1つ1つの動作は最後のフォロースルーに引き寄せられるかのように進行するだろう（＝動的な性質）。とするならば、トップに那一点を見出している実践者が、そのトップの位置にスムーズに入った瞬間、来るべきホームランを直観するとしても、全く不思議ではないわけである。

このように考えるなら、那一点の概念は対象の急所というだけでなく、スイングという一連の連続的動作における急所という意味にも拡張できるだろう。トップの位置にも、ミートポイントにも、何らかの対象が存在しているわけではない。スイングの那一点とは、スイングの軌道上のどこかに実践者が重要だと感じて独自に設定した場所、すなわち彼自身しか知らないスイングの急所と言うべきである。換言すれば、上記の無数の留意点は、実践者自身によって把捉されてはじめて那一点として生成するのである。この点を確認するため、再び黒田の議論に戻ろう。

## 2. 4. 直指の概念

那一点を把捉する作用は直指と呼ばれる。直指は、対象の単なる認識（＝「識」）ではなく、「覚」の作用であり、対象を「わが生命圏内に持ち込み、これを有機化すること」、「自分の血の中に、また肉の中に、これを迎え入れること」である。たとえば、われわれは自分の飼い猫と他の猫とを即座に識別できる。このことが可能なのはその猫の那一点を把捉し

ているからであり、その猫と独特の因縁を結んでいるからだ。直指の作動している時、われわれの姿勢は能動的であり（＝積極性）、予め決定した態度で向き合っている（＝規定性）。

（黒田 1928＝1981：86-87、106-107）（注③）。

では直指はいかにして可能なのか。この点は彼の学習論に透けて見える。彼によれば、学習は、問題の解決が既に与えられている場合と、問題と解決の間に隔たりのある場合に分けられる。前者は同一作業の反復であり、後者は「創造の働き」にかかわる。そして、両者を分かち心理的基準の1つは努力を要するか否かにある（黒田 1928＝1981：112、115）。

直指は後者の学習にかかわるが、この学習過程は以下のように進行するという。まず、「方向づけ」の段階である。すなわち、学習者は問題の解決を目指して「一定度の緊張状態」に置かれ、到達すべき目標に向かって方向づけられる。この「方向づけ」は学習過程の軌道から逸れすぎないための「見張り番」である。次の段階では、この「見張り番」は「操縦する舵手」の位置に退き、「問題解決に向かって処理されるべき学習材料そのものの上に現れる変化」が前景に出てくる。そして学習活動は「逐次目標に向かって接近し、最後に問題解決の端緒をつかむ」に至る。ところで、こうした学習過程は次元の向上（＝創造）を必ず伴っており、日々の生成に思い致せば、人生にも比せられるという（黒田 1928＝1981：112-114、118-119）。

## 2. 5. 小括

以上で黒田の議論の検討を終わる。そこで、ここでは大きく2つの問題点を指摘しておきたい。

第1の問題は、「カン」と「コツ」を「覚」の体験として一括してしまうという点である。両者は確かに現象の中では相互に混じり合っている。そして、「カン」が主に認識や判断にかかわり、「コツ」が主に身体的技能とかかわっていることも納得できる。しかしこの混じり合いとはいったいどういうことなのだろうか。つまり、両者を一括することで、「カン」と「コツ」の関係という問題が放置されてしまうように思われる。

第2の問題は彼の議論の前提にかかわっている。たとえば、那一点と直指について、前者は対象の急所であるとともに機能的中心でもある点であり、後者はこの那一点を把握する作用であった。つまり、両者は「覚」の体験における対象側と主体側の特性記述と言える。しかし、こうした立論は、「主体—対象」という枠を前提にしているため、「飛躍体験」が捉えにくくなっているように思われる。



こうした問題点は、彼の議論が根本的に記述的だという点に由来するように思われる。換言すれば、現象論から出発するために、発生論、すなわち「飛躍体験」が射程に入りにくくなっているのである。そこで、われわれは、ベルクソンの動的図式論を導入し、「飛躍体験」を中心に置く理論を構築することにしよう。

## 第3節 ベルクソンの「動的図式」論

### 3. 1. 記憶論

ベルクソンの動的図式論は記憶論を前提としている。そこで、彼の記憶論の基本枠組について、有名な逆円錐モデルを用いて概説しておきたい（注④）。

図1の平面Pは物質の世界、逆円錐は記憶の世界、逆円錐の諸断面は意識の深さ、Sは物質と記憶の接触点（=身体）を示している。ベルクソンによれば、現在の知覚-行動は、現下の状況に役立つ記憶を挿入することで成立している。たとえば、横断歩道が赤信号から青信号に変わった瞬間を考えてみよう。この状況において、青信号の知覚と歩き出すという行動とは不可分である。すなわち知覚と行動は相互に連結している。ところで、この知覚-行動が可

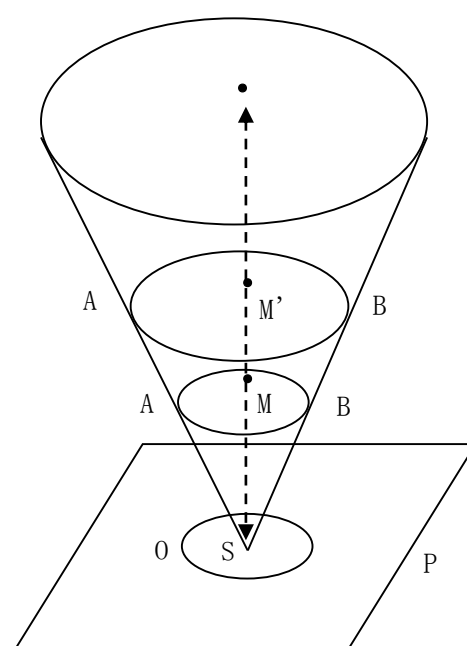


図1 記憶の逆円錐

能なのは、「横断歩道は青になったら渡っても良い」ということを、既に知っていた（=記憶として保持していた）からである。このように、繰り返しになるが、知覚-行動は記憶の挿入を前提として成立している。

記憶の挿入が行われない知覚-行動は——実際にはあり得ないが——純粹知覚と呼ばれ、平面Pに対するSの自動的反射運動がそれに当たる。これは、現下の状況に対する注意——「生活への注意」——が精神を覆っている場合であるが、逆にこの注意が弛緩すると、意識は逆円錐の方に向かって拡散し、夢想状態へと入ってゆく。この方向の極限は——これも実際にはあり得ないが——純粹記憶と呼ばれ、逆円錐の底面に相当する。このように、純粹知

覚と純粹記憶を極限概念として設定するなら、知覚-行動は、純粹記憶が収縮し、純粹知覚が制限される場所に成立すると言えよう。図で言えば、当面する状況に合わせて、ある平面が選択され、そしてその平面上の諸イメージから適切なイメージが凝縮して (=点 M)、Sの方へと降下する、という具合である。

ところで、先に挙げた日常的行動はほとんど自動的反射運動と変わらない。横断歩道を渡るかどうかについて、われわれはわざわざ過去の記憶を参照したりせず、身体の中に埋め込むという仕方保持している。この習慣化された身体的諸動作は「運動図式 (*schème moteur*)」(Bergson1896=2007 : 123-124、148-149) と呼ばれており、その図式の通用する領域が円 0 に当たる。

われわれの日常生活はほとんど円 0 で、あるいは過去の類似の記憶を参照することで、事足りる。しかし、既存の行動様式を超える新しい行動様式を習得しようと努力する時には、精神は緊張状態に入り、ある種の集中状態が生じてくる。

### 3. 2. 「動的図式」の概念

この集中状態において、逆円錐の中心軸のベクトルの向きは逆円錐の方へと変わる。この方向転換によって意識は拡散するが、ある特殊な点——図で言えば点 M' ——によって導かれる、とベルクソンは言う。もっとも、この点は、図式 (と展開されるべき諸イメージ) を含んだ点であり、しかも「イメージを再構成するために必要な指示を含ん」だ点でもある。そこで、彼はこの特殊な点を「動的図式 (*schéma dynamique*)」と呼ぶのである (Bergson1919=2012 : 232)。

「動的図式」の概念を具体的に捉えるために、ベルクソンの挙げるワルツの習得の例を取り上げよう。ワルツを習得する時、われわれはまずワルツを見る。そして、ワルツの視覚イメージに合わせて、過去の利用しうる運動イメージ (ex. 歩く、身体を回転させる) を改変する、と普通は考える。しかし、ベルクソンによれば、ワルツを見た瞬間、まず、純粹に視覚的でも、純粹に運動的でもない特殊なイメージ、すなわち「新しい全体的な運動の図式的な表象」(Bergson1919=2012 : 254) (≡ 「動的図式」) が得られている。この表象は全体的である。すなわち、それは、ワルツの諸動作間の関係、特に時間的な関係を描いているのであり、全体を分析して得られる諸部分の総和ではない、とされる。

この「動的図式」を基準に、人はワルツの稽古を行う。これは、いわゆる試行錯誤の局面、すなわち、「動的図式」と諸イメージとの間、あるいは諸イメージ間において、種々の相互

作用が行われる局面である。換言すれば、「動的図式」に合わせて、古い諸イメージ（とそれらの間の関係性）は「新しい生き方」（Bergson1919=2012:255）を求められるのである。図で言えば点M'が軸上を上下している状態、あるいは点M'に合うよう諸平面に位置する諸イメージが改変されつつある状態と言えよう。

しかし、試行錯誤の努力の結果として、必然的に、新しい身体的技能が習得されるというわけではない。換言すれば、試行錯誤は必要条件ではあるが、十分条件ではない。では十分条件とは何か。それこそ「飛躍体験」にほかならない。すなわち、これまで点M'は潜在的にわれわれを導いていたのだが、「飛躍体験」が到来した瞬間、点M'は一挙に展開し、新しい身体的技能として現実化する、と考えられるのである。

この「動的図式」が展開してゆく局面は、「生成」の局面と呼ぶに相応しいだろう。しかし、それにしても、いかにして「飛躍」が起きるのだろうか。この点に関して、ベルクソンの乗馬経験談を引いておきたい。彼によれば「それまで努力しておこなっていたことを努力しないでしよう」と決心した時、「飛躍」は訪れた。「緊張状態からゆるりとした無理のない信頼の状態に移ったとき、結果はずっとよくなった。…<中略>…だれの手、なにものの手だかは知らないが、身をまかせきる信頼だったのだろう。神の、とはあえて言わないが、乗馬の精神の、とでもしよう。柔軟さやゆとり、さらにその上のなにものかをわたしに許すことになった一連のすべての努力に、ほとんど瞬間的に匹敵する絶対的な信頼だ」（Chevalier1959=1969:330）。

繰り返そう。ベルクソンは努力の停止を機に「何か」——彼の言葉では「神」・「乗馬の精神」——に導かれて「飛躍」した。そして、この「飛躍」によって、それまでの努力の成果に取って代わるほどの信頼感に包まれ、柔軟さとゆとりがもたらされたのである。この時の「体験」を図で言えば、ベルクソンは、平面ABから平面A'B'へと一挙に「飛躍」し、その平面A'B'へと呼び寄せられた諸イメージが、適切な仕方で改変されて、漸次、点M'を通過して円Oへと下降している状態だ、と言えよう。

「生成」の局面を経たとすれば、古い円Oは新しく組み換えられずにはいないだろう。そこで、人はいつでもその「体験」が再現できるよう、「運動図式化」しようとするに違いない。すなわち、「体験」の記憶を参照し、自分の身体に覚え込ませようとするだろう。換言すれば、「生成」の過程を何度も生き直すのである。そして、新しい身体的技能が身についた時、平面P上に、新しい円Oが描かれることになる。もっとも、その新しい身体的技能の水準が深く繊細であればあるほど、「運動図式化」は困難を極めるに違いない（注⑤）。

### 3. 3. 阿波研造の指導法

ここで、ベルクソンの動的図式論の中に、「カン」・「コツ」・「コツ体験」という諸概念を位置づけておこう。まず、「カン」はベルクソンの言う「何か」と等価だと考えることができよう。ところで、「カン」は「動的図式」の「展開」を導くのであった。とするならば、この「展開」によって現実化される新しい身体的技能を「コツ」と呼んで良いだろう。そして「コツ体験」とは「飛躍体験」そのものして位置づけることができる。換言すれば、「コツ体験」を導く直観が「カン」であり、「コツ体験」によって現実化される新しい身体的技能が「コツ」なのである。黒田の議論では、「コツ」と「カン」は「覚」の体験として一括され、いわば並列的に捉えられていた。しかし、「カン」と「コツ」は、「動的図式」の展開にかかわる両輪であり、その意味でいわば立体的に捉えられることになった。換言すれば、ベルクソン理論を通すことで、現象の背後で起動している内的運動が射程に入るようになったのである。

「コツ体験」は「カン」によって導かれる。そして「カン」を活性化させる手がかりが「動的図式」なのだ。「カン」を与えることはできない。とするならば、「飛躍」を導くコーチングの課題は、「動的図式」を意識的に与えることにあると言えよう。この点、弓道の阿波研造の指導法は参考になる。というのは、彼は「わざ言語」(注⑥)という形で「カン」を活性化させようとしている、と解釈できるからである。

弓射は「弓を手に取り——矢をつがえ——弓を高く捧げ——一杯に引き絞って満を持し——射放つ」という5動作で構成される連続的過程(=「1つの業」)である。ここでは、弓の最終局面である「放れ」の段階に絞って、①「試行錯誤」、②「生成」、③「運動図式化」という順に考察してゆく。

まず①「試行錯誤」である。阿波の指導は一貫している。すなわち、模範演技を示し、模倣させ、弟子が行き詰まると独特の技法や「わざ言語」によって弟子を導いてゆくのだ。

「放れ」の際も、阿波はまず模範演技を見せ、ヘリゲルはそれを真似る。ここで、阿波の模範演技はヘリゲルの記憶の中で「動的図式」と化し、彼を導いてゆくはずである。しかし彼の内部の「動的図式」はその影響力の発揮を阻まれる。特に小銃射撃の経験の記憶が邪魔をする。小銃射撃は命中という目的のために引き金を引くのであり、ヘリゲルは「放れ」を含む弓射の過程をこの観点から理解していたのである。この点を告白したヘリゲルは師匠に一喝される——「正しい弓の道には目的も、意図もありませんぞ!…<中略>…あなたが

あまりにも意志的な意志を持っていることが、あなたの邪魔になっているのです」  
(Herrigel1948=1981 : 53、58-59)。

しかし、ヘリゲルは意図性を脱し、「無心」になることができない。特に指の開き方で悪戦苦闘する。握りが強すぎると開く時に動揺が走り、弱すぎると満を持す前に弓を放してしまふのだ。そこで、阿波は「わざ言語」を発するのだ。「雪の重みで笹は次第に低く押し下げられる。突然積った雪が滑り落ちる、が笹は動かないのです。この笹のように一杯に引き絞って満を持していなさい。射が落ちてくるまで」(Herrigel1948=1981 : 56-57)。「わざ言語」は(彼のうちに潜在しているはずの)「動的図式」への援護射撃であり、「飛躍」へと誘うことばである。しかし、小銃射撃の経験、広く言えば意図性という要素が「飛躍」の邪魔をする。

②「生成」の局面に移ろう。意図性は邪魔である。意図性は「私」に由来する。では、「私」でなければいったい誰が「放れ」を行うのか。「それ」である、と師匠は答える。しかしその意味は明かされない。

相変わらず、ヘリゲルに技術的進歩は見られない。しかし、「それ」を経験するとか、禅への通路を見つけるとか、一切のことが気にならなくなってくる。師匠に問うても、「尋ねないで稽古しなさい」という聞き飽きた言葉を聞くだけだ。「それで私は問うことをやめたのである。…<中略>…そしてついに、私がこの数年来絶えず苦勞して来たことの一切が、私に何でもなくなったということすら、もはや心にとめなくなった」。そしてある日、彼が一射すると、師匠は丁重にお辞儀をして叫んだ——「今し方“それ”が射ました」(Herrigel1948=1981 : 93-94)。「それ」とは何か。それはベルクソンの言う「何か」であり、「飛躍」を導く力——ベルクソンの用語では「生命の躍動力」——であろう(注⑥)。

③「運動図式化」に移ろう。ヘリゲルは「それ」が射たあと、時々、正しい射ができるようになる。正射を言葉で説明することはできないが、正射と失射を自分で区別することは可能である。「両者の質的区別があまりにも大きいので、一度それが経験されると、もはや見逃されるわけにはいかないのである」(Herrigel1948=1981 : 95)。

正射の時には、身体は動揺せず、何の苦もなく息を吐き出せるが、失射の時には、溜まっていた息が爆発的に吐き出され、急には息が継げないという。さらに興味深いのは正射の内面への作用である。すなわち、「正射は射手自身に対して、その日が今初めて明け始めたような気がするくらいの作用を彼に及ぼすのである」(Herrigel1948=1981 : 96)。

正射と失射の区別が可能なのは、新しく生成した平面が彼の内的基準と化したからであ

ろう。そして、この内的基準を参照しつつ、彼は修行を継続するのである。正射の時の晴れやかな気分は、理論的に言えば、「生成」した時の内的運動を生き直しているのだ、と解釈することができよう。

繰り返しになるが、「飛躍」を導く条件を2つに整理しておこう。1つは「意図性の排除」である。ベルクソンと同じく、ヘリゲルの場合も、「問うこと」をやめた時、すなわち意図性から離れた時に「それ」が到来し、「飛躍」が生じている。そして、この「飛躍」によって、「動的図式」は一挙に展開され、新しい身体的行為として現実化する、という点も同じである。他方、もう1つは、「動的図式」の機能についてである。ベルクソンと同じく、ヘリゲルの場合も、「動的図式」はある運動に触れたとき、必然的に（潜在性の水準で）形成される、と考えられる。そして、「カン」はこの「動的図式」をいわばテコとして到来するのである。さらに言えば、ヘリゲルの場合、阿波の「わざ言葉」によって、「動的図式」は（潜在性の水準で）活性化された、と解釈できるのである。その意味で、ヘリゲルの「飛躍」は、少なくとも阿波にとっては、突然であるが、偶然ではなく、必然的なものに映じたかもしれない。しかし、たとえ「飛躍」が到来しなくても、阿波研造はいつまでも「飛躍」を待ち続けることであろう。

## おわりに

本章では、「身体の偶然性」を重視するコーチング——「飛躍」を導くコーチング——について考察した。まず「コツ」と「カン」の語義を確認し、「コツ」と「カン」と「コツ体験」について、『『カン』によって『コツ体験』が到来し、『『コツ体験』によって『コツ』が体得される』という見通しがつけられた。そして、次に、黒田亮の独創的な先行研究が検討され、その理論的問題点として、特に「主体—対象」という枠では「飛躍」は捉えにくいという点が指摘された。そこで、ベルクソンの動的図式論が援用されたのである。「動的図式」とは動くものの全体的イメージであり、主体が運動に触れたとき、すでに主体のうちに（潜在性の水準で）先行的に形成されている。この「動的図式」を手がかりとして、主体は「何か」に導かれて「飛躍」するのである。そこで、この「何か」が「カン」として、「飛躍」が「コツ体験」として、「コツ」が「コツ体験」を通して現実化する身体的技能として位置づけられたのであった。そして、こうした理論構築を経て、阿波の指導法が検討されたのである。「飛躍」を導くコーチングとしては（模範演技によって植えつけられた）「動的図式」を活性化させること以外にありえない。阿波研造による「わざ言語」の使用は「動的図式」

への援護射撃であり、それゆえ「飛躍」を誘うもの、と考えられるのである。

最後に、前章と本章を踏まえて、超社会化のコーチングについて、簡単にまとめておこう。超社会化のコーチングの目的とは、端的に「飛躍」を導くことである、と言える。そして、「飛躍」を導くためには、いくつかのルートがあることが明らかになった。感覚であれ、運動であれ、あるいは言葉でさえ、その用い方によっては——つまり「動的図式」を活性化させるものであれば——「飛躍」を誘発できるのである。他方、コーチの役割については大きく2つの立場がありうることも明らかとなった。1つは、積極的なもので、選手の中に「潜り込み」、自分の感覚と選手の感覚をすり合わせてゆくという方法である。そしてもう1つは、消極的なもので、選手の創造性の発揮を「待ち」、その援護に徹するという方法である。しかし、この区別は便宜的なものであり、優れた指導者は、たとえ、「待つ」指導であったとしても、選手の中に「潜り込み」、選手の心身の状態を的確に把握していることだろう。というのは、こうした把握なしに適切な援護（ex. タイミング、アドバイス）などできるはずもないからだ。しかし、現状において、超社会化のコーチングは、社会化のコーチングにとって変わることはできないだろう。特に競技スポーツでは、その構造上、「飛躍」の到来を待ってはくれないからである。では、超社会化のコーチングは社会化のコーチングを補完するだけにとどまるのだろうか。そうではないだろう。われわれは、超社会化のコーチングについてあまりに無知であり、その探求はまだ途についてさえいないのである。超社会化のコーチングがもっと探求され、「飛躍」を誘発するための具体的な方法がもっと開発されてくれば、超社会化のコーチングは社会化のコーチングにとって代わることができるかもしれない。というのも、超社会化のコーチングは、何よりも正確なのであり、実は、パフォーマンスの向上をもたらす一番の近道なのだから。

## <第5章 注釈>

---

- ① 「コツ」を意味する言葉は各国語にも存在するが、そこでも「わざやカン、さらには技術や技能などの多くの名辞の意味内容と渾然としている」という（金子 2002 : 227-229）。
- ② 現下、「コツ」研究の最も盛んな学問領域はスポーツ運動学である。金子（2002）は私的な運動感覚能力（＝「コツ」）の発生論的地平に照準し、新しい運動感覚の発見を「創発」、「創発」の促しを「促発」と呼び、それらの能力の発生を捉える分析枠組を提供している。この系列には、「コツ」の発生段階論（佐藤 2000）、あるいは指導者自身の「コツ」

意識とそれを支える動きの感じを構造的に把握する研究（木下 2010）など、「コツ」に関する知見が相当蓄積されている。他方、スポーツ社会学では、亀山（2012）の一連の論考が——「コツ」という言葉を使用していないが——代表的であろう。スポーツ運動学に不案内な筆者としては、その有効性を認めながらも、非常に早い時期になされた独創的な研究である黒田の理論を取り上げるにとどめておきたい。

- ③ 直指の概念は、第 4 章で検討した「潜入」の概念と類似している（Polanyi1966=1980：32-35）。
- ④ ここでの記述は、ベルクソン（1896=2007：216-223、231-232）、藤井（2002）、檜垣（2000）、亀山（2012：201-203）を、筆者なりに解釈した上で要約したものである。また記憶の逆円錐については、亀山（2012：201）のものに若干手を加えて借用した。なお本節以降の理論展開は亀山（2012：202-203）に多くを負っている。
- ⑤ スポーツの一流選手が過去のベストの記憶に固執する理由の 1 つは、その時の体験が深すぎたためである、と解釈できる。われわれは、この論点について第 3 章で少し触れたが、十分に展開するにいたっていない。体験の深さと固執の程度の関係はいずれ探究しなければならぬだろう。
- ⑥ 「わざ言語」（craft language）とは「動くもの——あるいは生きたもの——をできるだけそのままに、表現しようとすることば」である（亀山 2012：168-169）。
- ⑦ 「生命の躍動力」はエネルギーであり、このエネルギーが直観されるとき「カン」と呼ばれるのであろう。それゆえ、両者は別のものではない、と筆者は考えている。



# 結論

## 第1節 議論のまとめ

本稿の目的は、「体験の社会学」の意義を示すことであった。この課題に対し、われわれは、まずスポーツにおける病理現象の考察を通して「体験」という視点の有効性を示し、次にそうした病理現象を乗り越えるコーチング方法の考察を通して「体験の社会学」を実際に展開して見せた。そこで、われわれに残された仕事は、まさに「体験の社会学」の意義を示すことである。しかしその前に議論の展開を振り返っておくことにしよう。

まず、第1章において、本稿の問題と方法が明確にされた。近代社会とスポーツの関係、そしてスポーツと身体の関係についての考察を通して、競技スポーツは、構造上、アスリートのアノミー状態へと追い込んでいくということ、また（スポーツの依拠する）近代的身体観は「身体の同一性」を仮定するため、「身体の特異性」や「身体の偶然性」を捨象してしまうということが確認された。次に、こうした近代スポーツの困難を乗り越えるため、（生の哲学に依拠して）「体験」の概念が明確に規定され、（社会学と接続するために）社会化と超社会化という視点が導入された。「体験」とは意識による分節以前の経験であり、「経験」とは意識による分節を経た経験であるということ、また社会化（＝「経験」）の作用を超えていく作用として超社会化（＝「体験」）の概念を導入すべきである、とされた。ここで重要なのは、「体験」が「生の直接性」に根ざしており、特に「偶然性」と「個人の特異性」のモメントを有するという点である。

第2章と第3章の課題は「体験」という視点の有効性を示すことであった。第2章では、スポーツにおける病理現象の1つとして、バーンアウトが取り上げられた。そこでは、先行研究として、心理学と社会学におけるバーンアウト論が詳細に検討され、両者がともに還元主義に陥っていることが示された。つまり、還元主義では、心理学的要因、社会的要因といった諸要因が考慮されるだけで、バーンアウトの本質を説明できないのだ。そこで、「体験」という視点の導入によって、先行研究を統合する形で「バーンアウトとはエネルギーが空回りしている状態である」と（再）解釈され、同時に、バーンアウトを惹起する主因は「体験」の更新の欠如であるという知見が得られた。

第3章では、スポーツ選手における「キャリアトランジション問題」が取り上げられた。

ここでは、先行研究として心理学の知見が検討され、やはりその還元主義が批判された。つまり、還元主義でいけば、「生命感の喪失」という「体験」の次元の問題が、(社会化の過程に影響を与える) 諸要因の1つに還元されてしまうのだ。そこで、超社会化の概念が導入され、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応(再・社会化の失敗)ではなく、いわゆる「ケリ」(脱・超社会化の「体験」)の問題であると(再)解釈されることになった。つまり、アスリートは、「ケリ体験」の欠如(あるいは不十分さ)によって、引退できないのである。

第2章と第3章で示されているのは、「体験」の視点を導入することで、より現象の本質を把握できるということである。またここでは、スポーツにおける病理現象は——超社会化を導く「体験」であれ、脱・超社会化を導く「体験」であれ——「体験」の欠如によって発生しやすくなるという知見が得られた。他方、これにスポーツの構造が追い打ちをかける。つまり、競技スポーツは、「体験」の到来を待ってはくれないという意味で、構造的に病理現象を生みやすくなっているのである。そこで、次には「体験」の次元を重視するコーチング方法が考察されることになる。

第4章と第5章では「体験の社会学」が実際に展開された。第4章では、身体感覚(「身体の特異性」)を重視するコーチングについて論じられた。自分の身体感覚に忠実であることは、外的なものに惑わされにくくなる、と考えられるからである。ここでは、まずガルウェイ理論が検討され、社会化のコーチング(=強制)と超社会化のコーチング(=育成)が区別された。そして、感覚を重視するコーチングとして、結城理論が詳細に検討され、その方法の究極である「潜り込み」が重点的に論じられた。「潜り込み」とは、コーチが選手の身体感覚を内側から把握する方法である。しかし、結城の方法は記述的であり、理論的ではなかった。そこで、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論によって、「潜り込み」は理論として一般化されることになった。そしてその結果として、「主体—客体」という枠の限界、「潜り込み」の正確性(=「身体の特異性」の把握)、コーチに固有の主体性といった新しい知見が得られたのである。

第5章では、「飛躍体験」(「身体偶然性」)を導くコーチングについて論じられた。「体験」を更新できれば、病理現象を遠ざけやすくなる、と考えられるからである。ここでは、具体的事例として、「コツ」をつかむという体験(=「コツ体験」)の誘発について論じられた。まず、「コツ」と「カン」の語義の検討によって、「カン」によって「コツ体験」が誘発されるという点が確認された。次に、先行研究として黒田亮の立体心理学が取り上げられた

が、彼の議論は独創的ではあるが記述的であり、理論的ではなかった。そこで、ベルクソンの「動的図式」（動くものの潜在的イメージ）の概念が導入され、「カン」（生命の直観）を誘発するものとして「動的図式」が位置づけられることになった。そして、こうした「動的図式」の活性化を目論む指導法として、弓道の阿波研造の指導法が検討されたのである。それは、「わざ言葉」を巧みに利用する指導法であり、弟子の「飛躍体験」をいつまでも待ちつづける指導法なのであった。

## 第2節 「体験の社会学」の意義

次に、以上の諸論を踏まえて、「体験の社会学」の意義を示してみよう。1つ目～3つ目までは理論社会学における意義であり、4つ目と5つ目は実践的な意味での意義である。

1つ目は「社会学主義の回避」である。社会化の概念の検討を通して明らかとなったように、社会学は、そのディシプリンにおいて社会を前提するため、創造性や「個人の特異性」を捨象することになる。確かに「個人が社会を作り、社会が個人を作る」というのは事実である。しかし、この言明が意味を持つためには、創造性や「個人の特異性」の根拠——つまり社会を超える「何か」——を明示しなければならないであろう。そこで、われわれは、この「何か」として「生命の躍動力」を想定したのである。人間は確かに社会に拘束されている。たとえばモースの身体技法論などが明らかにしているように、その拘束力は身体の水準にまで達している。しかし、人間は社会に拘束されるとともに「生命の躍動力」に貫かれてもいるのだ。この点が実感される経験こそ「体験」なのであり、それゆえわれわれは「体験」を重視するのだ。たとえば、もし「体験」を考慮しなければ「キャリアトランジション問題」の本質は全く理解できないであろう。アスリートがスポーツに情熱を注ぎ込むのは、究極においては、名声や富を得るためでもなければ、周囲の期待に応えるためでもない。そうではなく、スポーツをすることが「喜び」だからであり、それゆえにこそ引退できないのである。そしてその「喜び」は「体験」にともなう「喜び」でなくて何であろう。こうした「体験」の視点を失うとき、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応へと還元されてしまうのである。

2つ目は「経験主義の補完」である。社会学は何よりも科学であり、経験主義的学問として存立している。つまり、経験的事実を客観的に検証するという手続きを重視するのである。この立場そのものは1つの立場であり、当然、あってしかるべきである。しかし、こうした

経験主義＝実証主義は、現象の本質に外側から迫っていく立場であり、それゆえ現象の本質をそのまま捉えることはできない。それは、現象の本質に無限に接近していただけなのだ。たとえば、バーンアウトを捉えようとするとき、実証科学は、心理学であれ、社会学であれ、還元主義的に捉えるのである。それに対して、われわれは、「体験」の視点を導入することで、「エネルギーの空転」というバーンアウトの本質を捉えることができた。つまり、「体験の社会学」は、種々のデータや知見を参考にしつつ、現象の本質をそのまま捉えようとするのである。しかしそれだけではない。より積極的な面で言えば、「体験の社会学」の方法は実証科学よりも正確性において優れている。たとえば、スポーツ科学は選手の身体運動を外側から観察し、「物理的事実」として数値化しようとする。しかし、われわれの考察した「潜り込み」という方法では、コーチは選手の身体感覚を内側から捉えるのである。こうした内側からの認識が外側からの認識よりも正確であるのは当然のことであろう。もっとも、こうした考察はまだ緒についたばかりである。しかし、少なくとも、本稿ではその一端を示すことはできた、と考える。

3つ目は「新しい理論設定の提示」である。通常、社会学理論は「主体－客体」という枠を採用している。この枠は、主体と客体を独立した実体として想定し、その上で両者がかかわりあうと想定している。それゆえ、主体と客体の直接的な関係が捉えにくくなるのである。しかし、「体験の社会学」では、「体験」（分節以前の経験）と「経験」（分節以後の経験）を区別するとともに、それぞれの経験が生ずる世界——たとえば「生成の世界」と「定着の世界」、「持続する世界」と「持続しない世界」——を区別している。それゆえ、「主体－客体」関係は、2つの世界において捉えられるのだ。つまり、こうした理論設定——包括的用語として「存在－存在者」の枠と呼んでおく——によって、「体験」の生ずる世界における「主体－客体」関係への道が拓かれるのである。たとえば、ダブルプレーの成立はいかにして可能なのか。もちろんそこでは細かい思考や判断が作動している。しかし、実際のプレーはそうした思考や判断を経たあとに行われるのではないだろう。そうではなく、少なくともそのプレーに参加する選手たちは、すでに潜在的に相互浸透している（＝お互いの動きを「なぞっている」）、と考えるべきである。あるいはまた、こうした理論設定は2つの世界の移行の問題を惹起してくるだろう。この点について、われわれは、不十分な考察ではあれ、ベルクソンの直観論や「動的図式」論を通して、多少の道筋はつけることができた、と考える。

4つ目は「スポーツ界への貢献」である。特に、第4章と第5章では、「体験」を導くコーチングについて論じた。そこでは、感覚であれ、運動であれ、あるいは言葉でさえ、その

使い方によっては——つまり「動的図式」を活性化させるものであれば——「体験」を誘発できる、ということが示されている。筆者の知るかぎり、コーチングの現場では、もはや社会化のコーチング(=「強制」)の限界が露呈しており、いかにして「体験」を誘発するか、この点が喫緊の課題となっている。実際、理論枠組や用語の差はあれ(たとえば「選手をゾーンに導くにはどうすれば良いか」)、いくつかの探求が散見される(ex. 平尾 2014、平尾・内田 2015、志岐 2008)。もっとも、「体験」を導くコーチングは、まだ緒についたばかりと言えよう。

5 つ目は「研究領域の拡大」という点である。「主体—客体」という枠ではなく「存在—存在者」という枠を採用することで、深さの程度や質という問題が射程に入ってくる。たとえば、超社会化を導く「体験」、あるいは脱・超社会化を導く「体験」は、もちろん測定することはできないが、スポーツの種類や競技水準の差異など、種々の事例を分析してみると、いくつかのパターンが見えてくるかもしれない。また、コーチング方法という点ではより研究対象は広がってゆくだろう。つまり、「体験」を導くコーチングのヴァリエーションを増やしてゆく、という作業である。そして、ここでも、やはり、スポーツの種類や競技水準の差異など、種々の事例を分析してやる必要があるであろう。他方、もちろんスポーツ以外に対象を広げることでもある。「身体社会学」で言えば、生命倫理の問題を挙げても良いだろう。たとえば、ターミナルケアにおけるコミュニケーションとは何なのか。死にゆくことが分かっている人の気持ち、これは想像を絶するものであろう。つまり、死にゆく人は「特異性」が際立ってくるのだ。そういう人とどのようにかかわれば良いのだろうか。そこには、ある種の共感など存在しないのだろうか。しかし、もちろん、理論上、そこに相互浸透は成立しうるのだ。

### 第3節 今後の課題

今後の課題を挙げておこう。

1 つ目は、先に述べたように、「体験社会学」の枠組に沿って研究領域を拡大してゆくことである。スポーツの種類、競技水準の差異、コーチング方法の開発、コーチングにおける質の問題、深さの程度という視点、あるいはスポーツ領域以外への適用など、仕事は山積みであると言えよう。

2 つ目は、「体験社会学」の手続きについて、つまり方法論の問題である。先に述べた

ように、実証科学の手続きとは、現象の本質に対して外側から迫ってゆくという方法である。具体的に言えば、様々な要因を列挙して、そこに存在する共通点を探ってゆくのである。特に近年はデータ処理に関する様々な方法が開発されており、分析はどんどん精緻になっている。では、「体験の社会学」ではどのような手続きに沿って研究を進めるべきなのだろうか。おそらく、様々な要因を考慮するところまでは実証科学と同じであろう。しかし、そのあと、道は分かれる。つまり、諸要因間の共通点を探すのではなく、一種の「追体験」（ディルタイ）によって現象の本質に迫ってゆくのである。たとえばバーンアウト者に自分自身を重ねて、あるいはそれに似た自分の経験を延長して、彼らの心身の状態を（イメージの力を借りて）「追体験」するのである。そして、そうした「追体験」の中で、ある種のひらめきを「待つ」のだ。「体験の社会学」を志す研究者はあるいはスポーツのコーチのようなものなのかもしれない。対戦相手のクセを見抜こうと毎日毎日観察しているうちに、ふっと違和感に気づく。そうしたものなのである。つまり、「体験の社会学」の方法とは、一種の「追体験」を通して、何かがひらめくのを「待つ」という方法なのだ。それゆえ、実証科学の手続きと比べて、かなり生産性の低い方法である、と言わねばならない。この点にこそ、あるいは「体験の社会学」が敬遠される理由があるのかもしれない。しかし、いずれにしても、われわれとしては、もっと明確な仕方で、「体験の社会学」の方法を定式化する必要があるだろう。

3つ目は、第3章で指摘した「引導を渡すコーチング」である。本稿では、脱・超社会化を導く「体験」という重要な概念を提起しながらも、それを十分に展開できずに終わっている。というのも、この種の「体験」は「体験」におけるネガティブな側面であり、「体験」を「喜び」として規定する本稿の趣旨と齟齬をきたす恐れがあったからである。われわれは、超社会化のコーチングのみを扱うにとどめた。しかし、脱・超社会化のコーチングは、スポーツ界の現状を思えば、今後ますます重要になってくるはずである。もっとも、こうしたコーチングを明確に提示するためには、「体験」の概念をもっと深めてゆく必要があるだろう。たとえば、比喩的に言えば、超社会化を導く「体験」は「生」であり、脱・超社会化を導く「体験」は「死」である。では「生」と「死」はどのような関係にあるのだろうか。生の哲学の立場からすれば、「生は死を含んでいる」と考えるべきであろう。このことを「体験」の水準で言い換えれば、「体験」とは破壊と創造にほかならず、両者は表裏一体なのだ、となるであろう。われわれは、こうした両者の一致について、いずれ理論化しなければならないだろう。そしてその際、やはり、コーチング論は導きの糸となるであろう。選手を破壊し

つつ、再生させること、この微妙な手際はどのように捉えることができるだろうか。

本稿には、あまり詰められていない理論や論理もあり、その点、不十分であるように見えるかもしれない。しかし、「体験の社会学」という新しい領域を切り開いてゆく1つの試みとして、本稿は相応の理論社会的な価値を有している、と筆者は考えている。

## 参考文献

- Bergson, H., [1889]1959, *Essai sur les données immédiates la conscience*, Presses universitaires de France. (=2002, 合田正人・平井靖史訳『意識に直接与えられたものについての試論—時間と自由—』、ちくま学芸文庫。)
- , 1896, *Matière et mémoire*, Euvres, P.U.F., 1959. (=2007, 合田正人・松本力訳『物質と記憶』、ちくま学芸文庫。)
- , 1919, *L'Énergie spirituelle*, Euvres, P.U.F., 1959. (=2012, 原章二訳『精神のエネルギー』、平凡社ライブラリー。)
- , [1932]1941, *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, Presses Universitaires de France. (=1979, 森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』澤瀉久敬編『世界の名著六四 ベルクソン』、中央公論新社。)
- , 1934, *La pensée et le mouvant*, Presses Universitaires de France. (=1965, 矢内原伊作訳、『思想と動くもの』、白水社。)
- Bette, K-H. und Schimank, U., 1995, *Doping im Hochleistungssport*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main. (=2001, 木村真知子訳『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点—』、不昧堂出版。)
- Blinde, E. M. and Greendorfer, S. L., 1985, “A Reconceptualization of the Process of Leaving the Role of Competitive Athlete,” *International Review for the Sociology of Sport*, 20, 87-94.
- Bollnow, O. F., 1955, *Dilthey: Eine Einführung in seine Philosophie*, Verlag W. Kohlhammer (Stuttgart) . (=1977, 麻生健訳『ディルタイ—その哲学への案内—』、未来社。)
- , 1958, *Die Lebensphilosophie*, Verständliche Wissenschaft, 70 BD. Springer Verlag. (=1975, 戸田春夫訳『生の哲学』、玉川大学出版部。)
- Bolz, N., 1997, *Die Sinn-gesellschaft*, Econ Verlag, München-Düsseldorf GmbH. (=1998, 村上淳一訳『意味に飢える社会』、東京大学出版会。)
- Chevalier, J., 1959, *Entretiens avec Bergson*, Librairie Plon, Paris. (=1969, 仲沢紀雄訳『ベルクソンとの対話』、みすず書房。)



- Coakley, J., 1992, "Burnout Among Adolescent Athletes: A Personal Failure or Social Problem?," *Sociology of Sport Journal*, 9, 271-285.
- Coakley, J., 2009, "From the Outside in: Burnout as an Organizational Issue," *Journal of Intercollegiate Sports*, 2, Human Kinetics, inc., 35-41.
- Crook, J. M. and Robertson, S. E., 1991, "Transition out of elite sport," *International Journal of Sport Psychology*, 22, 115-127.
- Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play*, Jossey-Bass. (=2000、今村浩明訳『楽しみの社会学(改題新装版)』、新思  
索社。)
- Curtis, J. and Ennis, R., 1988, "Negative Consequences of Leaving Competitive Sport: Comparative Findings for Former Elite-Level Hockey Players," *Sociology of Sport Journal*, 5, 87-106.
- Durkheim, É., 1895=1960, *Les Règles de la méthode sociologique*, Presses Universitaires de France. (=1978、宮島喬訳『社会学的方法の規準』、岩波文庫。)
- , 1897=1960, *Le Suicide: étude de sociologie*, nouvelle edition, 3e trimestre, Presses Universitaires de France. (=1985、宮島喬訳『自殺論』、中公文庫。)
- , 1914=1970, "Le dualism de la nature humaine et ses conditions sociales," *La science sociale et l' action*, P.U.F. (=1983、小関藤一郎訳「人間性の二元性とその社会的条件」『デュルケーム宗教社会学論集』、行路社。)
- , 1925, *L' Éducation Morale*, Librairie Felix Alcan. (=1964、麻生誠・山村健訳『道徳教育論(1)』、明治図書出版。)
- , 1955, *Pragmatisme et Sociologie*, cours inédit prononcé à la Sorbonne en 1913-1914 et restitué par Arman Cuvillier d' après des notes d' étudiants., Paris., Librairie Philosophique J., Vrin. (=1976、福鎌忠恕他訳『プラグマティズムと社会学』、関書院。)
- Freudenberger, H., 1980, *Burn out*, Carol Mann Liberty Agent, New York. (=1981、川勝久訳、『燃えつき症候群 バーンアウト』、三笠書房。)
- 藤井奈津子、2002、「ベルクソンにおける創造性の理論」『臨床教育人間学』第4号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座。
- Gallway, W. T., 1997, *The Inner Game of Tennis*, Random House, Inc. (=2000、後藤

- 新弥訳、『新インナーゲーム』、日刊スポーツ出版社。）
- Geertz, Clifford., 1973, “Deep Play: Notes on the Balinese Cockfight,” *The Interpretation Culture*, selected essays, Basic Books, Inc. (=1987、吉田禎吾。柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳「ディーププレーバリの闘鶏に関する覚え書き」『文化の解釈学〔Ⅱ〕』、岩波現代選書。)
- Guttman, A., 1978, *From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*, Columbia University Press. (=1981、清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』、TBSブリタニカ。)
- 蓮實重彦、2004、『スポーツ批評宣言—あるいは運動の擁護—』、青土社。
- Herrigel, E., 1948, *Zen in der Kunst des Bogenschiessens*. (=1981、稲富栄次郎・上田武訳『弓と禅』、福村出版。)
- 檜垣立哉、2000、『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』、勁草書房。
- 平尾剛・内田樹、2015、『ぼくらの身体修行論』、朝日新聞出版。
- 平尾剛、2014、『近くて遠いこの身体』、ミシマ社。
- 生田久美子、1987、『「わざ」から知る（認知科学選書）』、東京大学出版会。
- 生田久美子・北村勝朗編、2011、『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ』、慶応義塾大学出版会。
- 稲垣正浩・今福龍太・西谷修、2009、『近代スポーツのミッションは終わったか—身体・メディア・世界—』、平凡社。
- 井上俊、1993=2000、「スポーツ社会学の可能性」『スポーツと芸術の社会学』、世界思想社。
- 石毛宏典、2009、『石毛宏典の「独立リーグ」奮闘記』、アトラス出版。
- 亀山佳明、2000、「社会化論を超えて」亀山佳明他編『野生の教育をめざして』、新曜社。
- 、2006、「引退論序説: transition 問題と trans-socialization」『日本教育社会学会大会発表要旨集』(58)、日本教育社会学会:87-88。
- 、2012、『生成する身体社会学 スポーツ・パフォーマンス フロー体験/リズム』、世界思想社。
- 、2013、「「身体論の可能性」、その後—制度の身体論から体験の身体論へ—」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』、創文企画。
- 金子明友、2002、『わざの伝承』、明和出版。
- 木下英俊、2010、「コツ身体知に関する指導者自身の動感創発分析の意義について—マット運動伸膝後転の事例から—」『スポーツ運動学研究』23、スポーツ運動学研究会:15-24。

- 倉島哲、2007、『身体技法と社会学的認識』、世界思想社。
- 黒田亮、1923=1980、『勤の研究』、講談社学術文庫。
- 、1928=1981、『続 勤の研究』、講談社学術文庫。
- Kelly, H., 1983, Love and Commitment,” Kelly, H. et al. eds., *Close Relationships*, W. H. Freeman, 265-314.
- 岸順治・中込四郎、1989、「運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定の試み」『体育学研究』34、日本体育学会：235-243
- 小丸超、2006、「生成の社会学の生成過程—作田社会学研究序説—」『龍谷大学大学院紀要 社会学・社会福祉学』第13号、龍谷大学大学院社会学研究科研究紀要編集委員会。
- 、2008、「生成する時間・定着の時間：社会学におけるリズム研究の位置づけ」『龍谷大学大学院紀要 社会学・社会福祉学』第15号、龍谷大学大学院社会学研究科研究紀要編集委員会。
- 、2008、「時間・リズム・パフォーマンス—時間の社会学からの一考察」『パフォーマンス行動とリズムとの関係の研究—スポーツ・武道・芸能・遊戯を中心に—』、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書。
- 、2010、「スポーツ選手の引退に関する一考察：日本野球独立リーガーの場合」『ソシオロジ』第55巻2号、社会学研究会：73-88。
- 、2012、「アスリートバーンアウトの概念に関する一考察」『龍谷大学社会学部紀要』第40号、龍谷大学社会学部紀要編集委員会。
- 、2013、「「コツ」をつかむとはどういうことか—特に身体的技能の習得に注目して—」『龍谷大学社会学部紀要』第42号、龍谷大学社会学部社会学部学会。
- 、2015、「戸塚ヨットスクール論」『体罰問題の研究』、龍谷大学社会学部共生社会研究センター。
- 久保真人、2004、『セレクション社会心理学 23 バーンアウトの心理学 燃え尽き症候群とは』、サイエンス社。
- Lerch, S. H., 1981, “Adjustment to Retirement of Professional Baseball Players,” Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. eds., *Sociology of Sport: Diverse Perspectives*, Leisure Press, 138-148.
- 、1984, “Athletic Retirement as Social Death: An Overview,” Theberge, N. and Donnelly, P. eds., *Sport and Sociological Imagination*, Texas Christian

- University Press, 259-272.
- Levin, M. A. et al., 2005, "Career Transition," Taylor, J. and Wilson, G. S. eds., *Applying sport psychology: Four perspectives*, Human Kinetics, 249-266.
- 前田英樹、2013、『ベルクソン哲学の遺言』、岩波現代全書。
- Martens, R., 2004, *Successful Coaching: Third Edition*, ASEP. (=2013、大森俊夫・山田茂監訳、『スポーツ・コーチング学—指導理念からフィジカルトレーニングまで—』、西村書店。)
- Mills, C. W., 1963, *Power, Politics and People*, The collected essays of C. Wright Mills edited and with an introduction by Irving Louis Horowitz, Oxford University Press, New York. (=1971、青井和夫・本間康平監訳、『権力・政治・民衆』、みすず書房。)
- 中込四郎・岸順治、1991、「運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究」『体育学研究』35、日本体育学会：313-323。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部、2001a、『日本国語大辞典第三巻』、小学館。
- 、2001b、『日本国語大辞典第五巻』、小学館。
- 落合博満、2003、『落合博満の超野球学① バッティングの理屈』、ベースボール・マガジン社。
- O' Connor, J., & Lages, A., 2007, *How Coaching Works: The Essential Guide to the History and Practice of Effective Coaching*, Bloomsbury Publishing Plc. (=2012、杉井要一郎訳、『コーチングのすべて—その成り立ち・流派・理論から実践の指針まで—』、英知出版。)
- 大澤真幸、1990、『身体の比較社会学 I』、勁草書房。
- Persons, T. and Shils, E. A., 1954, *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press. (=1960、永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』、日本評論社。)
- Petipas, A. et al., 1997, *Athlete's guide to career planning*, Human Kinetics. (=2005、田中ウルヴェ京・重野弘三郎訳『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』、大修館書店。)
- Polanyi, M., 1962, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, The

- University of Chicago Press, Corrected edition. (=1985、『個人的知識——脱批判哲学をめざして——』、ハーベスト社。)
- , 1966, *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London. (=1980、佐藤敬三訳、『暗黙知の次元——言語から非言語へ——』、紀伊国屋書店。)
- Raedeke, T. D., 1997, “Is Athlete Burnout More Than Just Stress? A Sport Commitment Perspective,” *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 19, Human Kinetics Publishers, Inc., 396-417.
- Raedeke, T. D., and Smith, A. L., 2009, *The Athlete Burnout Questionnaire Manual*, West Virginia University.
- Rosenberg, E., 1981, “Gerontological Theory and Athletic Retirement,” Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. eds., *Sociology of Sport: Diverse Perspectives*, Leisure Press, 118-126.
- , 1984, “Athletic Retirement as Social Death: Concepts and Perspectives,” Theberge, N. and Donnelly, P. eds., *Sport and Sociological Imagination*, Texas Christian University Press, 245-258.
- Rusbult, C. E., 1983, “A Longitudinal Test of the Investment Model: The Development (and Deterioration) of Satisfaction and Commitment in Heterosexual Involvements,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 101-117.
- 作田啓一、1972、『価値の社会学』、岩波書店。
- 、1992、「生成の世界と定着の世界」『書齋の窓』、有斐閣。
- 、1993、『生成の社会学をめざして 価値観と性格』、有斐閣。
- 、1994、「バタイユにおける連続性の概念」『日仏社会学会年報』2、日仏社会学会：1-17。
- 、1995、「ベルクソンの社会哲学」『三次元の人間 生成の思想を語る』、行路社。
- 佐藤誠、2000、『『コツ』の発生に関するモルフォロギー的考察』『スポーツ運動学研究』13、スポーツ運動学研究会：31-39。
- Schlossberg, N. K., 1981, “A Model for Analyzing Human Adaptation to Transition,” *The Counseling Psychologist*, 9(2), 2-18.
- Schmidt, G. W. and Stein, G. L., 1991, “Sport Commitment: A Model Integrating Enjoyment, Dropout, and Burnout,” *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 8,

- Human Kinetics Publishers, Inc., 254-265.
- 志岐幸子、2008、『岡田武史監督と考えた「スポーツと感性」』、日本経済新聞出版社。
- Silva III, J. M., 1990, “An analysis of the Training Stress Syndrome in Competitive Athletics,” *Applied Sport Psychology*, 2, 5-20.
- Smith, R. E., 1986, “Toward a Cognitive-Affective Model of Athletic Burnout,” *Journal of Sport Psychology*, 8(1), 36-50.
- 菅原和孝、2013、「身体化の人類学に向けて」菅原和孝編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者——』、世界思想社。
- Swain, A. D., 1991, “Withdrawal from Sport and Schlossberg’s Model of Transitions,” *Sociology of Sport Journal*, 8, 152-160.
- ターナー・B、2005、「身体社会学の過去そして未来——研究アジェンダの確立」大野道邦他編『身体社会学 フロンティアと応用』、世界思想社。
- 豊田則成・中込四郎、2000、「競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制下の検討」『体育学研究』45、日本体育学会:315-332。
- Weber, M., 1922, “Soziologische Grundbegriffe,” *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr. (=1972、清水幾太郎訳、『社会学の根本概念』、岩波文庫。)
- Weinberg, R. S. and Gould, D., 2011, “Chapter 21 Burnout and Overtraining,” *Foundations of Sport and Exercise Psychology, Fifth Edition*, Human Kinetics, 493-512.
- 吉田毅、1989、「大学競技者におけるバーンアウトの発生機序に関する事例研究：特に指導者との相互作用に注目して」『体育・スポーツ社会学研究』8、体育・スポーツ社会学研究会：183-207。
- 、1992、「スポーツ選手のバーンアウトに関する社会学的研究：社会学的概念規定への試み」『体育の科学』42 (8)、杏林書院：640-643。
- 、1994、「スポーツ的社会化論からみたバーンアウト競技者の変容過程」『スポーツ社会学研究』2、日本スポーツ社会学会：67-79。
- 、2006、「アスリートのキャリア問題」菊幸一他編『現代スポーツのパースペクティヴ』、大修館書店:210-227。
- 吉田毅・山本教人・多々納秀雄、1999、「—研究資料— スポーツ選手のリタイアメントに関する社会学的研究 —先行研究の動向—」『健康科学』21、九州大学健康科学センタ

ー:69—75。

- 結城匡啓、1999、「長野オリンピックのメダル獲得に向けたバイオメカニクスのサポート活動：日本スピードスケートチームのスラップスケート対策」『体育学研究』44：33-41。
- 、2005、「邪魔をしないコーチング—研究者かつコーチの眼と思考（後編）」『月刊トレーニングジャーナル』3月号：57-61、ブックハウス・エイチディ。
- 、2011、「スピードスケート指導者が選手とつくりあげる『わざ』世界—積み上げ、潜入し、共有する」生田久美子他編『わざ言語—感覚の共有を通しての『学び』へ』、慶応義塾大学出版会。

## 初出一覧

第2章 「アスリートバーンアウトの概念に関する一考察」『龍谷大学社会学部紀要』第40号、龍谷大学社会学部紀要編集委員会、2012。

第3章 「スポーツ選手の引退に関する一考察：日本野球独立リーガーの場合」『ソシオロジ』第55巻2号、社会学研究会：73-88、2010。

第5章 「「コツ」をつかむとはどういうことか—特に身体的技能の習得に注目して—」『龍谷大学社会学部紀要』第42号、龍谷大学社会学部社会学部学会、2013。

以上は本論文のために加筆・修正している。また以上に挙げた箇所以外は書き下ろしである。